

平成 30 年度 修士論文

留学生の地域国際交流活動への参加に関する研究  
—学園都市八王子市を例にして—

首都大学東京 都市環境科学研究科 都市システム科学域  
17887411 杜 明慧  
指導教員 長野 基

## 目次

図表一覧	4
第一章：はじめに	6
1-1 研究背景	6
1-2 研究目的	10
1-3 用語の定義	11
1-4 研究対象地	13
1-5 研究方法	15
1-6 論文の構成	17
第二章：先行研究と仮説モデル	19
2-1 先行研究レビュー	19
2-2 先行研究への考察	23
2-2-1 参加要因について	23
2-2-2 阻害要因について	25
第三章：留学生向けの地域国際交流活動の種類	30
3-1 学校外の地域国際交流活動	30
3-1-1 学校外の地域国際交流活動の背景	30
3-1-2 八王子国際協会の活動	32
3-1-3 大学コンソーシアム八王子の活動	34
3-1-4 八王子市の留学生地域貢献活動	35
3-2 学校内の地域国際交流活動	36
3-2-1 大学国際課・国際センターの活動	36
3-2-2 留学生組織の活動	40
3-3 組織間の地域国際交流活動の比較	43
第四章：留学生の地域国際交流活動への参加の現状	47
4-1 インタビュー調査の概要	47
4-1-1 インタビュー対象者及び実施方法	47
4-1-2 インタビューにおける調査項目	49
4-1-3 倫理的な配慮	49
4-2 組織別で見る留学生の地域国際交流活動への参加状態	49

第五章：地域国際交流活動への参加要因 -----	52
5-1 分析方法 -----	52
5-2 参加要因に関するカテゴリー -----	54
5-3 参加要因への考察 -----	56
第六章：地域国際交流活動への阻害要因 -----	68
6-1 分析方法 -----	68
6-2 参加要因に関するカテゴリー -----	70
6-3 参加要因への考察 -----	72
第七章：留学生の地域国際交流活動の参加への提言 -----	91
第八章：まとめ -----	101
8-1 本研究の知見 -----	101
8-2 本研究の限界 -----	104
資料	
参考文献 -----	105
謝辞 -----	106
研究安全倫理委員会審査資料 -----	107

## 図表一覧

### 図：

- 図 1 留学生数の推移
- 図 2 外国人学生の国内における就職状況
- 図 3 地域国際交流活動の定義
- 図 4 八王子市の在留資格の割合
- 図 5 研究の枠組み
- 図 6 参加要因モデル
- 図 7 阻害要因モデル
- 図 8 東京都外国人人数
- 図 9 参加経験の有無
- 図 10 学校内と学校内の活動に参加する人数
- 図 11 組織別活動の参加人数
- 図 12 参加要因モデル(修正版)
- 図 13 阻害要因モデル(修正版)
- 図 14 阻害要因と提言の対応
- 図 15 参加要因と提言の対応
- 図 16 参加要因モデル(修正版)の再掲
- 図 17 阻害要因モデル(修正版)の再掲

### 表：

- 表 1 外国人市民の増加に対する考え方
- 表 2 留学後の苦労
- 表 3 八王子市外国人在留比較の割合
- 表 4 八王子市における大学等キャンパス在籍外国人留学生数（2016年5月1日）
- 表 5 倫理的配慮のための方法
- 表 6 先行研究まとめ
- 表 7 先行研究分類表
- 表 8 2018年度八王子国際協会における地域国際交流活動一覧表
- 表 9 2018年度大学コンソーシアム八王子における地域国際交流活動一覧表
- 表 10 2018年度八王子市の留学生地域貢献活動における地域国際交流活動一覧表
- 表 11 首都大学東京国際課活動一覧表
- 表 12 2018年度帝京大学の国際課・国際センターの活動
- 表 13 2018年度中央大学の国際課・国際センターの活動
- 表 14 2018年度創価大学の国際課・国際センターの活動
- 表 15 Hands の活動
- 表 16 国際交流アシスタントの活動

- 表 17 創価大学留学生会の活動
- 表 18 各組織の活動の比較
- 表 19 インタビュー対象者一覧表
- 表 20 インタビュー対象者の活動への参加状況
- 表 21 データの分析の例
- 表 22 先行文献から取り出したコード一覧表
- 表 23 先行研究で提示していないコード一覧表
- 表 24 参加要因一覧表
- 表 25 他人への貢献意識について調査対象の語り
- 表 26 知識や技術の学び及び発揮について調査対象の語り
- 表 27 友人関係について調査対象の語り
- 表 28 「消極」的参加について調査対象の語り
- 表 29 自己肯定感の高まりについて調査対象の語り
- 表 30 時間の余裕について調査対象の語り
- 表 31 コストの低さについて調査対象の語り
- 表 32 活動の内容について調査対象の語り
- 表 33 データの分析の例(阻害要因)
- 表 34 先行文献から取り出したコード一覧表
- 表 35 先行研究で提示していないコード一覧表
- 表 36 阻害要因一覧表
- 表 37 言語力不足について調査対象の語り
- 表 38 余暇時間不足について調査対象の語り
- 表 39 情報不足について調査対象の語り
- 表 40 社会関係資源不足について調査対象の語り
- 表 41 個人的志向について調査対象の語り
- 表 42 情報発信不足について調査対象の語り
- 表 43 コストについて調査対象の語り
- 表 44 活動の内容について調査対象の語り
- 表 45 差別の抑制の失敗について調査対象の語り
- 表 46 提言と参加要因と阻害要因の対応関係表

# 第一章 はじめに

## 1-1 研究背景

1980年代から、グローバル化の進展が顕著になった。グローバル化の進展により、世界中に移動しているのは資本だけではなく、ヒトも世界中に移動している。

2018年12月、政府は外国人労働者の受け入れ拡大に関する基本方針などを閣議決定した。2019年4月には、人手不足の分野で一定の技能を持つ人を対象に新たな在留資格「特定技能」が創設されることにより、今後、多くの外国人が受け入れられると予測される。

以前でも、外国人を大量に受け入れる計画があった。労働力としての受け入れではなく、世界中の優秀な人材を確保するために、1983年、文部科学省は「留学生10万人計画」を策定した。また、2008年、文部科学省は「留学生30万人計画」を策定した。日本の「グローバル戦略」の一環として、2020年に日本国内の外国人留学生を、当時の14万人から30万人に増やすというものである。この計画により、大学では年々留学生の数が増える傾向がある。そして、独立行政法人日本学生支援機構の調査<sup>1</sup>により、2017年5月1日の時点で外国人留学生は267,042人を達成し、前年度より27,755人増えた。留学生数の推移は図1の通りである。

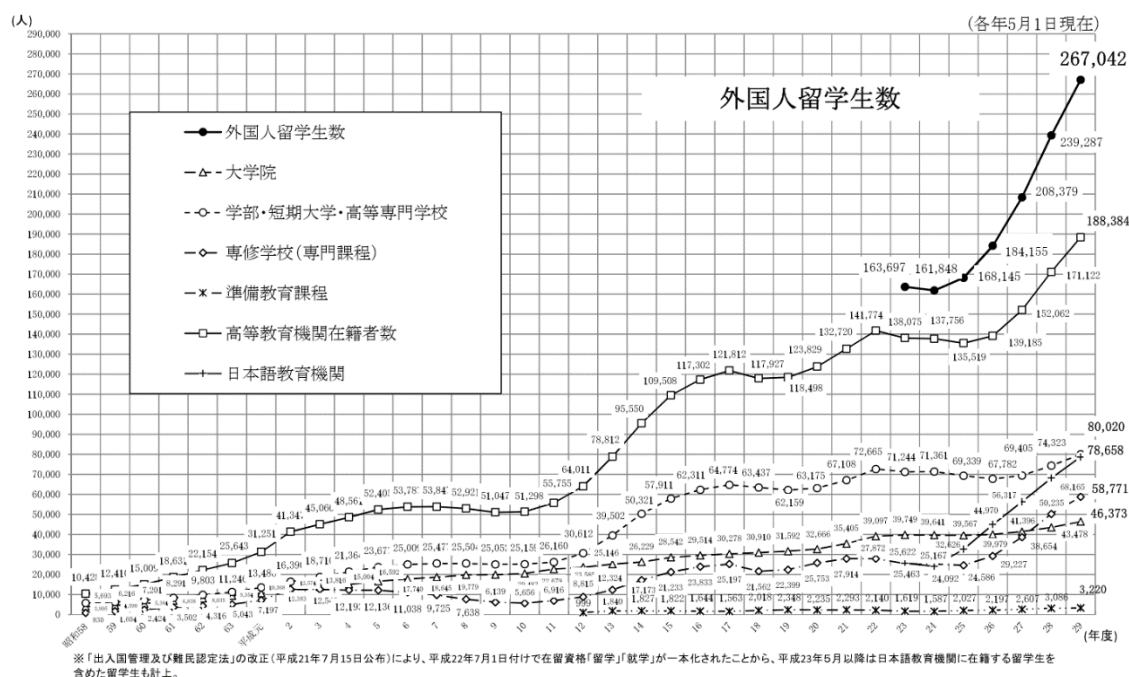


図1 留学生数の推移

(出典：独立行政法人日本学生支援機構 2017年留学生在籍状況調査)

<sup>1</sup>独立行政法人日本学生支援機構(2017) 「平成29年度外国人留学生在籍状況調査結果」

[https://www.jasso.go.jp/about/statistics/intl\\_student\\_e/2017/index.html](https://www.jasso.go.jp/about/statistics/intl_student_e/2017/index.html) (2018年12月21日閲覧)

経済の活性化と国際競争力を高めるために、2015年、内閣府は関係省庁・団体と連携し、「外国人材活躍推進プログラム」<sup>2</sup>を実施し、このプログラムにより、日本で就職を希望する留学生を支援することを開始した。独立行政法人日本学生支援機構2015年の「私費外国人留学生生活実態調査」<sup>3</sup>により、卒業後日本において就職を希望する学生は63.6%であった。しかし、独立行政法人日本学生支援機構2016年の調査<sup>4</sup>によると、実際に日本において就職した留学生は全体の31.1%だけであった(図2)。「日本再興戦略改訂2016」<sup>5</sup>において、外国人留学生の日本における就職率を3割から5割へ向上させることを閣議で決定した。また、2018年8月、菅義偉官房長官は、留学生が大学など卒業後も日本国内で働けるよう在留資格を見直す方針を明らかにした<sup>6</sup>。この方針により、多くの留学生は卒業後日本で就職し、定住することが可能になると考える。留学生が日本で就職することを支援するために、八王子市と八王子国際協会が毎年、留学生のための企業めぐりと就職支援セミナーを開催している。

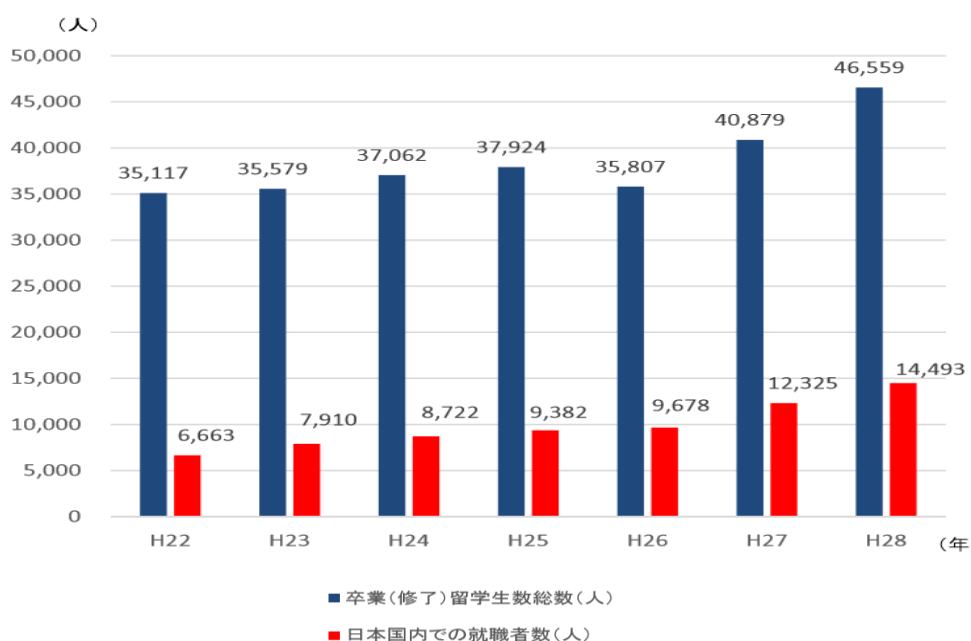


図2 外国人学生の国内における就職状況

(出典：独立行政法人日本学生支援機構「外国人留学生進路等状況調査」H22－28年度)  
留学生の増加と定住は地域の人手不足の問題を解消するという可能性がある。しかし。

<sup>2</sup> 内閣府 HP(2018)「外国人材活躍推進プログラム」(2018年12月21日閲覧)

<https://www.5.cao.go.jp/keizai1/gaikokujinzai/index.html>

<sup>3</sup> 独立行政法人日本学生支援機構(2015)年「私費外国人留学生生活実態調査」(2018年12月21日閲覧)

[https://www.jasso.go.jp/about/statistics/ryuj\\_chosa/h27.html](https://www.jasso.go.jp/about/statistics/ryuj_chosa/h27.html)

<sup>4</sup> 独立行政法人日本学生支援機構(2016)「外国人留学生進路等状況調査」(2018年12月21日閲覧)

[https://www.jasso.go.jp/about/statistics/intl\\_student\\_d/data17.html](https://www.jasso.go.jp/about/statistics/intl_student_d/data17.html)

<sup>5</sup> 「日本再興戦略改訂2016」[https://www.kantei.go.jp/jp/singi/keizaisaisei/pdf/2016\\_zentaihombun.pdf](https://www.kantei.go.jp/jp/singi/keizaisaisei/pdf/2016_zentaihombun.pdf)(2019年1月6日閲覧)

<sup>6</sup> 「西日本新聞」[https://www.nishinippon.co.jp/feature/new\\_immigration\\_age/article/443809/](https://www.nishinippon.co.jp/feature/new_immigration_age/article/443809/) (2018年12月21日閲覧)

文化や生活習慣の違いにより、留学生を受け入れる地域の住民側も留学生側も不安を感じる恐れがある。八王子市が実施した 2016 年の市政モニター調査<sup>7</sup>(表 1)により、八王子市内の外国人の増加について、約 6 割の人が「生活習慣(ゴミの出す方やマナーなど)の違いにより、生活環境が悪くならないか心配」と懸念していた。また、3 割の人が外国人が増えること自体に不安を持っていた。次に独立行政法人日本学生支援機構が実施した 2015 年私費外国人留学生生活実態調査<sup>8</sup>では、「日常生活における母国の習慣(生活習慣、宗教上の習慣)の違い」は留学生の 2 番目の苦勞であった(表 2)。

この不安を解消するためには、お互いにコミュニケーションすることが必要だと考えられる。地域における活動ではコミュニケーションできるため、留学生が地域国際交流活動に参加することが重要だと考えられる。

しかし、筆者が地域国際交流活動に参加した時、留学生の参加者が少なかった。また、現在、留学生の地域国際交流活動参加に関する研究が少ないため、その実態が把握されていない。留学生の地域国際交流活動への参加に関連する要因を明らかにするならば、これからの留学生の支援、あるいは地域国際交流活動の開催に意義があると考えられる。

表 1 外国人市民の増加に対する考え方

	構成比 (%)
生活習慣(ごみの出し方やマナーなど)の違いにより、生活環境が悪くならないか心配	59.3
外国の文化にふれる機会が増える	38.5
外国人の知人・友人ができる	34.1
まちが賑やかになるなど活気がでる	31.9
外国人が増えること自体、なんとなく不安に思う	30.8
外国語を学べる機会が増える	19.8
日本語が通じない人が増えることで、不便、不安に思う	14.3
日本の習慣や街並みなどの景観から日本らしさが失われる	7.7
その他	5.5
特になし	1.1

(出典：八王子市 2016 年の市政モニター調査)

<sup>7</sup>八王子市(2017)「平成 28 年度市政モニター第 2 回アンケート結果」(2018 年 12 月 21 日閲覧)

[https://www.city.hachioji.tokyo.jp/shisei/001/002/005/005/p003046\\_d/fil/28-2annke-tokekka.pdf](https://www.city.hachioji.tokyo.jp/shisei/001/002/005/005/p003046_d/fil/28-2annke-tokekka.pdf)

<sup>8</sup>独立行政法人日本学生支援機構(2015)年「私費外国人留学生生活実態調査」(2018 年 12 月 21 日閲覧)

[https://www.jasso.go.jp/about/statistics/ryuj\\_chosa/h27.html](https://www.jasso.go.jp/about/statistics/ryuj_chosa/h27.html)



表2 留学後の苦勞

区分	物価が高い	日常生活における母国の習慣 (生活習慣、宗教上の習慣等) との違い	宿舎等を 探すこと	宿舎等に おけるルール (ゴミ出し等) を守ること	日本語の習得	英語の習得	学校内で 日本人学生と 交流できない こと
集計 pt	11,834	4,340	2,791	1,276	3,568	2,036	2,303
集計 pt 率 (%)	38.5	14.1	9.1	4.1	11.6	6.6	7.5
人数 (人)	4,254	2,025	1,405	724	1,852	1,169	1,350
率 (%)	70.5	33.5	23.3	12.0	30.7	19.4	22.4
平成25年率 (%)	74.5	27.8	21.6	10.1	30.6	17.3	20.6
平成23年率 (%)	80.8	28.3	23.6	7.8	33.1	13.3	22.4

(出典：独立行政法人日本学生支援機構 2015年私費外国人留学生生活実態調査)

## 1-2 研究目的

本研究では、八王子市の大学に在籍している外国人留学生を研究対象として、まず地域国際交流活動への参加の現状を明らかにする。第二に、参加する理由と参加しない理由を明らかにする。

以上を踏まえ、第三に地域国際交流活動を開催する組織側に留学生を参加させるための留意点について提言することを目的とする。

### 1-3 用語の定義

本研究における「留学生」「地域国際交流活動」「学園都市」「多文化共生」「地域参加」という用語は以下のように定義する。

#### 留学生：

八王子市の高等教育機関(大学、専門学校など)に在籍し、在留資格は「留学」の学生である。(日本語学校を除く)

#### 地域国際交流活動：

地域における国際交流活動は様々な団体が実施されたものである。

本研究で定義した地域国際交流活動は、主に学校外の活動と学校内の活動に分ける。学校外の活動とは、八王子市多文化共生施策の下で、八王子市の留学生地域貢献活動、八王子市国際交流協会に委託する事業の中の活動、大学コンソーシアム八王子事業における留学生支援活動である。

学校内の活動とは、各大学の国際課や国際センターが主催した活動、各留学生組織が行った活動である。

民間団体は、外国人向けの活動が多いが留学生向けの活動が少なく、データが取りにくいいため、調査対象外とする。

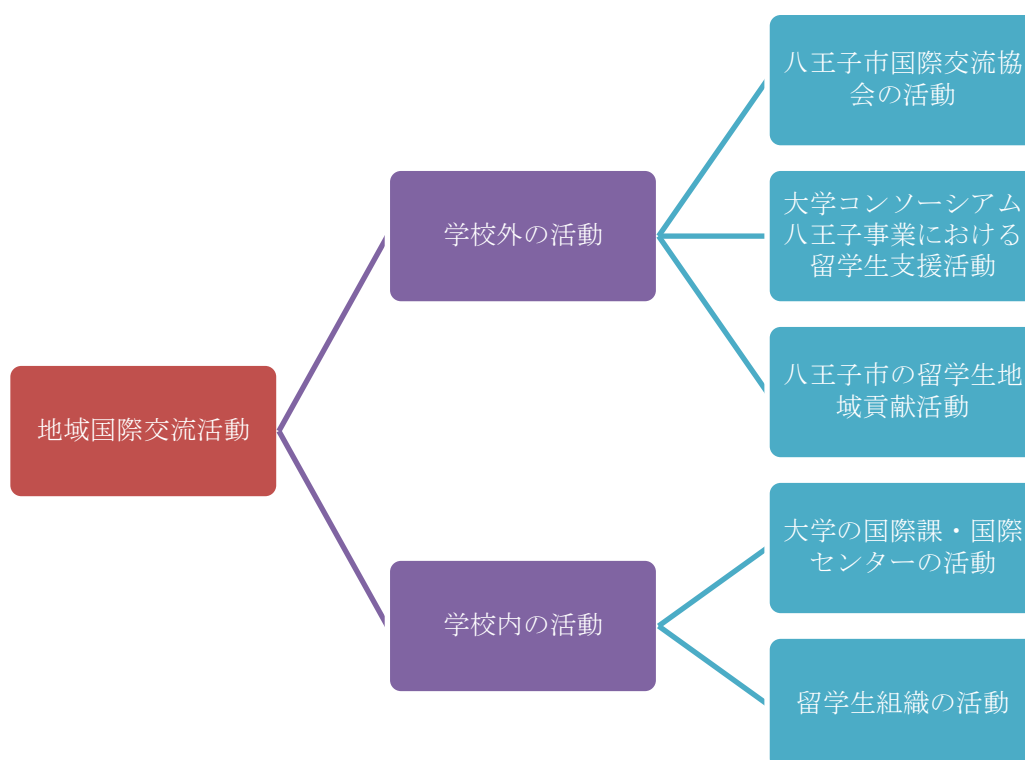


図3 地域国際交流活動の定義

**学園都市：**

大学などの高等教育機関と研究機関を中心として発達した都市。

**多文化共生：**

多文化共生は、日本の中で広く浸透しているが、そのルーツは欧米諸国の多文化主義にあるとされる。多文化主義(multiculturalism)は、人種、エスニシティ、宗教、性別、性的指向、言語における人々の多様性を尊重するという方針や動きを表す用語である<sup>9</sup>。1990年代から次第に多文化共生という用語が全国的に使われるようになった<sup>10</sup>。

総務省の「多文化共生の推進に関する研究報告書」では、「国籍や民族などの異なる人々が、お互いの文化的違いを認め合い、対等な関係を築こうとしながら、地域社会の構成員として共に生きていく。」<sup>11</sup>と定義している。本研究では学校外の活動と関連する多文化共生はこの定義を用いる。

**地域参加：**

地域における町内会や、企業、NPO 団体などが開催している活動に参加することである。(例：祭りなど伝統行事、ボランティア活動など。)

---

<sup>9</sup> 石井敏・久米昭元編集 (2013) 『異文化コミュニケーション事典 = Encyclopedia of intercultural communication』 春風社

<sup>10</sup> 毛受敏浩(2016) 『自治体がひらく日本の移民政策-人口減少時代の多文化共生への挑戦』 明石書店

<sup>11</sup> 総務省「多文化共生の推進に関する研究報告書」総務省 [http://www.soumu.go.jp/kokusai/pdf/sonota\\_b5.pdf](http://www.soumu.go.jp/kokusai/pdf/sonota_b5.pdf)(2018年12月30日閲覧)

#### 1-4 研究対象地

1959年、東京都心で年間20万人を超える人口増加が、交通渋滞や住環境の悪化を招いた。当時の人口増長の主な原因は工場及び大学の新設であった。国は人口の増加を制限するために、「首都圏の既成市街地における工業等の制限に関する法律」を制定し、工場と大学の立地を制限した。この法律では、工場等制限区域内においては、制限施設（1500平方メートル以上の床面積を持つ大学の教室）を新設又は増設してはならないこととされている<sup>12</sup>。これにより、都心で大学の校舎の面積を拡大することが難しくなった。

1960年代後半以後、東京都心のキャンパスが郊外のところに移転し、工学院大学、帝京大学、中央大学、首都大学東京(当時の東京都立大学)などの大学のキャンパスが八王子市に開設され、学園都市と呼ばれることになった。

現在、八王子市は学園都市として全国で有名である。八王子市には、21の大学、短期大学、高等専門学校があり、約10万人の学生が在籍している。その中で、約3600人の留学生がいる。日本では、外国人人口が一番多いのは東京都である。東京都内のいくつかの学園都市がある。八王子市、小金井市、国立市、小平市は東京都における学園都市である。その中で、留学生人口が把握できないため、八王子市の外国人人口が一番多いため、八王子市という学園都市を対象地とする。

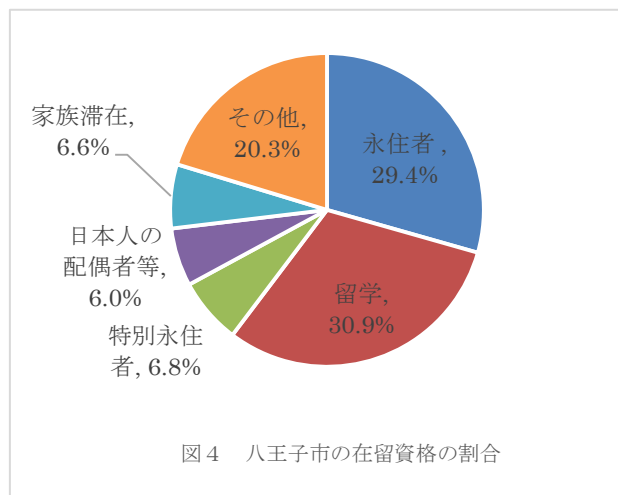
八王子市に在住している外国人の在留資格を見ると、「留学」という資格は約3割に占めていて、八王子市には一番人数が多い在留資格である。

表3 八王子市外国人在留比較の割合

在留資格	永住者	留学	特別永住	日本人の配偶者等	家族滞在	その他
人数	3598	3778	825	733	809	2476
割合	29.4%	30.6%	6.8%	6.0%	6.6%	20.3%

(出典：八王子市多文化共生推進プラン<sup>9)</sup>より筆者作成)

<sup>12</sup> 国立公文書館デジタルアーカイブ(2018年12月31日閲覧)<https://www.digital.archives.go.jp/DAS/meta/listPhoto?LANG=default&BID=F0000000000000110535&ID=&TYPE=&NO=>



(出典：八王子市多文化共生推進プラン<sup>9)</sup>筆者作成)

## 1-5 研究方法

### 文献調査

本研究はまず、外国人の地域参加、ボランティア活動への参加、市民参加、高齢者の社会参加など文献から、参加要因と阻害要因と取り出した、分析する。その後、留学生の地域国際交流活動への参加要因と阻害要因仮説モデルを作る

### インタビュー調査

モデルの正確さを検証するために、また、留学生の地域国際交流活動への参加現状を明らかにするために、応募法と機縁法を使う。各大学の国際課や留学生会の紹介を通じて、大学コンソーシアム八王子の調査で示した(表4)八王子市における留学生の人数最も多い5つの大学に在籍している外国人留学生31人に半構造化面接を行う。本研究は研究安全倫理委員会の承認を得た上で実施した(承認番号:H30-96)。調査対象への倫理的配慮のための方法は表5の通りである。

また、留学生の地域国際交流活動への参加に影響する要因を明らかにするために、八王子市、各大学の国際課、留学生団体のリーダー、また外国人に関する活動・イベントを主催する団体に半構造化面接を行う。

半構造化面接の内容を文字起こし、文字データに小見出しをつけ、KJ法を用いて要因ごとに分類する。その後、インタビュー調査で取り出した要因と仮説モデルに照らし合わせ、モデルを修正する。

表4 八王子市における大学等キャンパス在籍外国人留学生数(2016年5月1日)

	中国		韓国		台湾		その他アジア		ヨーロッパ		北米		中南米		オセアニア		アフリカ		中近東ほか		合計		
	総数	うち市内在住	総数	うち市内在住	総数	うち市内在住	総数	うち市内在住	総数	うち市内在住	総数	うち市内在住	総数	うち市内在住	総数	うち市内在住	総数	うち市内在住	総数	うち市内在住	総数	うち市内在住	
工學院大学	7	5	0	0	3	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	5	4	16	12	
明星大学	39	0	1	0	2	0	6	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	49	0	
東京工業高等専門学校	0	0	0	0	0	0	8	8	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	8	8	
帝京大学	333	143	49	28	5	5	30	14	1	0	0	0	0	0	2	2	1	0	4	1	425	193	
帝京短期大学	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	
東京造形大学	69	17	16	1	3	1	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	91	19	
東京純心大学	1	1	2	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4	2	
香林大学	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
多摩美術大学	145	21	82	12	21	3	8	1	10	3	1	0	3	0	0	0	0	0	0	0	270	40	
創価大学	105	95	112	104	18	16	125	102	21	21	20	20	24	21	5	4	11	10	5	5	446	398	
創価女子短期大学	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
東京薬科大学	6	4	2	1	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	9	6	
拓殖大学	256	187	19	14	21	18	78	60	3	2	1	0	0	0	2	2	3	2	4	2	387	287	
中央大学	526	89	113	21	26	6	67	7	35	13	8	2	0	0	5	0	1	1	6	3	787	142	
日本文化大学	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
法政大学	99	45	48	25	4	2	4	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	155	74	
東京工科大学	95	60	16	12	4	3	22	19	2	1	0	0	1	1	0	0	0	0	0	73	54	213	150
首都大学東京	223	110	33	16	14	5	76	39	23	2	5	1	2	2	6	0	1	1	0	0	383	176	
山野美容芸術短期大学	56	8	13	7	3	2	40	7	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	112	24	
ヤマザキ学園大学	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	
デジタルハリウッド大学	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
合計	1,962	786	507	242	126	64	467	259	96	42	35	23	30	24	20	8	18	15	97	69	3,358	1,532	

(出典:大学コンソーシアム八王子「大学コンソーシアム八王子加盟校に関する調査」<sup>10)</sup>)

表5 倫理的配慮のための方法

項目	対応方法
<p>研究対象者への影響 (身体的・精神的負荷、 その他リスク)と対策・措 置</p>	<p>インタビュー調査は1時間程度と考えるが、研究対象者に身体的・精神的負荷をかけないため、インタビュー途中で休み時間を設け、やさしい日本語を使う。</p>
<p>研究対象者への説明方 法・同意確認、謝金の支 払</p>	<p>インタビューを行わせていただく留学生の方へは、調査内容やプライバシー保護などを記載した依頼書を事前にメールで送る。また、インタビュー前に口頭でも説明を行い、同意を得て、同意書にサインをしていただくようにする。そして、対象者の同意が得られた場合にのみインタビューを行う。インタビューへの参加に同意しないことをもって不利益な対応を行うことは一斉ない。もし、インタビューの途中で対象者が不快を感じた場合、あるいは答えられない場合は強制的に答えを求めることも決してない。インタビューへの参加は任意であること、また同意後であっても、いつでも不利益を受けることなく撤回することができることを事前に、十分にご説明申し上げる。 謝金の支払いはない。</p>
<p>データ収集方法・処理に おけるプライバシー保 護のための措置</p>	<p>本調査は(安全な)ICレコーダーでインタビューの内容を録音する。インタビューの内容は修士論文研究のみに使用し、それ以外の目的では使用しない。また、個人情報は一切公開しない。データ処理する時と修士論文を公表する時は、個人の名前が特定できないように配慮する。研究遂行者である杜明慧だけが録音データの逐語録を作成する。音声データ等の個人情報が含まれるデータをパソコンで処理する際は、インターネットに接続していないパソコンを使用し、マスターCD以外にUSB等の媒体にはコピーしないことを徹底する。卒業後は指導教員が鍵のかかる保管庫等にて概ね5年程度保管する。もしインタビューを録音したデータを修士論文にそのまま引用する場合は、研究対象者から承諾が得られた場合に限る。</p>
<p>研究成果の公開方法な ど</p>	<p>修士論文で公開する。研究対象者の名前を公開しない</p>



## 1-6 論文の構成

本研究は以下のように構成される。

### 第一章：はじめに

本研究の背景、目的、論文で使った用語の定義、研究対象地及び研究方法について述べる。

### 第二章：先行研究と仮説モデル

ボランティア活動への参加、市民参加、外国人の地域参加、高齢者の社会参加など様々な分野での先行文献の中で、留学生の地域国際交流活動の参加とふさわしい要因を取り出し、仮説モデルと立てる。

### 第三章：留学生向けの地域国際交流活動の種類

八王子国際協会の活動、大学コンソーシアム八王子の活動、八王子市の留学生地域貢献活動という学校外と活動と大学国際課・国際センターの活動と留学生組織の活動という学校内の活動を整理し、比較する。

### 第四章：留学生の地域国際交流活動への参加の現状

留学生へのインタビューの概要を整理し、第三章が提示した地域国際交流活動への参加状況を明らかにする

### 第五章：地域国際交流活動への参加要因

インタビューを通じて、参加要因を取り出し、仮説モデルと照らし合わせ、考察した上で、参加要因モデルを修正する。

### 第六章：地域国際交流活動への参加の阻害要因

インタビューを通じて、阻害要因を取り出し、仮説モデルと照らし合わせ、考察した上で、阻害要因モデルを修正する。

### 第七章：留学生の地域国際交流活動の参加への提言

参加要因と阻害要因を踏まえ、留学生を地域国際交流活動に参加させるに提言する。

### 第八章：まとめ

本研究での知見を整理し、本研究の限界を提示し、今後の課題を整理する。

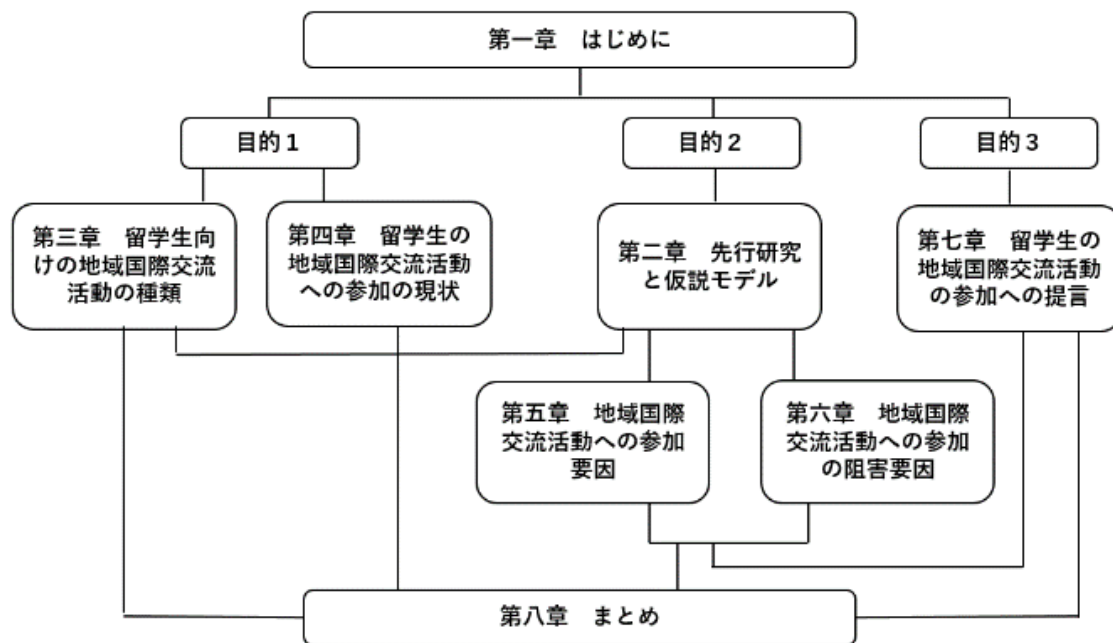


図5 研究の枠組み

## 第二章：先行研究と仮説モデル

本章は先行研究のレビューから得た知見により、仮説モデルを構築する。仮説モデルを構築するために、留学生の地域国際交流活動への参加に関する要因と阻害要因に関わる先行研究を調査した。しかし、CiNii で「留学生」「地域」「国際交流活動」「要因」というキーワードを検索すると、関連する文献は0件であった。つまり、留学生の地域国際交流活動への参加に関する要因と阻害要因に関する先行研究がほとんどいないと考えられる。本章では、ボランティア活動への動機、日本人と外国人が地域活動や類似する活動に参加する動機や阻害要因などの先行研究をレビューし、留学生にあてはまるところを取りまとめ、仮説モデルを構築する。

### 2-1 先行研究のレビュー

本節はボランティア活動、市民参加、外国人の地域参加などの研究と調査のレビューを行う。

#### ボランティアモチベーションについて

ボランティアモチベーションについての研究は「利他主義アプローチ」、「利己主義アプローチ」、「複雑アプローチ」の3つに分類できると考えられる。

川口ほか(2005)<sup>1)</sup>では「利他主義アプローチ」はボランティア活動が他人のことだけ考え、奉仕精神に基づいて行われる活動であり、「利己主義アプローチ」は、ボランティア活動は利己的、自分勝手なモチベーションを持つ存在であり、「複雑アプローチ」は利他主義動機、利己主義動機を合わせて、それ以外の動機も含むものであると述べている。桜井(2007)<sup>2)</sup>は、利他主義と利己主義と比べて、複雑アプローチが多面的で、柔軟性があり、ボランティアの動機を多様に捉えることができると述べた。本研究は、留学生が地域国際交流活動に参加する要因を多様に捉えるために、複雑アプローチを採用する。

複雑アプローチの代表的なモデルは Clary et al.(1998)<sup>3)</sup>が提唱している VFI モデルである。VFI モデルは6つの機能要因に分類している。

①Values:(価値) ボランティア活動は、他者に対する利他主義や人道的な懸念に関連する。

「One function that may be served by involvement in volunteer service centers on the opportunities that volunteerism provides for individuals to express values related to altruistic and humanitarian concerns for others. 」<sup>13</sup> (Clary et al.,1998, p.1517)

②Understanding(理解) ボランティア活動により、新しい知識や経験が学べる。

「A second function potentially served by volunteering involves the opportunity for

---

<sup>13</sup> Clary, E.G., Snyder, M., Ridge, R.D., Copeland, J., Stukas, A.A., Haugen, J., & Miene, P. (1998) . Understanding and assessing the motivations of Volunteers: A functional approach. *Journal of Personality and Social Psychology*, 74, 1516–1530.

volunteerism to permit new learning experiences and the chance to exercise knowledge, skills, and abilities that might otherwise go unpracticed.] (Clary et al.,1998, p.1518)

③Social (社会) 友達とのつながりはボランティア活動に参加する一つの要因である。

「A third function that may be served by volunteering reflects motivations concerning relationships with others. Volunteering may offer opportunities to be with one's friends or to engage in an activity viewed favorably by important others.」(Clary et al.,1998, p.1518)

④Career (キャリア) ボランティア活動はキャリアに利益を与える一つの要因である。

「A fourth function that may be served by volunteering is concerned with career-related benefits that may be obtained from participation in volunteer work. (Volunteering is a means of preparing for a new career or of maintaining career-relevant skills.)」(Clary et al.,1998, p.1518)

⑤Protective (保護) 自分より不幸な人を助けることにより、自分の問題を忘れさせる。

「A fifth function traces its roots to functional theorizing's traditional concerns with motivations involving processes associated with the functioning of the ego. In the case of volunteerism, may serve to reduce guilt over being more fortunate than others and to address one's own personal problems.」(Clary et al.,1998, p.1518)

⑥Enhancement(強化) ボランティア活動に参加することにより、自尊心や自己肯定感を高めることができる

「Some respondents report that they volunteer for reasons of personal development or to obtain satisfactions related to personal growth and self-esteem. Thus, in contrast to the protective function's concern with eliminating negative aspects surrounding the ego, the enhancement function involves a motivational process that centers on the ego's growth and development and involves positive strivings of the ego.」(Clary et al.,1998, p.1518)

Clary et al.(1998)<sup>3)</sup>はボランティア経験者とアメリカの大学生を調査対象として、モデルの正確さを証明した。

日本の研究について、坂野(2002)<sup>4)</sup>は東京都 A、B 大学および中国・四国地方の C、D 大学に在籍する 2500 人を対象に調査した。その結果、「protective」「values」「career」「social」「understanding」「enhancement」から構成されるモデルはおおむねデータに適合することが示され、VFI の妥当性が確認できた。

桜井(2007)<sup>2)</sup>は京都市内で活動しているボランティア活動 287 名に調査を行い、その調

査の結果からボランティア動機を7つに分類した。<sup>14</sup>

- ①自分探し：時間の余裕と自信のなさを結ぶ動機
- ②利他心：他者への貢献意識
- ③理念の実現：ボランティア活動により、個人的・組織的な理念を実現する
- ④自己成長と技術習得・発揮：ボランティア活動により、自分の可能性を試し、技術を習得・発揮すること
- ⑤レクリエーション：友達作りや活動を楽しむこと
- ⑥社会適応：人から誘われたこと
- ⑦テーマや対象への共感：以前、自分も対象者と同じ境遇だったので、よりよい活動が利用者に対してできる

## 市民参加

篠原(1977)<sup>5)</sup>には、政治への市民参加が進む条件の中で、「費用の負担を市民が引き受けられること」。その費用が主に時間のことを指す。時間は市民参加に影響する要因とされる。

## 日本における外国人の地域参加

亀田(2015)<sup>6)</sup>は授業の中で企業やNPO法人、市民団体などが行う活動に参加した留学生に対し、活動の参加における問題点を調査した結果、日本語によるコミュニケーションを問題として指摘していた留学生が20%存在することを示した。この結果から、留学生の日本語コミュニケーション能力は地域国際交流活動の参加に影響する要因だと予測される

大阪市(2009)<sup>7)</sup>では、外国籍住民に対し、地域の行事・イベント等への参加状況を調査した。およそ3分の2の回答者が、これらの活動に参加していなかった。留学生との年齢層がほぼ一致している「20～39歳」の対象者では、「行事に参加する時間がない」が最も高く、また、「参加したいが、どうしたら参加できるかわからない」と回答した人が3割近くを占める。つまり、活動に参加する時間がないと活動に参加する方法が分からないが大阪市「20～39歳」の外国人の主な阻害要因である。

また、活動に参加する理由について、「20～39歳」では、「地域の人に誘われた(たのまれた)から」と「活動が楽しそうだったから」がいずれも44.4%に達していた。地域の人に誘われたと活動の参加が楽しいそうということが大阪市の20歳から39歳の外国人の主な参加要因である。

近藤ほか(2015)<sup>8)</sup>は日本語の不安や多言語で準備されたものに欠陥があるなどの要因で留学生が情報弱者になることを明らかにした。

## 資源理論

森岡(2016)<sup>9)</sup>は社会的資源の中で、関係という資源があり、関係量が多い人とそうではな

<sup>14</sup>桜井政成(2007)『ボランティアマネジメント：自発的行為の組織化戦略』ミネルヴァ書房 pp34-36

い人に関係という資源の保有量に差異があると述べる。親しい友人や仲間の数が多い人は、友達と共に活動し、外出や活動参加に誘われるという可能性である。その誘いがきっかけとなって地域の活動参加に至ることも多くなると考えられる。

## 高齢者の社会参加

柴田(2007)<sup>10)</sup>は高齢者の社会参加の関連要因の中で、地域環境・組織要因が含まれると指摘した。その要因には、活動の場へのアクセスや交通の利便性が検討されている。

以上の先行研究により、参加要因と阻害要因を分けて、整理したものは表 6 の通りである。

表 6 先行研究まとめ

	参加要因	阻害要因
Clary et al.(1998) <sup>3)</sup>	・価値・理解・社会 ・キャリア・保護 ・強化	ない
桜井(2007) <sup>2)</sup>	・自分探し・利他心 ・理念の実現 ・自己成長と技術習得・発揮 ・レクリエーション ・社会適応 ・テーマや対象への共感	ない
篠原(1977) <sup>5)</sup>	・時間のゆとり	時間のゆとり
亀田(2015) <sup>6)</sup>	ない	日本語
大阪市(2009) <sup>7)</sup>	・地域の人に誘われた(たのまれた)から ・活動が楽しそうだったから	・行事に参加する時間がない ・参加したいが、どうしたら参加できるかわからない
近藤ほか(2015) <sup>8)</sup>	ない	情報
森岡(2016) <sup>9)</sup>	友人	友人
柴田(2007) <sup>10)</sup>	アクセス	アクセス

以上の先行研究から出した項目には、類似する項目がある。それらの項目を統合し、留学生特徴とあてはまるかどうかを確認した上で、仮説モデルを作成する。

## 2-2 先行研究への考察

### 2-2-1 参加要因について

## 【個人要因(動機)】

本研究における留学生の地域国際交流活動への参加の個人要因は主にボランティアモチベーションの研究に参照しているものである。

### ①他人への貢献意識

Clary et al.(1998)<sup>3)</sup>のモデルで「価値」という要因は主に利他主義を言える。桜井(2007)<sup>2)</sup>の調査結果の中の「利他心」も他者への貢献意識を表す。また同じ調査結果の中の「テーマや対象への共感」とは、自分も対象者と同じ境遇があったため、よりよい活動が利用者に対してできるという考え方である。この考え方も、結局、他人のために貢献する意識と考え、それゆえ、同じグループに入れた。その三つの要因はすべて利他的な要因であるため、「他人への貢献意識」という名をつけた。

本研究では定義している地域国際交流活動の中で、ボランティア活動もある。留学生は自分の国と日本を結ぶ橋として、自分の知識を利用し、日本と自分の国の交流に貢献することができる。また、留学生は自分の留学の経験を活かし、他の留学生を手伝うことができると考える。それゆえ、「他人への貢献意識」は留学生にもあてはまると考え、「他人への貢献意識」は一つの参加要因だと考える。

### ②知識や技術の学びと発揮

Clary et al.(1998)<sup>3)</sup>のモデルで「理解」という要因があり、これはボランティア活動により、新しい知識や経験が学べるということを表す。同じモデルでの「キャリア」という要因では、ボランティア活動に通して、自分が持っている知識や技術を試すという意味が含まれる。桜井(2007)<sup>2)</sup>モデルでは、「自己成長と技術習得・発揮」という要因がある。その要因はボランティア活動に通して、知識や技術を身につけたい、発揮したいというものを指す。それゆえ、筆者はこの要因は「知識や技術の学びと発揮」と名付けた。

留学生は日本に来て、地域国際交流活動の参加により、日本文化など新しい知識を学ぶことができる。また、地域国際交流活動を通じて、出身国の文化を紹介するなど、出身国で学んだ知識などを発揮することができる。そのために、「知識や技術の学びと発揮」は留学生にあてはまり、一つの参加要因だと考える。

### ③友人関係

Clary et al.(1998)<sup>3)</sup>のモデルで「社会」という要因は、友達とのつながりということを使い換える。桜井モデルは「友達作り」を「レクリエーション」という要因に含ませる。森岡(2016)<sup>9)</sup>も親しい友人や仲間の数が多い人は、友達と共に活動し、外出や活動参加に誘われるという可能性がある」と述べている。人に会うと友達を作りたいは全部友達と関係があるため、「友人関係」を名付けた。

留学生も友人や知り合いの人が必ずいると考える。友人や知り合いから誘われ、地域国際交流活動に参加する人がいると考える。また、留学生は日本に来たばかりの時、友達が

少ないと考える。友達を作るために、地域国際交流活動に参加すると考える。つまり、「友人関係」が留学生の地域国際交流活動に参加する要因の一つだと考える。

#### ④「消極」的参加

大阪市(2009)<sup>7)</sup>が20歳から39歳の外国人について調査したところ、「地域の人に誘われた(たのまれた)から」という理由で、地域イベントに参加している。また、桜井(2007)<sup>2)</sup>は人に誘われたことを「社会適応」と定義した。また、桜井(2007)<sup>2)</sup>モデルでは、「理念の実現」という要因の中で「地域や学校、職場での勧め」という項目があり、この項目も人から誘われるという意味が含まれている。

「友人関係」で定義したように、主に友人が誘って、自分も友人と一緒に参加したいという積極的な参加がある。しかし、留学生に対して、友達からの誘いだけでなく、先生や学校の先輩とか、断れない誘いが存在するという可能性もある。これは自ら積極的に参加するのではなく、上下関係など断れないという社会関係のゆえに参加する。それは積極的とは相対する消極的参加であるため、この要因を「『消極』的参加」と名付けた。この要因も留学生の地域国際交流活動に参加する要因の一つだと考える。

#### ⑤自己肯定感

Clary et al.(1998)<sup>3)</sup>のモデルで「保護」という要因は、自分より不幸な人を助けることにより、自分の問題を忘れさせるということである。「強化」という要因は「保護」以上に利己的な動機と言えるが、「保護」とは違って、ポジティブで、自尊心や自己肯定感を高めるということである。桜井(2007)<sup>2)</sup>は「保護」と似たような要因は「自己探し」だと言った。

実用日本語表現辞典によると、自己肯定感とは、自分のあり方を積極的に評価できる感情、自らの価値や存在意義を肯定できる感情などを意味する言葉である。留学生も地域国際交流活動に参加することにより、嫌なことを忘れ、気分転換し、自分の価値を肯定し、自己肯定感を高めるために参加するという可能性がある。自己肯定感という言葉はこの要因にふさわしいために、「自己肯定感」という名をつけた。「自己肯定感」も留学生の地域国際交流活動に参加する要因の一つだと考える。

#### ⑥時間の余裕

篠原(1977)<sup>5)</sup>には、「費用の負担を市民が引き受けられること」は政治への市民参加が進む条件の中の一つであるが、そこで費用とは主に時間のことを指す。つまり、時間は市民参加に影響する要因であると主張している。また、桜井(2007)<sup>2)</sup>モデルで「自分探し」がある。自分探しの中で、時間の余裕が含まれる。

留学生は、授業やアルバイトがある。しかし、それ以外の時間に、つまり余裕がある時間があれば、活動に参加するという可能性がある。それゆえ、「時間の余裕」も留学生が地域国際交流活動に参加する一つの要因だと考える。



## 【組織要因】

### ⑦アクセスの利便性

柴田(2007)<sup>10)</sup>は高齢者の社会参加の関連要因の中で、地域環境・組織要因が含まれると指摘した。その要因には、活動の場へのアクセスや交通の利便性が検討されている。

筆者はこのような要因は留学生の地域国際交流活動にも通用していると考え。もし開催する場所が学校、あるいは駅周辺などアクセスが便利なところなら、留学生にとってコストはかからない。そのため、活動に参加する可能性が高いと予測し、「アクセスの利便性」は一つの参加要因だと考える。

大阪市(2009)<sup>7)</sup>の調査で「活動が楽しそうだったから」を選んだ人が多かったが、活動を楽しそうに感じた理由は不明である。「活動が楽しそうだったから」が他の要因に含まれると考えるため、仮説モデルに入れない。

## 2-2-2 阻害要因について

## 【個人要因】

### ①日本語力不足

亀田(2015)<sup>6)</sup>は日本語によるコミュニケーションを問題が地域活動への参加の問題点の一つであると指摘していた。留学生が日本語でコミュニケーションがうまくできないと、活動の組織側との連絡もできないし、地域の住民や活動に参加する日本人と交流できないため、地域国際交流活動に参加したくないという可能性があると考え。それゆえ、留学生の日本語能力は地域国際交流活動の参加に阻害要因だと予測される。その要因を「日本語力不足」と名付ける。

### ②余暇時間不足

大阪市(2009)<sup>7)</sup>では、外国籍住民が地域の行事・イベント活動に参加していない理由について、回答者が最も多いのが、「行事に参加する時間がない」である。留学生は授業やアルバイトが忙しいため、活動に参加しないという可能性がある。そのために、時間がないことも留学生が地域国際交流活動に参加していない理由なのではないかと予測される。その要因を「余暇時間不足」と名付ける。

「余暇時間不足」を「時間不足」と「経済力不足」に分けられると考える。「時間不足」とは、授業が多いため、参加しないということである。「経済力不足」とは家庭の経済状況がよくないため、アルバイトが多いということである。アルバイトが多いという理由は留学生家庭の経済状況がよくないであると考え、この要因を出した。

### ③情報収集力不足

近藤ほか(2015)<sup>8)</sup>は日本語の不安や多言語で準備されたものに欠陥があるなどの要因で留学生が情報弱者になることを明らかにした。また、大阪市(2009)<sup>7)</sup>の調査では、参加する方法という情報がわからないため、参加しない人が多いと明らかになった。それゆえ、活動の情報を知らないのも、留学生が地域国際交流活動に参加できないのではないかと予測される。

情報が知らない原因はさらに、留学生自身の原因と活動を企画する組織側の原因に分けられると考える。留学生個人的な要因は主に留学生が自ら情報を探す方法がわからないため、留学生が活動の情報が得られないということである。その要因を「情報収集力不足」と名付ける。

#### ④社会関係資源不足

森岡(2016)<sup>9)</sup>は社会的資源を「財力」、「勢力」、「評価」、「知力」、「関係」という五つに分類し、関係という資源について、関係量が多い人とそうではない人の間に関係という資源の保有量に差異があると述べた。

すなわち、この文献から推進されることは、友人という資源の保有量が少ないと、誘ってくれる人が少ないため、地域国際交流活動に参加する機会がすくなくなるのではないか。留学生にとって、自分の経歴や性格により、日本で親しい人の数が違う。親しい人の中で、一緒に地域国際交流活動に参加する人がいれば、留学生が活動に参加する可能性が高いと推測される。逆に言えば、一緒に活動に参加する親しい人がいないことは留学生の地域国際交流活動への参加することの阻害要因だと予測される。その要因を「社会関係資源の不足」と名付ける。

#### 【組織要因】

#### ⑤活動の場所が遠い

柴田(2007)<sup>10)</sup>は高齢者の社会参加の関連要因について、地域環境・組織要因は一つの要因であると指摘した。その要因には、活動の場へのアクセスや交通の利便性のことが検討されている。八王子市の地域が広いと、活動が開催する場所は必ずしも留学生にとってアクセスしやすくないと考える。それゆえ、活動の場が遠いのは阻害要因の一つの要因と予測される。その要因を「活動の場所が遠い」と名付ける。

#### ⑥情報発信不足

地域国際交流活動の情報が手に入らない原因としては、留学生の情報収集力不足だけでなく、組織側が活動の情報発信に力を入れていない可能性がある。筒井(2001)<sup>11)</sup>ではボランティア・コーディネーターについて、活動の情報を知らせることも一つの役割であり、

ボランティアを募集するためのマスコミによる募集など様々な手段を提示した。

しかし、筆者は、地域国際交流活動を開催する組織側は必ずしもすべての方法を用いて情報を発信するわけではなく、組織側が活動の情報を発信する手段が単一である故に、留学生が情報を接触する機会がない、あるいは情報を発信していないことにより、留学生が活動の情報が得られないのではないかと考える。本論文ではそれを「情報発信力不足」と名付ける。

### ⑦組織間の繋がり不足

榎田(2004)<sup>12)</sup>は国際交流団体に対して、ネットワークの形成は重要性を指摘しており、ネットワークが形成されれば、情報交換を行うことが可能となり、一つの組織の力で収集できない情報を入手することができるかと述べた。

筆者は組織間のネットワークが不十分である場合、つまり、組織間の繋がりが不足しているため、組織側は他の組織の活動を発信せず、自分の組織の活動の情報だけ発信するという可能性があり、留学生が活動の情報が得られないと考える。この組織間の連携不足による発信不足という要因を論文では「組織間の繋がり不足」と名付ける。

先行研究から出した類似する項目を統合し、留学生特徴とあてはまる参加要因と阻害要因は表7のように分類できると考える。

表7 先行研究分類表

	参加要因	阻害要因
個人要因	他人への貢献意識	日本語力不足
	知識や技術の学び及び発揮	余暇時間不足
	友人関係	情報収集力不足
	「消極」的参加	社会関係資源の不足
	自己肯定感	
	時間の余裕	
組織要因	アクセスの利便性	活動の場所が遠い
		情報発信不足
		組織間の繋がり不足

### 参加理由モデル

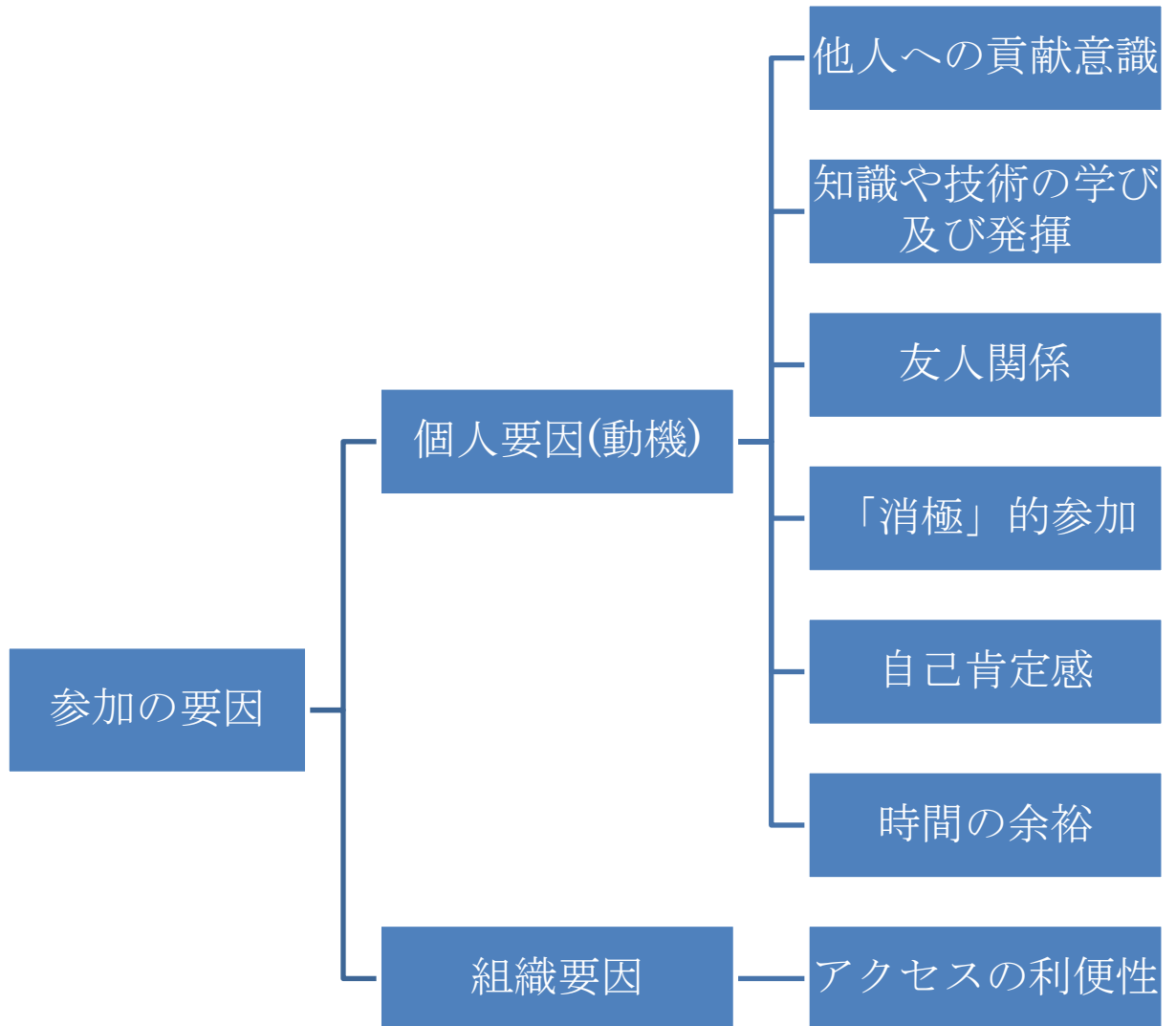


図6 参加要因モデル

阻害要因モデル

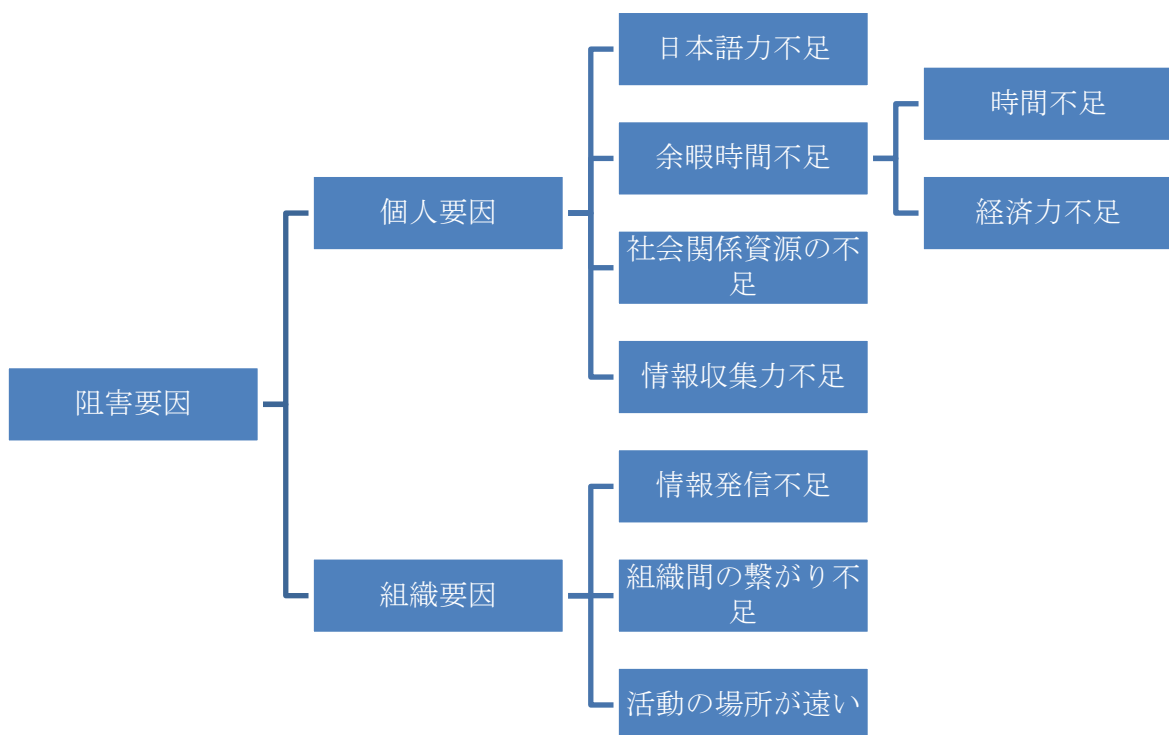


図7 阻害要因モデル

第三章 留学生向けの地域国際交流活動の種類と留学生の参加の現状

本研究の目的の一つは留学生の地域国際交流活動への参加を把握することである。そのため、本章は本研究で定義された地域国際交流活動の種類を記述し、それぞれの活動に参加した留学生の人数を把握し、各種活動を比較する。

本研究で定義された地域国際交流活動は大きく学校外の活動と学校内の活動という2つの種類に分けられると考える。学校外の活動は八王子市多文化共生推進プランの中で、事業として行っている活動である。学校内の活動とは各大学の国際課や国際センターが主催した活動と各留学生組織が行った活動である。学校外の活動が実施主体により分類されると、さらに、八王子国際協会の活動、大学コンソーシアム八王子事業における留学生支援活動、八王子市の留学生地域貢献活動である。

### 3-1 学校外の地域国際交流活動

本節では、学校外の地域国際交流活動は「八王子市多文化共生推進プラン」<sup>15</sup>と関連する活動である。そのため、まず「八王子市多文化共生推進プラン」が策定された背景について記述する。多文化共生社会を実現するためと謳われ、国と東京都の施策を明らかにしたうえで、具体的な活動と関連する八王子市の施策を把握する。次に実施する側にある八王子国際協会の活動、大学コンソーシアム八王子事業における留学生支援活動、そして、八王子市の留学生地域貢献活動をそれぞれ具体的な活動と参加人数を記述する。

#### 3-1-1 多文化共生推進プランの背景

##### 国の現況と政策

2005年、総務省は「多文化共生の推進に関する研究会」<sup>16</sup>を設置した。2006年には「多文化共生の推進に関する研究報告書」<sup>17</sup>が策定された。報告書で多文化共生の定義を示した。また、報告書で外国人も地域の構成員として共に生きていくという観点から、「多文化共生地域づくり」を提言した。その後、各都道府県・政令指定都市の外国人住民施策担当局部長に対して、総務省自治行政局国際室長が「地域における多文化共生推進プランについて」<sup>18</sup>という通知をだした。これに応じて、各地域でプランが作成された。

2008年、総務省は地方公共団体における多文化共生推進事例を調査し、財団法人自治体

---

<sup>15</sup>八王子市(2018)「八王子市多文化共生推進プラン」(2018年12月21日閲覧)

[https://www.city.hachioji.tokyo.jp/kurashi/shimin/004/002/tabunkayouseisuisinpuran/p023108\\_d/fil/planrevision.pdf](https://www.city.hachioji.tokyo.jp/kurashi/shimin/004/002/tabunkayouseisuisinpuran/p023108_d/fil/planrevision.pdf)

<sup>16</sup>総務省 多文化共生の推進に関する研究会 (2018年12月30日閲覧)

[http://www.soumu.go.jp/main\\_sosiki/kenkyu/tabunka\\_kenkyu\\_h30/index.html](http://www.soumu.go.jp/main_sosiki/kenkyu/tabunka_kenkyu_h30/index.html)

<sup>17</sup>総務省(2006)「多文化共生の推進に関する研究報告書」(2018年12月30日閲覧)

[http://www.soumu.go.jp/kokusai/pdf/sonota\\_b5.pdf](http://www.soumu.go.jp/kokusai/pdf/sonota_b5.pdf)(2018年12月30日閲覧)

<sup>18</sup>総務省 多文化共生の推進 [http://www.soumu.go.jp/main\\_content/000400764.pdf](http://www.soumu.go.jp/main_content/000400764.pdf)(2018年12月30日閲覧)

国際協会のホームページ<sup>19</sup>で公表した。

2009年、総務省は地方自治体の多文化共生の取り組みを支援するために、「多文化共生の推進に関する意見交換会」<sup>20</sup>を開催した。

2012年、内閣府は「外国人との共生社会」実現検討会議<sup>21</sup>を開催した。外国人との共生社会を実現するために、環境整備に関する問題に対して、関係省庁を連携して検討した。

## 東京都の現状と政策

東京都は2001年に、外国人も住みやすく、活躍できる街になるためとして、地域国際化推進検討委員会を設置した。生活情報の多言語提供や国際交流協会・支援団体とのネットワークづくりを推進するなど様々な外国人支援事業を実施している。

2018年6月、外国人の人数は約55万人となっている。また、2020年東京都オリンピックの開催により、東京都は東京を訪れる外国人の人数の増長を予想し、2016年、「東京都多文化共生推進指針～世界をリードするグローバル都市へ～」<sup>22</sup>が策定した。

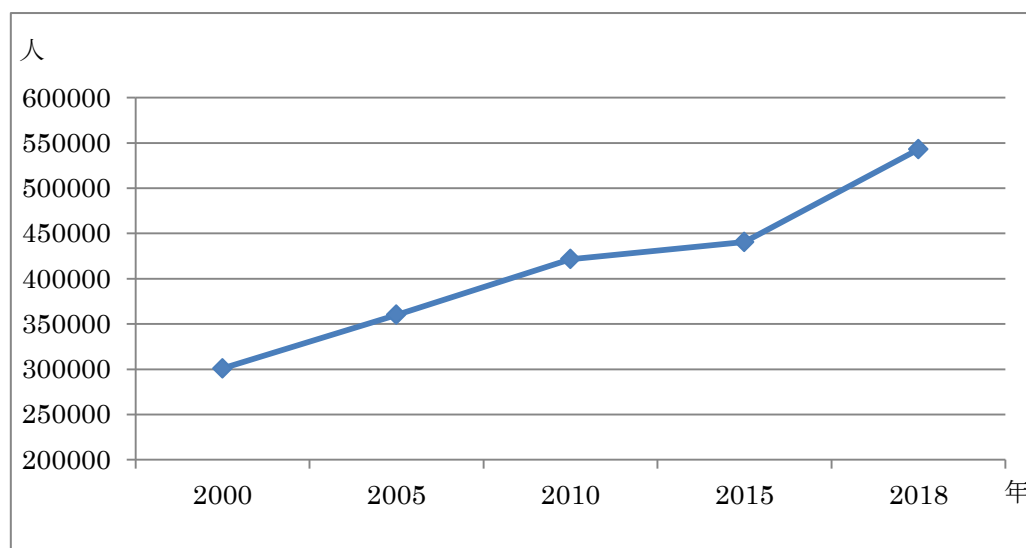


図8 東京都外国人人数

(出典：東京都の統計 外国人人口により筆者作成)

<sup>19</sup>財団法人自治体国際協会 HP <http://www.clair.or.jp/j/multiculture/shiryou/jigyogenre.html>(2018年12月30日閲覧)

<sup>20</sup>総務省 多文化共生の推進に関する意見交換会

[http://www.soumu.go.jp/main\\_sosiki/kenkyu/tabunka/index.html](http://www.soumu.go.jp/main_sosiki/kenkyu/tabunka/index.html)(2018年12月30日閲覧)

<sup>21</sup>内閣官房 外国人との共生社会実現検討会議 <https://www.cas.go.jp/jp/seisaku/kyousei/index.html> (2018年12月30日閲覧)

<sup>22</sup>東京都(2016)「東京都多文化共生推進指針～世界をリードするグローバル都市へ～」(2017年11月22日閲覧)

## 八王子市の現状と施策

2006年9月に、外国人市民の社会参加を推進し、外国人市民と日本人市民がお互いの文化等を理解し、外国人市民にも暮らしやすいまちづくりを進めるためとして、八王子市は「外国人市民会議」<sup>23</sup>を設立した。

2013年3月に、外国人市民会議からの提言や八王子国際化推進プラン検討委員会における議論を経て、「八王子市多文化共生推進プラン」<sup>24</sup>を策定された。

八王子市は2018年10月現在、外国人12,737が暮らしている。八王子市は増加している外国人市民、2020年オリンピック大会、各種プランに対応するためとして、新しい「多文化共生推進プラン」<sup>25</sup>を策定した。

### 3-1-2 八王子国際協会の活動

#### 八王子国際協会とは

八王子国際協会は2008年に設立された。その時の時代的な背景は国際交流だけではなく、多文化社会の推進が注目された。八王子国際協会のホームページにより、このような背景のもとで、交流という視点に加え、外国人を地域の一員として受け入れ、多文化社会を実現するために、八王子国際協会が設立された<sup>26</sup>。

八王子国際協会は様々な市民団体、関係機関や行政と協働し、自主事業や市の補助・委託事業により、活動を行っている。

八王子国際協会の活動の中で、留学生が参加したことがある活動は以下の表8の通りである。

表8 2018年度八王子国際協会における地域国際交流活動一覧表

事業名	活動	2018年参加人数	目的	活動場所
生活・コミュニケーション	語学ボランティア	0人 去年まではいた	協会事業の各種通訳・翻訳のほか、外国人市民のための生	不定

<sup>23</sup> 八王子市 HP 多文化共生推進評議会(2018年12月30日閲覧)

<https://www.city.hachioji.tokyo.jp/kurashi/shimin/004/002/tabunkakyouseisuihyougikai/p000093.html>

<sup>24</sup> 八王子市 HP (2018年12月30日閲覧)

[https://www.city.hachioji.tokyo.jp/kurashi/shimin/004/002/tabunkakyouseisuisinpuran/p023108\\_d/fil/plan.pdf](https://www.city.hachioji.tokyo.jp/kurashi/shimin/004/002/tabunkakyouseisuisinpuran/p023108_d/fil/plan.pdf)

<sup>25</sup> 八王子市(2018)「八王子市多文化共生推進プラン」(2018年12月21日閲覧)

[https://www.city.hachioji.tokyo.jp/kurashi/shimin/004/002/tabunkakyouseisuisinpuran/p023108\\_d/fil/planrevision.pdf](https://www.city.hachioji.tokyo.jp/kurashi/shimin/004/002/tabunkakyouseisuisinpuran/p023108_d/fil/planrevision.pdf)

<sup>26</sup> 八王子市国際交流協会 HP(2018年3月26日閲覧) <http://hia855.com/>



ヨソ支援事業		が、今年はこちらではない。	活情報等や企業、民間団体、個人から依頼される通訳・翻訳を行う	
	留学生のための就職支援セミナー	11人	日本企業への就職を志向する留学生に、就職活動に必要な知識・スキル等を提供する	生涯学習センター
	企業めぐり	3人	日本の企業の実態と良さを知っている	クリエイトホール
	防災・災害対応	18人(八王子市) 2, 3人(町会・自治会)	災害時の外国人支援を学ぶ	八王子市立松が谷中学校及び大塚西公園
国際交流事業	八王子国際交流フェスティバル(留学生の参加者が一番多い)	パフォーマンス 3, 4人 当日の留学生ボランティア 20-30人 前日の準備 10人	イベントや展示、講演などで、外国や日本の文化に触れ、楽しく学ぶことができ、かつ外国人市民と日本人市民が国際交流する	八王子(東急)スクエアビル 11F、12F
	世界の人とふれあいタイム	0人 (年に5回開催、その中の1回は留学生がスピーカーを担当する)	外国人のゲストスピーカーと参加された市民の方々との交流や、国際理解の啓発に取り組む	八王子(東急)スクエアビル 11F
国際理解事業	国際理解教育(学校へ外国人講師を派遣)	5, 6人(まだ途中、全部5学校)	学校での国際理解教育授業への協力	市内の小学校

(出典：八王子市国際交流協会平成 28 年度事業報告<sup>27</sup>及び「地球市民プラザ八王子だより」<sup>28</sup>とインタビュー調査により作成)

### 3-1-3 大学コンソーシアム八王子の活動

#### 大学コンソーシアム八王子とは

<sup>27</sup>八王子市国際交流協会 HP 平成 28 年度事業報告(2019 年 1 月 3 日閲覧)

<http://hia855.com/wp-content/uploads/2014/11/%E5%B9%B3%E6%88%9028%E5%B9%B4%E5%BA%A6%E4%BA%8B%E6%A5%AD%E5%A0%B1%E5%91%8AR.3.pdf>

<sup>28</sup>八王子市国際交流協会 HP(2018 年 3 月 26 日閲覧) <http://hia855.com/>

「大学コンソーシアム八王子」のホームページにより、「大学コンソーシアム八王子」は、2009年に設立されて、大学・市民・経済団体・企業・行政などが連携・協働し、多彩な事業に取り組むことにより、高等教育の充実、地域社会の発展を目指す組織である<sup>29</sup>。

「大学コンソーシアム八王子」では、産学公による共同研究、生涯学習の推進、情報の発信、大学間の単位互換、学生と市民との交流、外国人留学生の支援などの事業に取り組んでいる。

### 大学コンソーシアム八王子における地域国際交流活動

大学コンソーシアム八王子の活動の中で、留学生支援事業がある。この事業により、毎年留学生向けの活動を開催している。2018年に参加した人数は表9の通りである。

表9 2018年度大学コンソーシアム八王子における地域国際交流活動一覧表

活動名	目的と内容	参加人数	活動場所
留学生座談会	留学生の課題を議論する	3	八王子(東急)スクエアビル 11F
八王子まつり山車曳き体験	八王子の伝統文化を体験し、町会の人々とも交流を深める。	17	八王子駅周辺

(出典：大学コンソーシアム八王子 HP 及びインタビューより筆者作成)

<sup>29</sup>大学コンソーシアム八王子 HP <http://gakuen-hachioji.jp/> (2018年12月21日閲覧)

### 3-1-4 八王子市の留学生地域貢献活動

八王子国際協会の事業以外に、八王子市には他の留学生向けの地域貢献活動がある。地域貢献活動の参加者の一部が八王子市奨学金を受給している留学生であるが、奨学金を利用していない留学生も参加することができる。2018年八王子市の留学生地域貢献活動への参加状況は表10の通りである。

表10 2018年度八王子市の留学生地域貢献活動における地域国際交流活動一覧表

活動名	目的	人数	活動場所
留学生のための高齢者者施設訪問	市内の外国人留学生と高齢者の交流を深めていく	14	丘の上デイサービスセンター・片倉町
高尾山観光 PR ボランティア	高尾山の観光案内所で観光客への案内や通訳を行う	50	高尾山
八王子まつり 高雄市パフォーマンス団対応	地域交流を手伝う	10	八王子市
みんなの川の清掃デー	環境を守る 町内会の人々と交流	6	町会・自治会近辺の堤防周辺
八王子まつり	八王子祭りで外国人に案内する	0	八王子駅周辺
八王子市総合防災訓練	市が実施する総合防災訓練に参加し、様々な訓練を体験する。	18	八王子市立松が谷中学校及び大塚西公園

(出典：八王子市 HP<sup>30</sup> 及びインタビューより筆者作成)

### 3-2 学校内の地域国際交流活動

<sup>30</sup> 八王子市 HP 地域貢献活動 (2018年12月21日閲覧)

<https://www.city.hachioji.tokyo.jp/kurashi/shimin/004/005/ryuugakutiikikoukenkatudou/p000104.html>

学校内の地域国際交流活動は大学の国際課・国際センターの活動と留学生組織の活動により構成される。

### 3-2-1 大学の国際課・国際センターの活動

本節は大学で留学生と関わる組織として、各大学の国際課・国際センターが開催する活動について記述する。21 の大学、短期大学、高等専門学校がある。その中で、留学生の数が多い5つの大学の活動を調べたが、拓殖大学国際課・国際センターの資料は公開できないため、首都大学東京、帝京大学、創価大学、中央大学の活動を整理した。

#### 首都大学東京の活動

2018年10月に、首都大学東京に在籍している留学生は606人。2012年から、留学生の数がほぼ毎年増長している。国際課と国際センターが留学生を国際交流活動支援するために、表11の通りに様々な活動を行っている。

表11 首都大学東京国際課活動一覧表

	開催時間	参加人数	目的	活動の場所
留学生セミナー	4月28日	18名、	在籍する留学生及び一般学生を対象として、共同作業や共通体験を通じて、留学生相互の交流及び留学生と一般学生との交流を図るとともに、日本独自の歴史、自然、文化等について理解を深めること。	鎌倉
	6月30日、 7月1日	19名		川越、長瀬
	11月17日、18日	35名		富士山
異文化理解講座(日本の生活)	4月11日、 10月15日	4月：8名 10月：27名	在籍する留学生を対象として、安全かつ快適に日常生活を送ることができるように情報提供及び指導を行い、学修及び研究活動に取り組む環境の向上に役立てること	学校内
異文化理解講座(江戸東京博物館見学)	10月20日	13名	日本の文化などにふれたり、学生同士の交流を通して相互の異文化理解を深める。	江戸東京博物館

新入留学生オリエンテーション	4月5日、 10月中旬	4月： 153名 10月： 98名	新しく入学した留学生を対象に、学習や生活に関することなどについて説明する	学校内
新入留学生ウェルカムパーティー	4月6日、 10月	4月： 190名 10月： 180名	新入留学生の歓迎、在学生・教職員との交流を図る	学校内
外国人留学生のための就職活動ガイダンス	10月24日	28名	日本での就職を考えている外国人留学生に対して、就職環境・就職活動についての情報を提供し、留意点を説明する	学校内
Japan Studies & Field Trips	7月19日、 25日	両日とも 35名	日本の事情や文化について学び、学生間の交流を図る。	学校内、立川、杉並区
フェアウェルパーティー	7月27日	107名	日本語・日本事情短期集中コースの交換留学生の修了パーティー。帰国前にプログラム参加者の親睦を深める。	学校内

(出典：首都大学東京国際課・国際センターの HP<sup>31</sup>及びインタビュー調査の結果により筆者が整理した)

<sup>31</sup>首都大学東京国際センター・国際課 HP <http://www.ic.tmu.ac.jp/> (2018年12月21日閲覧)

## 帝京大学の活動

2018年に帝京大学に在籍している留学生は943名である。2018年度開催している活動は表12の通りである。

表12 2018年度帝京大学の国際課・国際センターの活動

活動	開催時間	参加者人数	目的	活動場所
大学生生活スタートアップセミナー	3月31日 (土)	留学生192人	留学生がこの活動を通して、コミュニケーションの取り方や主体性などを学び、今後の大学生活をスムーズに送れるようになる。	学校内
ニッポン文化体験ツアー	4月14日 (土)	留学生38人	体験ツアーを通して、学部学科はもちろん国籍を超えて学生同士が交流し、留学生活が充実できる	学校内
	9月29日 (土)	留学生24人		学校内
帝京グローバルフェスタ	10月20日 (土)・21日 (日) 10:00～ 16:00	来場者600人	海外の文化や言葉に触れる	学校内

(出典：帝京大学 HP<sup>32</sup>により筆者が整理した)

## 中央大学の活動

2018年10月に中央大学に在籍している留学生は864名である。2018年度開催している活動は表13の通りである。

表13 2018年度中央大学の国際課・国際センターの活動

活動	開催時間	参加者人数	目的	場所
新入留学生歓迎パーティー	毎年4月、9月	把握できない	新入留学生、交換留学生を迎える	学校内
平和セミナー	今年度はまだ開催していない	去年留学生8名	国際交流・異文化交流を促進する	学校内

(出典：中央大学 HP<sup>33</sup>により筆者が整理した)

<sup>32</sup>帝京大学 HP <https://www.teikyo-u.ac.jp/index.html> (2018年12月21日閲覧)

<sup>33</sup>中央大学 HP <http://www.chuo-u.ac.jp/> (2018年12月21日閲覧)

## 創価大学の活動

2018年9月に創価大学に在籍している留学生は約750名である。2018年度開催している活動は表14の通りである。

表14 2018年度創価大学の国際課・国際センターの活動

活動	開催時間	参加者人数	目的	場所
春季新入留学生 歓迎会	4月6日	261名	留学生を迎える	学校内
秋季新入留学生 歓迎会	9月13日	183名	留学生を迎える	学校内

(出典：創価大学 HP<sup>34</sup>により筆者が整理した)

---

<sup>34</sup>創価大学 HP <https://www.soka.ac.jp/> (2018年12月21日閲覧)

### 3-2-2 留学生組織の活動

各大学には国際交流などの目的により設立された学生団体がある。彼らは自らイベントや活動を開催するだけでなく、大学の国際課や国際センターの活動に協力する時もある。また、留学生だけのグループもある。本研究では、国際交流のための学生団体と留学生グループを留学生組織と略称する。本節では、活動が把握できる首都大学東京、帝京大学、中央大学、創価大学のそれぞれ一つの代表的な留学生組織の活動を記述する。

#### Hands の活動（首都大学東京）

Hands は 2010 年 5 月に結成された国際交流ボランティア団体である。留学生・日本人学生・地域の方々がお互いに支え合い、友好関係を深めることを目指し、首都大学東京国際センターと緊密に連携しながら活動している。年間の活動は表 15 の通りである。

表 15 Hands の活動

開催時期	活動名
4 月	新入留学生オリエンテーション・新歓イベント
5 月	全体 MGT・新歓 BBQ
7 月	Hands スポーツ大会
8 月	Hands 小旅行
9 月	Hands キャンプ
10 月	ハロウィンパーティー
12 月	International Party
1 月	マッコリー大学歓迎会

(出典：首都大学東京国際センター・国際課 HP<sup>35</sup> 2018 年 12 月 1 日閲覧)

<sup>35</sup>首都大学東京国際センター・国際課 HP <http://www.ic.tmu.ac.jp/> (2018 年 12 月 21 日閲覧)



### 国際交流アシスタントの活動（帝京大学）

国際交流アシスタントは帝京大学の国際交流と外国人支援を目的とする学生団体である。  
国際交流アシスタントの活動は以下の表 16 の通りである。

表 16 国際交流アシスタントの活動

開催時期	活動名
4月、9月	留学生ガイダンス
4月、9月	留学生バスツアー
4月	新入留学生スタートアップガイダンス
5月、9月	新入留学生歓迎会
5月	スポーツイベント
5月	お団子作りイベント
7月、2月	短期・交換留学生歓送会
7月	夏祭りイベント
10月	ハロウィンパーティー
11月	料理イベント
12月	留学生クリスマスパーティー
1月	もちつき大会

（出典：帝京大学 HP<sup>36</sup> 2018年12月1日閲覧）

<sup>36</sup>帝京大学 HP <https://www.teikyo-u.ac.jp/index.html>（2018年12月21日閲覧）

### 中央大学外国人留学生会

中央大学外国人留学生会は留学生相互や日本人学生との交流を目的として、全ての外国人留学生が所属している。毎年、自主的に活動やイベントなどを企画、運営を行っている。スポーツ大会、白門祭での出店、クリスマスパーティー、スキー・スノーボード合宿、新年文化の交流会・プレゼンテーション等を実施したことがある。しかし、後楽園キャンパスの後楽園分会が主に活動を行っているが、多摩キャンパスの活動が少ない。

### 創価大学留学生会

創価大学では留学生を自治する組織としての留学生会は毎年、友好祭、運動会、Forever Party などの活動を開催している。

表 17 創価大学留学生会の活動

開催時期	活動名	参加者
4月20日	友好祭	約120名
5月12日	運動会	約70名
12月	Forever Party	約300名

(出典：創価大学<sup>37</sup>のHPより筆者作成 2018年12月21日閲覧)

<sup>37</sup>創価大学HP <https://www.soka.ac.jp/> (2018年12月21日閲覧)

### 3-3 組織間の地域国際交流活動の比較

本節では第二章の仮説モデルで提示した組織要因の中での活動の場所と組織側の情報発信、他の組織との繋がりについて比較する。また、参加の人数、活動の種類、活動の連続性にも比較する。

#### 活動の場所

学校外の地域国際交流活動の場所は八王子市内である。八王子駅周辺で開催する活動が多いということを示唆された。学校内の地域国際交流活動は旅行活動以外に、ほぼ学校内で開催している。

#### 情報発信と他の組織との連携

各組織の情報発信方法と他の組織の連携を把握するために、八王子国際協会、八王子市、大学コンソーシアム八王子という学校外の組織にインタビューした(インタビュー日付：2018年11月21日、2017年12月12日)。また、学校内の組織について、首都大学東京の国際課にインタビューした(2018年11月28日)。他の大学の国際課・国際センターについて、留学生にインタビューした時、留学生が自分の所属している大学の国際課・国際センターの発信方法を教えた。留学生組織の発信方法と他の組織の連携も、留学生にインタビューした時、留学生が自分の所属している留学生組織の発信方法と他の組織の連携に関することを教えた。

情報発信について、八王子市と八王子国際協会の情報発信の手段が最も多い。筒井(2001)<sup>11)</sup>はボランティアの募集方法について、活動希望者、ボランティアセンターの登録者がメールなどを用いて伝え、ボランティアセンターに登録しているグループに依頼すること、小地域のボランティアセンターへの依頼、新聞やNHKなどのマスコミによる募集、ミニコミ・公報などの利用、学校(教師)への呼びかけという一般的な方法を提示した。八王子国際協会と八王子市はほぼ以上の方法を利用し、発信している。市の広報紙、国際協会の会報、八王子市・八王子国際協会のホームページ、外国語の新聞紙「Ginkgo」、Facebook で発信され、また、各大学の国際課・国際センター・協力を得られた教員に依頼し、発信する。さらに、八王子市が奨学金を受け取る学生に直接にメールする。また、以前活動に参加したことがある留学生にメールを送付する。

大学コンソーシアム八王子は大学の国際課・国際センターや八王子市の職員に依頼し、発信している。また、活動に参加した留学生に情報発信している。

国際課・国際センターは主に学校の掲示板で活動の情報を貼ったり、国際課のHPとTwitterで発信したり、直接留学生にメールにて告知する時もある。国際課・国際センターは自分の活動だけ発信することだけではなく、学校外の活動や留学生会の活動を発信することもある。

留学生組織の活動は主に SNS を利用し、組織内のグループで発信する。国際課・国際センターに依頼し、情報を発信しているときもある。留学生組織の中で、時々、別の団体の活動の情報を発信する。

全体的に見れば、学校外の活動の情報発信方法は学校内の活動の情報発信方法の種類より多いということが明らかになった。

第二章では、組織側が活動の情報を発信する手段が単一で、あるいは情報を発信していないことにより、留学生が活動の情報が得られないという「情報発信不足」という阻害要因を提示した。しかし、組織側への調査から見ると、各組織は様々な方法で活動の情報を発信しているため、仮説と一致していない。

活動の発信における組織の連携について、学校外の組織の間で、自分の組織の情報を発信するだけではなく、他の学校外の組織の活動情報も発信しているということが明らかになった。また、学校の国際課・国際センターは学校外の組織の活動情報も、学校内の活動の情報も発信している。留学生組織は主に自分の活動の情報を発信しているが、時々、別の団体の活動の情報を発信するということを明らかになった。

第二章では「組織間の繋がり不足」という阻害要因を提示した。その要因は組織側が他の組織の活動を発信せず、自分の組織の活動の情報だけ発信することにより、留学生が活動の情報が得られないという意味である。しかし、組織への調査から見れば、各組織は自分の組織の活動を発信することだけではなく、他の組織の活動にも発信しているということが明らかになった。つまり、仮説モデルでの「組織間の繋がり不足」とは一致していない。

## 参加人数

八王子市国際協会の活動と大学コンソーシアム八王子の活動への参加人数は約 10 人から 20 程度で、高尾山ボランティア活動以外に八王子の留学生地域貢献活動の参加人数は 20 人以下である。大学の国際課・国際センターの活動の中では、留学生歓迎会という活動がある。この活動はほぼすべての新入留学生が参加しているため、参加人数が多い。他の活動に参加する人数は大体 40 人以下である。留学生組織の活動の参加者も多い。国際課・国際センターの留学生歓迎会と比べれば少ないが、Hands の International Party や、創価大学留学生会の友好祭のような、約 100 人の留学生が参加している活動がある。

人数が把握できるデータの中で、参加者人数の最大の活動は留学生組織の活動であるということが明らかになった。また人数から見れば、学校内の活動に参加する人数が学校外の活動に参加する人数より多いということが明らかになった。

## 活動の種類

八王子国際協会活動には、八王子国際交流フェスティバルをはじめとする国際交流活動

があり、留学生の就職支援活動を代表する留学生支援もある。

大学コンソーシアム八王子では、八王子まつり山車曳き体験を代表とする文化体験活動と留学生座談会だけある。

八王子市の活動では、主にみんなの川の清掃デーや高齢者施設の訪問のような地域貢献活動である。

大学の国際課・国際センターの活動は主に二つの種類に分けられると考える。それは新入生歓迎会と文化体験旅行である。ほぼすべての大学の国際課・国際センターには二つの活動がある。

留学生組織は自分の大学の国際課・国際センターの活動に協力する時もある。それ以外に、国際交流を目的とする文化体験活動を行っている。それゆえ、大学の国際課・国際センターと比べれば活動の種類が多いと考えられる。

### 活動の連続性

活動の連続性について、学校外の活動について、多文化共生推進プランにおける活動の枠組みは決められるため、ほぼ毎年変わらない。大学の国際課・国際センターの活動も同じである。留学生組織の毎年の活動は一定の程度で決められたが、リーダーの交換により、活動の内容が変わるという可能性がある。そのため、連続性について、留学生組織は他と比べれば、連続性が弱い。

各組織が開催する活動は以下の表 18 のように比較できる。

表 18 各組織の活動の比較

	組織	活動種類	参加人数	活動の連続性	情報発信	他の団体との連携の発信の有無
学校外の活動	八王子国際協会の活動	国際交流、留学生支援	0-30	強い	市の広報紙、会報、ホームページ、「Ginkgo」、Facebook、各大学の国際課・国際センター・協力を得られた教員に依頼、会員へのメール	ある

	大学コンソーシアム八王子の活動	文化体験、留学生支援	3人と17人	強い	各大学の国際課・国際センターに依頼、組織メンバーの発信、職員の発信	ある
	八王子市地域貢献活動	地域貢献活動	0-50人	強い	市の広報紙、会報、ホームページ、「Ginkgo」、Facebook、各大学の国際課・国際センター・奨学金を利用する学生へのメール告知	ある
学校内の活動	大学の国際課・国際センターの活動	新入生歓迎会と文化体験旅行	8 - 261人(把握できるのみ)	強い	掲示板、留学生へのメール告知	ある
	留学生組織の活動	さまざまな文化体験	20 - 300人(把握できるのみ)	他の組織より弱い	留学生組織グループ内発信、国際課・国際センターに依頼	ある

(出典：筆者作成)

## 第四章：留学生の地域国際交流活動への参加の現状

本章はインタビュー調査を通して、留学生が第三章で提示した地域国際交流活動への参加状況を明らかにする。

### 4-1 インタビュー調査概要

#### 4-1-1 インタビュー対象者及び実施方法

筆者は2018年9月から2018年12月まで、八王子市の留学生が最も多い八王子市の5つの学校に在籍している31名の留学生にインタビュー調査を行った。インタビューの時間は短い人で15分、長い人になると1時間である。中国人留学生は中国語でインタビューし、それ以外の留学生はやさしい日本語を使い、インタビュー調査を行った。インタビュー中心的な質問は「八王子市における地域国際交流活動の参加の有無」、「参加の理由」、「参加しない理由」である。留学生に自由的に語ってもらうために、半構造化面接を採用した。インタビューに応じた留学生の属性は表19の通りである。

表19 インタビュー対象者一覧表

協力者	国籍・地域	学校	所属	年齢	性別	日本に住む時間
1	中国	首都大学東京	理学研究科	24	女	2年
2	中国	首都大学東京	理学研究科	24	女	1年
3	中国	首都大学東京	都市環境科学研究科	23	女	1年
4	中国	首都大学東京	都市環境科学研究科	26	男	3年
5	中国	首都大学東京	都市環境科学研究科	22	男	半年
6	中国	首都大学東京	法学政治学研究科	27	女	4年
7	中国	首都大学東京	人文社会学部	21	女	3年
8	中国	帝京大学	経済研究科	25	男	1年
9	中国	帝京大学	経済研究科	24	男	1年
10	中国	帝京大学	経済研究科	23	男	1年
11	中国	帝京大学	経済研究科	25	男	2年
12	中国	首都大学東京	都市環境科	27	男	2年

			学研究科			
13	中国	首都大学東京	理学部	23	女	4年
14	ベトナム	首都大学東京	人文社会科学 学研究科	28	女	4年
15	中国	首都大学東京	法学政治学 研究科	28	女	2年
16	中国	首都大学東京	理工学研究 科	25	女	3年
17	中国	首都大学東京	理工学部	22	男	3年
18	中国	首都大学東京	電子情報シ ステム	24	男	2年
19	中国	拓殖大学	国際学部	30歳以 下	男	5年
20	韓国	首都大学東京	都市環境学 部	24	男	4年
21	中国	首都大学東京	人文社会	20	女	3年
22	中国	首都大学東京	人文社会	22	女	4年
23	中国	首都大学東京	人文社会	21	女	4年
24	中国	首都大学東京	都市環境科 学研究科	27	男	2年
25	韓国	首都大学東京	人文社会	24	男	3年
26	スウェーデ ン	首都大学東京	都市教養学 部	24	男	5年
27	中国	首都大学東京	システムデ ザイン学部	24	女	6年
28	中国	首都大学東京	都市環境科 学研究科	25	女	2年
29	中国	中央大学	総合政策研 究科	20-25	女	1年半
30	台湾	拓殖大学	国際学部	23	男	4年
31	中国	創価大学	国際言語教 育	23	男	3年



#### 4-1-2 インタビューにおける調査項目

インタビュー調査の前に、インタビュー質問表を協力者に送った。インタビュー質問表の内容は①八王子市における地域国際交流活動の参加経験の有無、②地域国際交流活動への参加理由、③地域国際交流活動の情報の入手方法、④参加した活動の不足点、⑤地域国際交流活動に参加しない理由、⑥個人属性という質問である。

#### 4-1-3 倫理的な配慮

すべての協力者にインタビューの目的と倫理的な配慮を説明してから、留学生の同意を得た上で、インタビューを実施した。本調査は首都大学東京研究安全倫理委員会から許可を得たうえで実施した。(承認番号：H30-96)

#### 4-2 組織別で見る留学生の地域国際交流活動への参加状態

本節ではインタビューした留学生の中で、どのぐらいの人が地域国際交流活動に参加したことがあるのかを明らかにした上で、地域国際交流活動の中で、どの活動に参加した留学生が多いのかを明らかにする。

八王子市における留学生人数が最も多い5つの大学に在籍している留学生31人にインタビュー調査を行った。その結果、31人の中で29人が地域国際交流活動に参加した経験がある。さらに、学校外の活動に参加した経験がある学生が最も少ない、12人が活動に参加したことがある。学校内の活動に参加した経験がある学生が28人である。参加した経験がある留学生はほぼ学校内の地域国際交流活動に参加した経験があると言える。

さらに、組織別によると、学校外の活動について、八王子市国際協会の活動に参加した経験がある留学生が7人、大学コンソーシアム八王子市の活動に参加した人が3人、八王子市の留学生地域貢献活動に参加した人が3人であった。

学校内の活動について、国際課・国際センターの活動に参加した経験がある学生が19人であった。留学生組織の活動に参加した経験がある学生が23人であった。

今回のインタビュー調査の対象では、留学生組織の活動に参加した経験があった人が最も多い、次は国際課・国際センターの活動、3番目は八王子国際協会の活動、八王子市の地域貢献活動と大学コンソーシアム八王子の活動に参加した経験がある学生が最も少ないということ結果であった。それゆえ、学校外の活動より、学校内の活動に参加した経験がある人が多いということも明らかになった。

以上を踏まえ、第五章、第六章では、留学生はどのような理由で、地域国際交流活動に参加するのか、また、どのような理由で活動に参加しないのかを分析する。

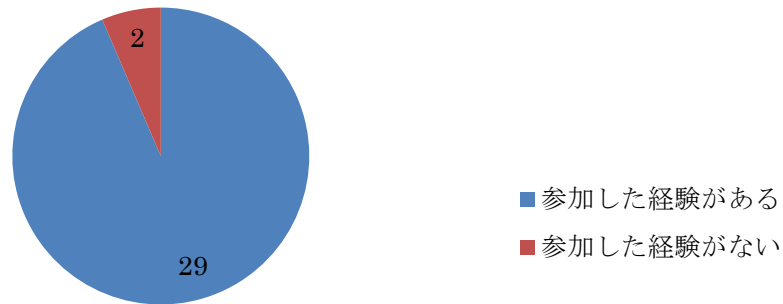


図9 参加経験の有無

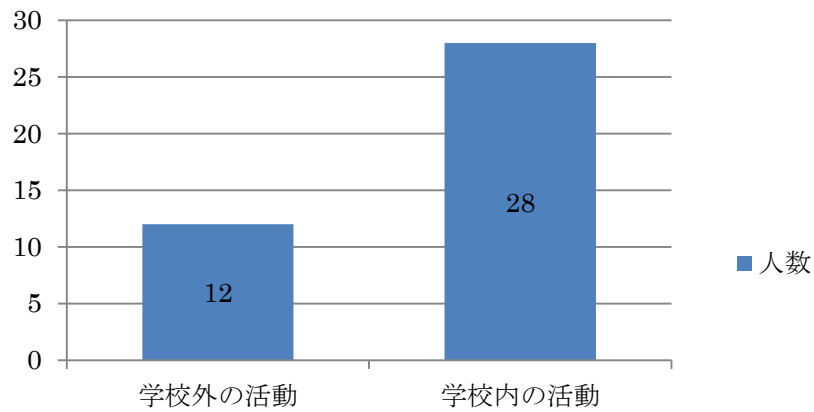


図10 学校内と学校内の活動に参加する人数

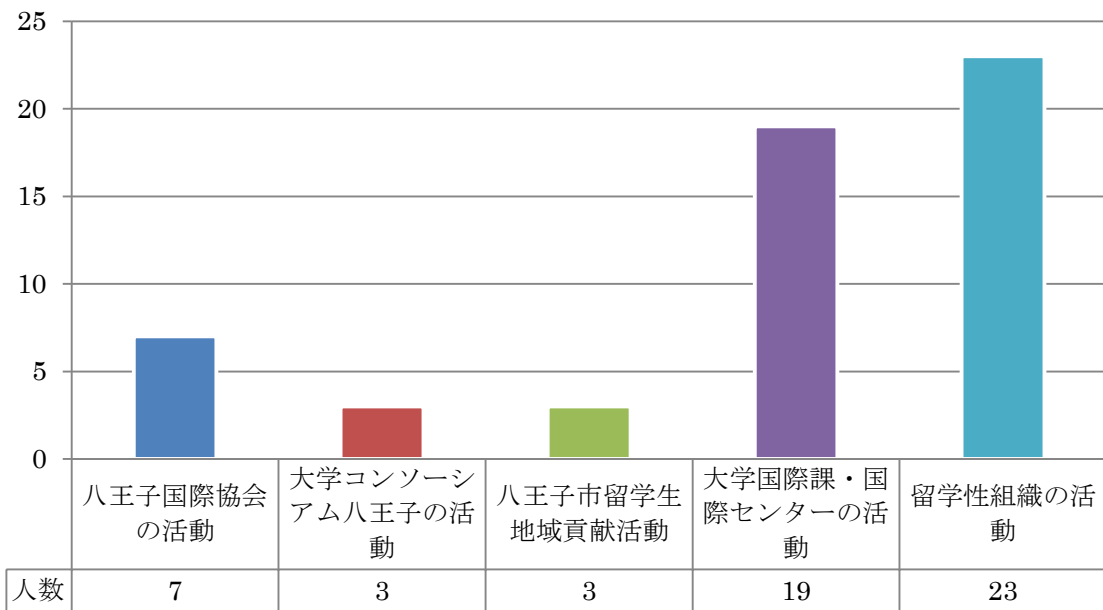


図11 組織別活動の参加人数

インタビュー対象者が具体的にどんな活動に参加したことがあるのかは表20の通りである。

表20 インタビュー対象者の活動への参加状況

活動		具体的な活動	参加者
多文化共生推進 プランにおける 活動	八王子国際協 会	八王子国際交流フェスティバル	13、19、30
		国際理解教育	14
		日本語学習活動	16、24
		語学ボランティア	19、24
		いちょう祭り	27
	大学コンソー シアム八王子	八王子まつり山車曳き体験	1、2、29
	地域貢献活動	八王子市祭りのボランティア	21
		高尾山ボランティア	21、23
		防災訓練	23、27
大学の国際課・国際センターの活 動	新入生歓迎会 <sup>38</sup>	3、12、17、18、20、21、22、 24、25、26、31	
	旅行	7、9、10、11、15、16、21、 22、24、27、31	
	防災訓練	19	
	高齢者施設の訪問	19	
	掃除活動	19	
	就職支援	21、28	
留学生組織の活動	新入生歓迎会 <sup>39</sup>	1、2、6、13、16、18、21、 22、23、24、25、26、27	
	卒業生送別会 <sup>40</sup>	2、6、13、16、18、21、 22、23、24、26、27	
	International Party	7、13、14、15、16、17、21、 26	
	料理イベント	8、20、25、26	
	旅行	17、20、21、26	
	忘年会	29	
	留学生喫茶店	31	

<sup>38</sup>新入生歓迎会：首都大学東京の新入留学生オリエンテーション、中央大学の新入留学生歓迎パーティー、創価大学の春季・秋季新入生歓迎会

<sup>39</sup>新入生歓迎会：handsの新入留学生オリエンテーションと他の留学生組織の新入生歓迎会

<sup>40</sup>卒業生送別会：他の留学生組織の卒業生の送別会

## 第五章 地域国際交流活動への参加要因

本章ではインタビュー調査対象者の語り内容の文字データにつけた小見出しにより、参加要因の概念を見出し、整理する。その後、第二章で提示した仮説モデルと照らし合わせ、仮説モデルを修正し、参加要因モデルを完成する。

### 5-1 分析方法

本研究は谷ほか(2010)<sup>13)</sup>を参照し、分析した。具体的には、インタビュー調査の音声データをすべて文章化し、パラグラフ単位で文字データを分割し、小見出しをつける。そして、留学生の参加要因と阻害要因を分析するために、参加要因と阻害要因と関連する部分を抽出し、内容を要約し、それぞれ内容とふさわしいコードの名称をつける。具体例は以下の表 21 の通りである。

表 21 データの分析の例

語り	翻訳	小見出し	要約・メモ	コード	参考文献
我因为没有参加过类似的活动,也比较感兴趣,所以就一起参加了。 <那学友会的活动呢>	私はそのタイプの活動に参加したことがないから、興味をもって参加した	参加理由	参加した経験がないによる参加	新鮮さ	『大辞林 第三版』
因为是中国留学生一起参加的活动,所以想借这个机会多认识一些中国留学生同学。	中国人留学生の活動だから、もっと中国人留学生に会いたい、友達作りたいから。	参加理由	友達作りための参加	友達作り	Clary et al.(1998)「社会」、内閣府(2018)「高齢者白書」
还有一些活动是我不知道这个活动的存在,比如茶道体验会还有八王子市举行的活动。	一部の活動の存在を知らない、例えば茶道体験会とか八王子市の活動とか	参加しない理由	活動の存在が知らない	情報入力不足	近藤ほか(2015)
还有一些活动比如就职活动还有文化体验是因为自己日语不好或者觉得有日语水平的限制就没有参加。	就職活動や文化体験活動は自分の日本語が上手ではないから参加しない	参加しない理由	日本語力の制限	日本語力不足	亀田(2015)
还有一些活动因为参加费用比较贵所以没有参加,比如国际课组织的去浅草寺的活动因为费用贵就没去。	一部の活動は費用が高いから参加しない。例えば旅行活動	参加しない理由	参加費用が高い	コスト(金銭的)	『大辞林 第三版』

コードをつける方法は二つある。一つはモデルを作った際に使った文献と他の関連する文献の概念を参照し、コードをつけた(表 22)。もう一つは先行文献で提示していないため、データに基づいて新たに類型を構成する(表 23)。

表 22 先行文献から取り出したコード一覧表

コード	参考文献	具体例
手伝い	Clary et al.(1998) <sup>3)</sup> 「価値」、桜井(2007) <sup>2)</sup> 「利他心」	自分も外国人だから、自分の言語により、他人を手伝ってあげたい
共感により 手伝い	桜井(2007) <sup>2)</sup> 「テーマや対象への共感」	また、先輩からいろいろなことを教わったから、私もいろいろなものを後輩に紹介したい。

知識の学び	Clary et al.(1998) <sup>3)</sup> 「理解」、桜井(2007) <sup>2)</sup> 「自己成長と技術習得・発揮」	意義があり、活動を通して自分が何かを学べる
技術の発揮	Clary et al.(1998) <sup>3)</sup> 「キャリア」、桜井(2007) <sup>2)</sup> 「自己成長と技術習得・発揮」	私はこの学校で唯一日本語ができるベトナム人だから、特にベトナム人が欲しいという活動があったら参加して欲しい
文化体験	西平(2014) <sup>14)</sup> 「中国留学発展報告」	日本文化を体験したい
文化理解	西平(2014) <sup>14)</sup> 「中国留学発展報告」	日本の文化を理解できる
友達作り	Clary et al.(1998) <sup>3)</sup> 「社会」、内閣府(2018)「高齢者白書」	知り合いがいなくて、友達を作りに行った。
友人との参加	Clary et al.(1998) <sup>3)</sup> 「社会」	友達と一緒に参加することが楽しい。
断れなさ	大阪市(2009) <sup>7)</sup> 、桜井(2007) <sup>2)</sup> 「社会適応」	国際課の先生に誘われたから
自己肯定感	Clary et al.(1998) <sup>3)</sup> 「強化」桜井(2007) <sup>2)</sup> 「自分探し」	勉強以外の生活を充実させ、自分の価値を実現したい
時間の余裕	篠原(1977) <sup>5)</sup>	時間があったから参加した。

表 23 先行研究で提示していないコード一覧表

コード	定義	具体例
日本語の練習	日本語を練習するための参加	日本語をよくしゃべるようになるためにいった。
自分の鍛え	自分の能力を鍛えるための参加	自分の組織能力を鍛える
新鮮さ	体験したことがないよりの新鮮さ	来たばかりの時は新鮮な感覚を持っていて、活動に参加したかった
国際交流	ほかの国の人と交流するための参加	他の国籍の人と交流できる。
授業の義務	授業の義務としての参加	授業の一部だから、いかなければならない
コスト(金銭)	参加費が安いために参加する	留学生向けだから、費用が安い
コスト(手間)	手間がかからないために参加する	手間かかるので、誰かが企画してくれて、それに参加すれば、簡単。
活動の内容	活動の内容のバランスがよいために参加する	(〇〇の活動は)日本の文化も強すぎなく、留学生だけでもないから、中間のバランスがいいふうになっていると思う

川喜田(1967)<sup>15)</sup>が提唱した KJ 法を用いて、内容が近いものを収集し、小カテゴリーを作成、さらに、小カテゴリーの内容が近いものを中カテゴリーにまとめる。そして、中カテゴリーの内容が近いものを大カテゴリーにまとめる。仮説モデルと照らし合わせ、仮説モデルを修正する。具体的な検証方法、調査結果としての小カテゴリーと中カテゴリーは仮説モデルの要因と定義と一致するかどうかである。分析結果の妥当性を高めるために、研究室のメンバーと協議を行い、分析した。

## 5-2 参加要因に関するカテゴリー

インタビュー調査対象者の発言を整理すると、参加要因に関する 15 個の小カテゴリーを整理した。そして、15 個のカテゴリーか 8 つの中カテゴリーに統合した。さらに、個人要因と組織要因という 2 つの大カテゴリーに分類した。

表 24 参加要因一覧表

大カテゴリー	中カテゴリー	小カテゴリー	定義	対応するコード
個人要因	①他人への貢献意識	他人への貢献意識	他人を手伝うために参加する	・手伝い ・共感により手伝い
	②知識や技術の学び及び発揮	文化体験	日本や世界の文化に体験したいために、活動に参加する	・文化体験 ・文化理解
		新鮮さ	日本に来た前で体験したことがないため、新鮮さを感じ、活動に参加する	新鮮さ
		知識の学び	新しい知識と技術を学び、身につけるために活動に参加する	・日本語の練習 ・知識の学び
		技術の発揮	自分の技術を発揮するために、活動に参加する	技術の発揮 自分の鍛え
	③友人関係	友達作り	友達を作るために地域国際交流活動に参加する	友達作り
		友人との参加	友達と一緒に参加するために、活動に参加する	友人との参加
		国際交流	他の国の人と会い、交流するために、地域国際交流活動に参加する	国際交流
	④「消極」的	断れなさ	人に誘われたことにより活動に参加	断れなさ

	参加		加する	
		授業の義務	授業としての義務的な参加	授業の義務
	⑤自己肯定感	自己肯定感	自分の価値を肯定し、自己肯定感を高めるために参加する	自己肯定感
	⑥時間の余裕	時間の余裕	授業やアルバイト以外の余暇時間があれば、活動に参加する	時間の余裕
組織要因	⑦コストの低さ	金銭的成本	活動に参加する参加費が安いいため、参加する	コスト(金銭)
		手間コスト	手間がかからない活動に参加する	コスト(手間)
	⑧活動の内容	活動の内容	日本文化と外国文化のバランスがよいため、参加する	活動の内容

### 5-3 参加要因への考察

本節は調査の結果と仮説モデルを比較しながら、考察する。本節の表の語りは筆者が直訳し、整文している。

仮説モデルが提示した「他人への貢献意識」「知識や技術の学び及び発揮」「友人関係」「『消極』的参加」「時間の余裕」「自己肯定感」はインタビュー調査でも提示された。仮説モデルが提示していない「コストの低さ」「活動の内容」という中カテゴリ要因が示された。

#### 【個人要因(動機)】

本研究における留学生の地域国際交流活動への参加の個人要因は主にボランティアモチベーションの研究に参照しているものである。インタビュー調査の結果により、留学生の個人的な参加要因はモデルの個人要因(動機)の通りに構成される。

#### ① 他人への貢献意識

「他人への貢献意識」とは他人を手伝うために参加するということである。この要因は Clary et al.(1998)<sup>3)</sup>のモデルで「価値」という要因と桜井(2007)<sup>2)</sup>モデルの「利他心」、「テーマや対象への共感」という要因をまとめて作成した。

今回のインタビュー調査で2名の学生(7さん、23さん)は他人を手伝うために、活動に参加すると述べた。留学生は自分の国の言語だけでなく、日本語あるいは英語、もしくは別の言語を使える。留学生(7さん、23さん)はそのような特長を利用し、他人に手伝ってあげたいと考え、活動に参加する。それは Clary et al.(1998)<sup>3)</sup>のモデルで「価値」という要因と桜井(2007)<sup>2)</sup>モデルの中の「利他心」という要因とほぼ一致している。

また、桜井(2007)<sup>2)</sup>モデルの中の「テーマや対象への共感」という要因は、自分も対象者と同じ境遇があったため、よりよい活動が利用者に対してできるという考え方である。今回一人の学生(23さん)も自分がかつて新入留学生と同じ境遇であったため、新入留学生を手伝いたいという話をした。それは共感的な意識を基づく要因であるため、桜井(2007)<sup>2)</sup>モデルの中の「テーマや対象への共感」という要因と一致していると考え。それゆえ、インタビュー調査結果と仮説モデルの中での「他人への貢献意識」という要因とほぼ一致していると考え。

以下の表 25 は他人への貢献意識について調査対象が語った内容である。

表 25 他人への貢献意識について調査対象の語り

対象者	語り
7	自分も外国人だから、自分の言語により、他人を <u>手伝ってあげたい</u>
7	来ているのは中国や台湾の人だから、自分も旅行する時も中国人がいれば楽だと思ふ。だから、自分の力により他人を <u>手伝いたい</u>
23	二年生になると、学友会や <u>新入生を手伝う</u> 必要があると感じる。他人や、新入生を手伝いたい。大学生活が楽しいということを新入生に伝える。また、先輩から



	いろいろなことを教わったから、私もいろいろなものを後輩に紹介したい。
23	いろいろな外国人観光客に会えて、コースとかも彼らに <u>紹介できる</u>

## ②知識や技術の学び及び発揮

仮説モデルでの「知識や技術の学び及び発揮」という要因は Clary et al.(1998)<sup>3)</sup>のモデルにおける「理解」と「キャリア」という要因と、桜井(2007)<sup>2)</sup>モデルでの「自己成長と技術習得・発揮」という要因をまとめたものである。これらの要因は主にボランティア活動を通して、知識や技術を身につけたい、発揮したいということを表す。仮説モデルにおいて、その要因を「知識や技術の学び及び発揮」と名付けた。

インタビュー調査に基づいて、この要因は「知識の学び」「技術の発揮」「文化体験」「新鮮さ」という小カテゴリーに構成される。

「知識の学び」とは留学生が新しい知識と技術を学び、身につけるために活動に参加するということである。桜井(2007)<sup>2)</sup>の調査結果では若年層の人は他の年齢層と比べれば、「自己成長と技術習得・発揮」という要因の得点が高いと示された。つまり、「自己成長と技術習得・発揮」は若年層の人が参加する主な要因である。本研究のインタビュー調査でも、7名の留学生は知識を学ぶために、活動に参加すると回答した。その中で、日本語という知識を学ぶために、活動に参加する留学生(7さん、20さん)がいる。また、AEDの使い方など日本語以外の知識、情報を学ぶために、活動に参加する留学生(15さん、21さん、23さん、27さん、28さん)がいる。それは Clary et al.(1998)<sup>3)</sup>のモデルでの「理解」という要因で提示した新しい知識を学ぶために、ボランティア活動に参加することとほぼ一致している。また桜井(2007)<sup>2)</sup>モデルで「自己成長と技術習得・発揮」という要因で提示したボランティア活動を通して、知識や技術発揮したいという要因ともほぼ一致していると考えられる。

「技術の発揮」とは留学生が自分の技術を発揮するために、活動に参加するということである。今回のインタビューで、3名の留学生はこの要因を回答した。その中で、留学生(14さん)は自分の日本語の能力を発揮するために、活動に参加すると回答した。活動により自分の組織能力などの技術などを鍛える(7さん、17さん)という答えもある。技術が鍛える前提は、技術を発揮することである。それゆえ、能力の鍛えるもう技術の発揮の一部である。以上を踏まえ、インタビューの調査結果と Clary et al.(1998)<sup>3)</sup>の「キャリア」という要因と桜井(2007)<sup>2)</sup>モデルで「自己成長と技術習得・発揮」で提示した知識と技術の発揮するために、ボランティア活動に参加することと一致していると考えられる。

一方、留学生に特有なものも現れた。インタビュー調査では「文化体験」と「新鮮さ」という二つのキーワードが提示された。「文化体験」とは留学生が日本や世界の文化に体験したいために、活動に参加するということである。9名の留学生(1さん、7さん、8さん、11さん、16さん、18さん、22さん、24さん、29さん)は活動の参加により、日本文化を体験することを挙げた。「中国留学発展報告」<sup>14)</sup>により、中国人留学生の日本を留学先とし

て選択した動機については、「見識の増強、他国文化の理解」が首位となっておる。そのため、日本に留学する目的の一つは他国文化を理解することである。地域国際交流活動は様々な国の文化を体験できるため、留学生は参加する。

また、「新鮮さ」とは日本に来た前で体験したことがないため、新鮮さを感じ、活動に参加するということである。6名の留学生(2さん、9さん、18さん、19さん、22さん、23さん)は今まで参加したことがない活動に対して新鮮な感覚を持ち、このような活動に参加すると回答した。

この二つのキーワードも「知識や技術の学び及び発揮」という要因の中に含まれると考える。その理由としては、文化体験は文化という知識を学ぶことだと考えられる。また、新鮮さを感じることは、以前に体験してなかったことを体験できることである。新しい知識、体験を得たいために、参加した。「文化体験」も「新鮮さ」も「知識や技術の学び及び発揮」の内容と一致している。それは新しい知見として加えることができる。

以下の表 26 は知識や技術の学び及び発揮について調査対象が語った内容である。

表 26 知識や技術の学び及び発揮について調査対象の語り

小カテゴリー	対象者	語り
知識の学び	7	自分の <u>言語力をレベルアップ</u> したい
	20	<u>日本語をよくしゃべるようになる</u> ためにいった。なかなか日本語を使う機会がなくて、そういうところに行ったら、日本語がしゃべるようになると思う。
	15	<u>情報をもらうために参加した</u> 。普段は自分の領域で生活しているから、自分の領域以外の情報をなかなか手に入れられない
	21	意義があり、活動を通して自分が何かを <u>学べる</u>
	23	いろいろなものを <u>学んだ</u> 、例えば AED とか。障がい者対応の本があり、勉強になると思う。
	27	なんか <u>自分にとって役に立つ活動(何かを学べる活動)</u> に参加したい
	28	就職など新しい情報を <u>もらえる</u> 。
技術の発揮	14	私はこの学校で唯一 <u>日本語ができるベトナム人だから</u> 、特にベトナム人が欲しいという活動があったら参加して欲しい
	7	もうすぐ東京オリンピックだから、ボランティアも必要だと思う。ちょうどその機会により <u>自分を鍛えたい</u> 。
	17	自分の <u>組織能力を鍛える</u>
文化体験	1	<u>文化を知りたい</u> 。前は神保町で似たような活動を見たことがあった、どんな伝統文化なのかが知らなかったから、興味を持って、その文化を理解し

		たい。
	7	この活動によりさまざまな国の料理を体験することができるから、それは各国の <u>文化と料理を理解するチャンス</u> だと思う
	8	様々な国の料理が食べられ、 <u>文化が体験できる</u>
	11	普段は中国人と接触するチャンスが多いから、活動を通じて日本人と接触し、 <u>文化を体験したい</u>
	16	<u>日本文化を体験したい</u>
	18	<u>文化を体験する</u>
	22	日本の <u>文化を理解</u> できる
	24	日本人が開催する活動に参加するのは日本社会に溶け込みたいからだ。また、日本社会と中国社会の違いところ <u>(文化)を理解する</u>
	29	日本の祭り(という文化)が好き、 <u>体験したい</u>
新鮮さ	2	私はそのタイプの活動に <u>参加したことがない</u> から、興味をもって参加した
	9	<u>新鮮</u> だと思う。日本に来たばかりの時、なんでも体験したかった
	18	来たばかりの時は <u>新鮮な感覚</u> を持っていて、活動に参加したかった
	19	自分の生活の範囲を広げたい、つまり <u>体験したとこがない</u> こと体験したい
	22	これまで参加したことがない活動だから、 <u>新鮮味</u> を感じる
	23	そんなに大規模の防災訓練に <u>参加したことがない</u>

### ③友人関係

Clary et al. (1998)<sup>3)</sup>のモデルで「社会」という要因とは、友達とのつながりということに言い換えられる。森岡(2016)<sup>9)</sup>も親しい友人や仲間の数が多い人は、友達と共に活動し、外出や活動参加に誘われるという可能性が高いと述べている。今回のインタビューにより、17名の留学生は「友人関係」も留学生の参加の一つの要因と提示された。また、この要因は「友達作り」、「友達との参加」、「国際交流」という小カテゴリーに構成される。

「友達作り」とは友達を作るために地域国際交流活動に参加するということである。インタビュー調査でも、14名の学生は友達を作るために、地域国際交流活動に参加したと提示した。一部の地域国際交流活動の目的の一つは交流である。そのため、地域国際交流活動での交流により、友達を作れると考え、留学生は地域国際交流活動に参加するということが明らかになった。内閣府の2018年の「高齢者白書」<sup>4)</sup>では高齢者が社会的な活動に参加することにより、新しい友達ができるという結果が示された。これは今回の調査結果と一致しているため、筆者は友人を作るための参加という小カテゴリーを「友達作り」と名付けた。

「友達との参加」とは友達と一緒に参加するために、活動に参加するということである。インタビュー調査で、4名の留学生(14さん、25さん、26さん、31さん)は友達に会う、あるいは一緒に参加したいために、活動に参加すると提示した。Clary et al. (1998)<sup>3)</sup>のモデルで「社会」という要因の中で、友達との参加という意味が含まれる。そのため、「友達との参加」という小カテゴリーに分類した。

また、仮説モデルで提示されていなかった要因が示された。それは「国際交流」である。多くの地域国際交流活動は一つの国の人だけ参加するわけではない。そのため、活動に参加すれば、他の国の人と会える。他の国の人の人と会い、交流する目的で、活動に参加する留学生がいるということが明らかになった。インタビュー調査で5人(7さん、13さん、16さん、27さん、31さん)が地域国際交流活動で他の国の人と会うことができ、また、交流することができると提示した。本研究はこのような他の国の人と会い、交流するための要因を「国際交流」という小カテゴリーに分類した。「国際交流」は様々な意味があるが、本研究で定義した「国際交流」とは他の国の人と会い、交流するために、地域国際交流活動に参加するということである。

以下の表27は友人関係について調査対象が語った内容である。

表 27 友人関係について調査対象の語り

<sup>4)</sup>内閣府(2018)「高齢者白書」(2018年12月21日閲覧)

[https://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2018/zenbun/30pdf\\_index.html](https://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2018/zenbun/30pdf_index.html)

小カテゴリー	対象者	語り
友達作り	2	もっと <u>中国人留学生に会いたい</u> から。
	3	普段接触できる人が少ないから、他の人とコミュニケーションしたい、 <u>友達を作りたい</u> 。
	6	<u>友達作り</u> 。
	7	すべての留学生が参加できるから、大学院生、交換留学生も含めて、たくさんの人と会える。
	12	こういう活動を通じて、自分の国の人と会えて、 <u>友達を作れる</u> 。
	17	<u>友達作り</u> 。
	18	<u>友達を作る</u> 。
	20	知り合いがいなくて、 <u>友達を作り</u> に行きました。
	21	<u>友達を作りたい</u> 。
	23	新入生歓迎会に参加することは <u>友達を作る</u> こと。
	24	中国人の活動に参加するのは孤独だからだ。中国人の <u>友達を作</u> って、中国語をしゃべりたい。私が来たときは一人で、友達がほぼいなかった。
	27	<u>友達が作れる</u> 。
	29	行くなら新しい <u>友達が作れる</u> 。
	31	昔は <u>友達を作る</u> ために行った。
友人との参加	14	最初は興味なかったですが、でも <u>知り合いが増えていて</u> 、だんだん、よく参加できるようになりました。
	25	個人で参加してもいいのですが、仲がいい友達と一緒に参加しようと言って、参加するだけでいいので、 <u>友達と一緒に参加</u> することが楽しい。
	26	〇〇留学生組織に入った時はすごくいい人がいたから、 <u>一緒に活動</u> に参加した。
	31	周りの友達が行くから、今は <u>友達に会える</u> ためいく。
国際交流	7	<u>他の国の友人と交流する</u> チャンスを提供される。
	7	みんなと <u>国際交流</u> したい。
	13	<u>外国人が集まる活動</u> だ。
	16	他の <u>国籍の留学生</u> と会える。
	27	他の <u>国籍の人</u> と <u>交流</u> できる。
	31	それに、 <u>他の国の人</u> に <u>会える</u> 。

#### ④「消極」的参加

大阪市(2009)<sup>7)</sup>の調査と桜井(2007)<sup>2)</sup>は人に誘われたことにより活動に参加することを提示した。第二章でこの要因を「『消極』的参加」要因と名付け、仮説モデルに入れた。今回のインタビューにより、この要因が提示された。留学生(14 さん)は国際課の先生の誘いが断れないため、参加したと回答した。また、留学生(30 さん)の語りにより、授業としての義務的な参加ということも提示された。授業としての義務的な参加も消極的参加であるため、「『消極』的参加」という中カテゴリに入れた。

それゆえ、仮説モデルで提示した「『消極』的参加」という先生の誘いなどが断れないことを「断れなさ」と名を変更し、授業の義務として参加しなければならないことという「授業の義務」と共に、新しい「『消極』的参加」という中カテゴリに入れた。つまり、「『消極』的参加」という中カテゴリの中に「断れなさ」「授業の義務」が含まれる。

インタビュー調査で留学生は先生の誘いあるいは授業として参加しなければならないため、活動に参加する。そのため、「『消極』的参加」は一つの参加要因と考えられる。

以下の表 28 は「消極」的参加について調査対象が語った内容である。

表 28 「消極」的参加について調査対象の語り

小カテゴリー	対象者	語り
断れなさ	14	国際課の <u>先生に誘われたから</u>
授業の義務	30	<u>先生に誘われたから</u> 、また、 <u>授業の一部だから</u> 、いかなければならない

## ⑤自己肯定感

仮説モデルで Clary et al.(1998)<sup>3)</sup>のモデルでの「強化」「保護」という要因と桜井(2007)<sup>2)</sup>モデルでの「自分探し」という要因をまとめ、第二章の仮説モデルで「自己肯定感」という要因を提示した。

今回のインタビュー調査で留学生(18 さん)は自分の生活を充実させ、留学生が勉強や研究以外のところで、自分の価値を見出すと回答した。Clary et al. (1998)<sup>3)</sup>のモデルでの「強化」という要因は、自分の大切さを気づく、自分が必要と感ずるために参加することである。つまり自分の価値を実現するために参加する。今回の調査結果と一致しているため、この要因は仮説モデルの「自己肯定感」とほぼ一致していると考えられる。

以下の表 29 は自己肯定感の高まりについて調査対象が語った内容である。

表 29 自己肯定感の高まりについて調査対象の語り

対象者	語り
18	勉強以外の生活を充実させ、 <u>自分の価値を実現</u> したい

## ⑥時間の余裕

篠原(1977)<sup>5)</sup>は、政治への市民参加が進む条件の中で、「費用の負担を市民が引き受けられること」をあげている。その費用は主に時間のことを指す。時間は市民参加に影響する要因と言える。そのため、第二章で「時間の余裕」要因を仮説モデルに入れた。「時間の余裕」とは授業やアルバイト以外の余暇時間があれば、活動に参加するというということである。今回のインタビューにより、この要因が提示された。

インタビュー調査で3名の留学生(10さん、13さん、29さん)は授業やアルバイト以外の時間があったから、参加したと述べた。インタビューの結果と仮説モデルの時間の余裕とほぼ一致していると考えられる。余暇の時間は市民参加だけではなく、留学生の地域国際交流活動の参加要因の一つであるとまとめられよう。

以下の表30は時間の余裕について調査対象が語った内容である。

表30 時間の余裕について調査対象の語り

対象者	語り
10	<u>暇な時</u> があれば行く
13	<u>時間があった</u> から参加した。
29	ちょうど <u>暇</u> だから、行った



今回のインタビュー調査では仮説モデルに提示されていない参加要因がある。⑦コストの低さと⑧活動の内容は仮説モデルに提示されていないものである。

## 【組織要因】

### ⑦コストの低さ

インタビュー調査で、「コストの低さ」という要因が提示された。「コストの低さ」とは費用や手続きのコストがかからないため、参加するということである。「コストの低さ」がさらに、「金銭的成本」と「手間コスト」に分けられることがある。

「金銭的成本」とは活動に参加する参加費が安いいため、参加するということである。3名の留学生(7さん、11さん、25さん)は参加費が安いという参加要因を提示した。地域国際交流活動は、留学生を支援する要素も含まれる。特に大学の国際課・国際センターの活動は留学生に日本文化などを体験させるために、低い費用での活動を提供している。他の組織の活動と比べて、費用が低いため、留学生は地域国際交流活動に参加する。

「手間コスト」とは活動に参加することが簡単であるため、参加するということである。インタビュー調査で留学生(25さん)は自分が企画しない活動に参加すれば、手間がかからないで参加できると提示した。留学生は勉強や授業が忙しいため、できるだけ時間や手間のかからない活動に参加する傾向があると考えられる。

以下の表31はコストの低さについて調査対象が語った内容である。

表31 コストの低さについて調査対象の語り

小カテゴリー	対象者	語り
金銭的成本	7	留学生向けだから、 <u>費用が安い</u>
	11	学校が行う活動は <u>安い</u>
	25	国際課が企画した活動は、個人が企画することより、 <u>金銭の面で安く</u> なるので、それは結構大きな面だと思います
手間コスト	25	個人で企画して、友達を誘って、それは面倒くさいと思う。行ったら楽しいけど、その前の段階まではめんどくさいというか、 <u>手間かかる</u> ので、誰かが企画してくれて、それに参加すれば、 <u>簡単</u> 。

### ⑧活動の内容

仮説モデルで提示しないもう一つの要因は「活動の内容」である。「活動の内容」とは日本文化と外国文化のバランスがよいため、参加するということである。

インタビュー調査で留学生(26 さん)は活動では活動内容に関しては日本文化と外国文化のバランスがよいため、参加した。日本の文化を強調しすぎると、留学生として参加しにくい時もある。そうなると、一定の程度で留学生を排除する可能性がある。逆に、留学生だけなら、日本人が参加しにくいという可能性がある。つまり、国際交流を目的とする活動なら、活動内容に関しては外国文化と日本文化のバランスを守る必要があると考える。

以下の表 32 は活動の内容について調査対象が語った内容である。

表 32 活動の内容について調査対象の語り

対象者	語り
26	(〇〇の活動は) 日本の文化も強すぎなく、留学生だけでもないから、中間の <u>バランスがよい</u> ふうになっていると思う

仮説モデルで、アクセスのコストを提示したが、今回のインタビューで場所が近いと参加するということを提示した留学生がいない。そのために、この要因では妥当性が低い。

参加要因モデル(修正版)

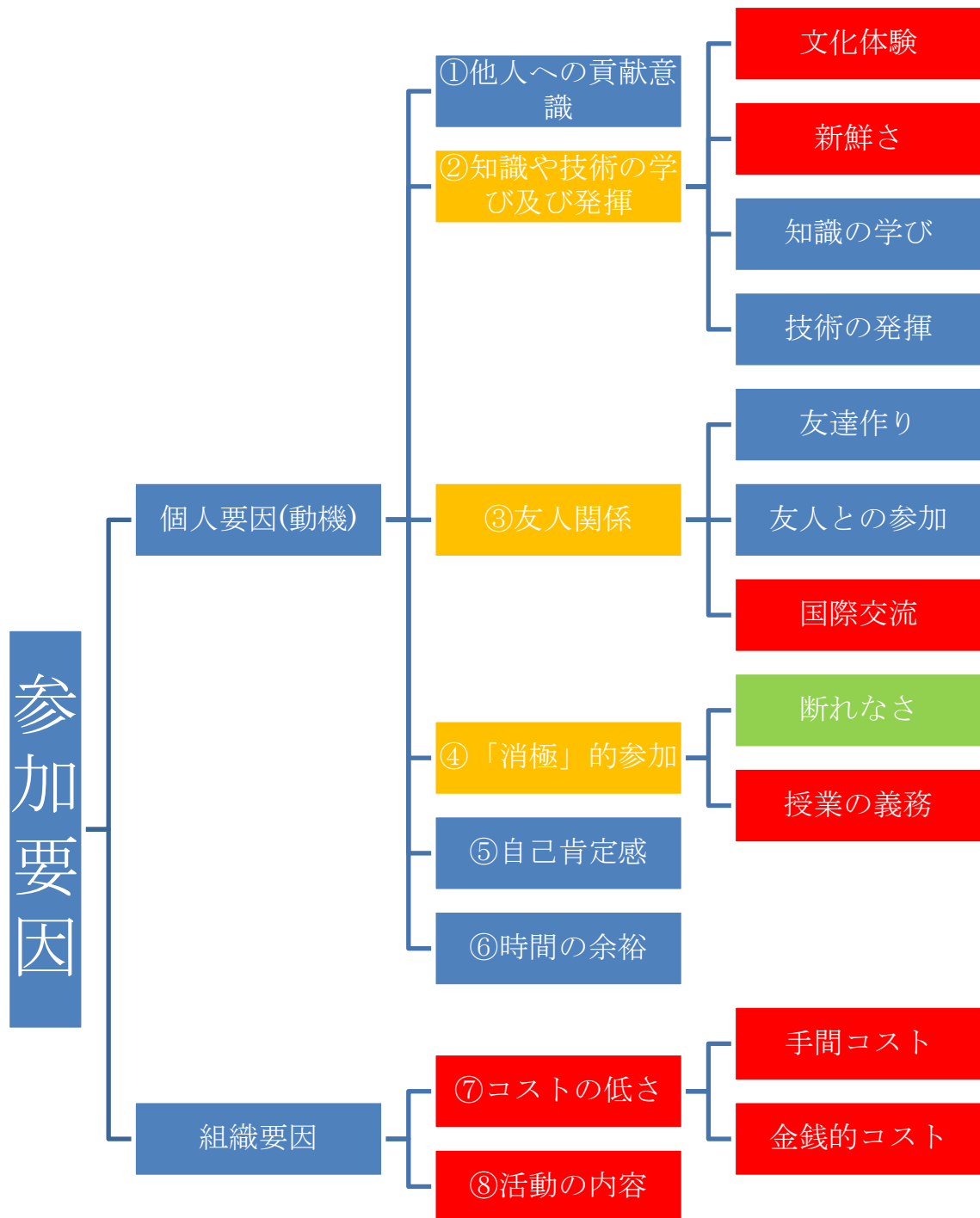


図 12 参加要因モデル(修正版)

図 12 の青い部分は仮説モデルと一致している部分である。赤い部分は仮説モデルで提示しない要因である。緑の部分は仮説モデルで提示したが、要因の名称を変更した要因である。黄色の中カテゴリーは名称が変わらないが、含まれる内容を変更しているものである。

## 第六章 地域国際交流活動への阻害要因

本章ではインタビュー対象者の発言内容の文字データにつけた小見出しにより、阻害要因の概念を見出し、整理する。その後、第二章で提示した仮説モデルと照らし合わせ、仮説モデルを修正し、阻害要因モデルを完成する。

### 6-1 分析方法

本研究は谷ほか(2010)<sup>13)</sup>を参照し、分析した。具体的には、インタビュー調査の音声データをすべて文章化し、パラグラフ単位で文字データを分割し、小見出しをつける。そして、留学生の参加要因と阻害要因を分析するために、参加要因と阻害要因と関連する部分を抽出し、内容を要約し、それぞれ内容とふさわしいコードの名称をつける。具体例は以下の表 33 の通りである。

表 33 データの分析の例(阻害要因)

語リ	翻訳	小見出し	要約・メモ	コード	参考文献
还有一些活动是我不知道这个活动的存在,比如茶道体验会还有八王子市举行的活动。	一部の活動の存在を知らない、例えば茶道体験会とか八王子市の活動とか	参加しない理由	活動の存在が知らない	情報入力不足	近藤ほか(2015)
还有一些活动比如就职活动还有文化体验是因为自己日语不好或者觉得有日语水平的限制就没有参加。	就職活動や文化体験活動は自分の日本語が上手ではないから参加しない	参加しない理由	日本語力の制限	日本語力不足	亀田(2015)
还有一些活动因为参加费用比较贵所以没有参加,比如国际课组织的去浅草寺的活动因为费用贵就没去。	一部の活動は費用が高いから参加しない。例えば旅行活動	参加しない理由	参加費用が高い	コスト(金銭的)	『大辞林 第三版』

コードをつける方法は二つある。一つはモデルを作った際に使った文献と他の関連する文献の概念を参照し、コードをつけた(表 34)。もう一つは先行文献で提示していないため、データに基づいて新たに類型を構成する(表 35)。

表 34 先行文献から取り出したコード一覧表

コード	参考文献	具体例
日本語不足	亀田(2015) <sup>6)</sup>	日本語の能力をちょっと心配する
授業により時間不足	大阪市(2009) <sup>7)</sup> 、篠原(1977) <sup>5)</sup>	時間だね、研究の時間と重なるかもしれないから活動に参加できない。実験の時間が長いから、時間的の調整ができない
アルバイトにより時間不足	大阪市(2009) <sup>7)</sup> 、篠原(1977) <sup>5)</sup>	私費留学生は生活のために、アルバイトしたりして、暇がない。
情報不足	近藤ほか(2015) <sup>8)</sup> 、大阪市(2009) <sup>7)</sup>	主に情報が分からない
友人不足	森岡(2016) <sup>9)</sup> 、Clary et al.(1998) <sup>3)</sup>	周りに一緒に活動を参加する友人がいない
情報発信不足	近藤ほか(2015) <sup>8)</sup> 、大阪市(2009) <sup>7)</sup>	活動の主催する側の宣伝が足りないから、活動を入手する方法を知らない、それは最も重要な原因だ

場所の遠さ	柴田(2007) <sup>10)</sup>	八王子市には活動があるが、遠くて行きたくない
-------	-------------------------	------------------------

表 35 先行研究で提示していないコード一覧表

コード	定義	具体例
英語力不足	英語が不得意であるため、参加しない	一部の留学生に関する活動は、英語でしゃべることが必要だと言われる。だから、英語でしゃべる人だけ参加できる
目的	自分の目的と一致している活動を選んで参加するが、一致しないと、活動に参加しない	自分の明確な目的があるからこそ活動を探す。昔の目的はリラックスだから、よく行った。
自己「保護」	周りの人に迷惑をかけないだけ、もっと親しみたくない。それゆえ、地域に溶け込む必要がないと考え、活動に参加しない	まだ地域に溶け込まない。まだ2年間しか住んでおらず、長く住んでいないから。周りの日本人に迷惑をかけないだけ。もっと親しみたくない。
友人関係の「固定」	留学生は自分の友人ネットワークを拡大したくないため、活動に参加しない	自分の友達の数拡大したくない。
手続き	手続きにコストがかかるため、留学生が活動に参加しない	学校の申請が手間かかる。
人数の制限	人数の制限により、参加できない	すべての人が行けるわけではないから、抽選する必要がある
費用	活動に参加するために、参加費がかかるから、活動に参加しない	一部の活動は費用が高いから参加しない。
活動の重複	他の組織の似たような活動に参加したことにより、参加しない	学校にはそういう活動があるから、行く必要がない
新鮮さの喪失	留学生が新鮮な感じを失い、活動に参加しない	最初の時は行きたかったが、新鮮味をなくなってからは参加したくない
内容の固定化	組織が毎年同じ内容の活動を開催することにより、留学生が参加しない	毎年行くところ、または活動自身はあんまり変わらない。去年の活動と同じだから、新鮮さがないので参加しない
交流内容の固定化	他の参加者と深くコミュニケーションができないため、参加しない	日本人とのコミュニケーションが深くないから行きたくない。

差別	差別を受けたこともあると感じているため、活動に参加しない	中国人として差別を受けた時もあると感じる
----	------------------------------	----------------------

川喜田(1967)<sup>14)</sup>が提唱したKJ法を用いて、内容が近いものを収集し、小カテゴリーを作成、さらに、小カテゴリーの内容が近いものを中カテゴリーにまとめる。そして、中カテゴリーの内容が近いものを大カテゴリーにまとめる。仮説モデルと照らし合わせ、仮説モデルを修正する。具体的な検証方法、調査結果としての小カテゴリーと中カテゴリーは仮説モデルの要因と定義と一致するかどうかである。分析結果の妥当性を高めるために、研究室のメンバーと協議を行い、分析した。

## 6-2 阻害要因に関するカテゴリー

インタビュー対象者の発言を整理するし、表 36 のように、阻害要因に関する 19 個の小カテゴリーを抽出した。そして、9つの中カテゴリーに統合した。さらに、個人要因と組織要因という二つの大カテゴリーに分類した。

表 36 阻害要因一覧表

大カテゴリー	中カテゴリー	小カテゴリー	定義	コード
個人要因	① 言語力不足	日本語力不足	日本語が上手ではないため、活動に参加しない	日本語不足
		英語力不足	英語が不得意であるため、参加しない	英語力不足
	② 余暇時間不足	時間不足	授業が多いため、参加しない	授業により時間不足
		経済力不足	家庭の経済状況がよくないために、アルバイトをする必要があり、活動に参加する時間がない	アルバイトにより時間不足
	③ 情報収集力不足	情報収集力不足	留学生が自ら情報を探す人が少ない、情報不足し、活動に参加することができない	情報不足
	④ 社会関係資源不足	社会関係資源不足	一緒に活動に参加する友達がいないと、一人で活動に参加しない	友人不足
	⑤ 「個人主義」志向	「消費者」志向	消費者として、自分の目的と一致している活動を選	目的

			んで参加する	
		自己「保護」志向	周りの人に迷惑をかけないだけため、もっと親しみたくない。それゆえ、地域に溶け込む必要がないと考え、活動に参加しない	自己「保護」
		友人関係の「固定」志向	留学生は自分の友人ネットワークを拡大したくないため、活動に参加しない	友人関係の「固定」
組織要因	⑥ 情報発信不足	情報発信不足	組織側が情報を発信しても、留学生は認識されていない	情報発信不足
		⑦ コスト	距離	動の開催する場所が遠いため、活動に参加しない
		人数	人数の制限により、参加できない	人数の制限
		手続き	手続きにコストがかかるため、留学生が活動に参加しない	手続き
		費用	参加費がかかるから、活動に参加しない	費用
	⑧ 活動の内容	活動の固定化	組織が毎年同じ内容の活動を開催するところにより、留学生が参加したくない	活動の固定化
		活動の重複	他の組織の似たような活動に参加したことにより、参加しない	活動の重複
		新鮮さの喪失	新鮮な感じを失い、活動に参加しない	新鮮さの喪失
		交流内容の固定化	活動で、他の参加者と深くコミュニケーションができないため、参加しない	交流内容の固定化
	⑨ 差別の抑制の失敗	差別の抑制の失敗	差別を受けたこともあると感じているため、活動に参加しない	差別

### 6-3 阻害要因への考察

本節は調査と結果と仮説モデルと比較しながら、考察する。本節での表の語りは、筆者が直訳し、整文している。

仮説モデルで提示したすべての要因は今回のインタビュー調査で示された。それ以外に、個人選択、コスト、活動の内容、差別の抑制の失敗という中カテゴリの要因が示された。

#### 【個人要因】

##### ①言語力不足

「言語力不足」は主に「日本語力不足」と「英語力不足」という2つに分類できる。

「日本語力不足」とは日本語が上手ではないため、活動に参加しないことである。インタビュー調査で、9名の学生(1さん、2さん、3さん、4さん、5さん、10さん、11さん、12さん、18さん)が日本語能力の不足により、日本語でうまくコミュニケーションできない(4さん、10さん、11さん、12さん)、気まずい状態に陥りやすい(4さん)、地域国際交流活動に溶け込まない(1さん)などのことを提示した。

また3名の学生(14さん、29さん、31さん)は英語が得意ではないため、英語でコミュニケーション活動に参加できないと回答した。そのため、英語が不得意であるため、参加しないことという回答を一つのカテゴリにまとめ、「英語力不足」と定義した。

仮説モデルで日本語不足という要因だけ提示した。しかし、地域国際交流活動には英語でコミュニケーションする必要な活動があるため、英語でうまくコミュニケーションできない留学生に対しては、それらの活動に参加できない。亀田(2015)<sup>6)</sup>が研究した教育プログラムは日本語で交流するため、英語の要因が提示しなかった。しかし、本研究で定義した地域国際交流活動には、英語で交流する活動も含まれる。そのため、英語は一つの阻害要因である。英語あるいは日本語能力不足により、うまくコミュニケーションできない、またそれに対しての心配を「言語力不足」として定義した。

以下の表37は言語力不足について調査対象が語った内容である。

表37 言語力不足について調査対象の語り

小カテゴリ	対象者	語り
日本語力不足	1	主に言語の問題だと思う。私は <u>日本語</u> を学ばないまま日本に来た。だから日本語で話すことに困っている。 <u>言語の問題</u> により、活動に溶け込めないと心配している。
	2	就職活動や文化体験活動は自分の <u>日本語が上手ではない</u> から参加しない



	3	<u>日本語の能力</u> をちょっと心配する
	4	後は言語力だね。自分の <u>日本語が上手ではない</u> し、日本文化に詳しくないし、自分が話した内容について他の人が分からないかもしれない
	4	たまに完全に聞き取れない時、相手がお邪魔したような態度で、気まずい状態に陥った
	5	<u>日本語</u> が聞き取れない時もある
	10	それに <u>日本語能力は高くない</u> から、コミュニケーションする時は難しい。
	11	<u>日本語のコミュニケーションに支障</u> をきたす
	12	日本に来たばかりの時は <u>日本語がよくない</u> から、日本人と交流する自信がない
	18	自分の <u>言語力(日本語)</u> に自信がない
英語力不足	14	活動に参加する目的は英語を練習する学生が多いですね。 <u>英語を使わない</u> 留学生が(活動に参加するのは)恥ずかしいから。
	29	昔、英語で話す活動があったが、私は <u>英語が得意ではない</u> から、行きたくない
	31	一部の留学生に関する活動は、英語でしゃべることが必要だと言われる。だから、 <u>英語でしゃべる人だけ参加できる</u>
	31	<u>英語でしゃべるのであれば、恥ずかしくて参加したくない</u>

## ②余暇時間不足

先行研究に基づけば大阪市(2009)<sup>7)</sup>の調査結果と篠原(1977)<sup>5)</sup>の市民参加の理論によれば、余暇時間は地域国際交流活動への参加に影響する一つの要因とし考えられた。そこで、留学生の余暇時間不足の原因は授業やアルバイトが多いからであるという予測し、仮説モデルを立てた。仮説モデルでは「余暇時間不足」をさらに、「時間不足」と「経済力不足」に分類した。「余暇時間不足」は授業が多いため、参加しないという状態である。「経済力不足」は家庭の経済状況がよくないために、アルバイトをする必要があり、地域国際交流活動に参加する時間がないという状態である。

インタビュー調査で阻害要因の中で提示された人数が最も多いのは時間不足であった。インタビュー調査を受けた、31名の学生の内25名の学生が仮説モデルの通り、余暇時間不足を挙げた。余暇時間不足の原因は主に授業とアルバイトが多いからである。22名の留学生は授業により時間不足を提示した。4名の学生(8さん、11さん、13さん、14さん)はアルバイトが忙しいと回答した。アルバイトと家庭の経済状況との関係について、1名の学生(14さん)はアルバイトの理由は経済状況が悪いため、アルバイトが必要だと述べた。これは経済力不足という仮説とほぼ一致している。

以下の表38は余暇時間不足について調査対象が語った内容である。

表38 余暇時間不足について調査対象の語り

小カテゴリー	対象者	語り
時間不足	1	時間だね、 <u>研究の時間と重なる</u> かもしれないから活動に参加できない。実験の時間が長いから、時間的の調整ができない
	3	<u>テスト、研究が大変</u> だから時間がない
	5	<u>勉強もあるし</u> 、他の計画があるから(時間がない)
	6	<u>授業が多い</u> から時間がない
	7	時間がないから。また、一部の活動は交換留学生向けだから、普通の留学生には時間が合わない。その時、 <u>授業がまだ終わっていないし</u> 、期末テストの時期だった
	9	また時間が少ない。バイトや <u>授業がある</u> から。
	10	バイトの時間が長いから、暇の時間が少ない。一週間バイトが20時間、 <u>プラス授業の時間</u> 、暇な時間がほぼいない。
	12	今は日本語が上手になったが、 <u>授業が忙しくて</u> 、活動に参加する時間がない
	15	昔の国際課からのメールにより、小学校に行く活動を知っていた。し

		かし、その時はちょうど夏休み中だった、私の帰国時間がかち合った。 しかし、休みじゃないと <u>授業があるし</u> 、行けないかもしれない
	16	平日は毎日朝 10 時から夜 8 時まで、 <u>研究のため、ずっと学校にいるから</u> 、参加する時間がない。
	17	<u>勉強</u> 、バイト、試験などが忙しい
	18	また、 <u>勉強</u> とバイト、また就職活動が忙しくて、暇の時間がない
	20	スケジュールと合わないです。 <u>授業が忙しい</u> ところもあるし。
	21	一部の活動は平日で行うので、 <u>授業があるから</u> 、行けない
	23	毎週の <u>授業が 20 時間</u> 、アルバイト 20 時間、宿題もあるし、余暇時間がない
	24	あとは時間の問題だ。 <u>研究する時間が長い</u> 、最近毎日 6 時間ぐらいしか寝られない。月曜日から金曜日まで全部忙しいから、土日は休みたい
	25	時間の問題が第一。 <u>授業</u> とアルバイト、また他の活動により、時間がない。
	26	すごく参加したいけど、時間に合わないから。就職活動とアルバイト、授業は被らないが、 <u>授業があるから</u> 、午前はバイトできない。
	27	また時間の原因、 <u>授業</u> やアルバイトが忙しいから。一週間で一日しか休めない
	28	時間がないとは当たり前のこと、 <u>授業</u> 、アルバイト、また研究室のプロジェクトが忙しいだから。
	30	バイトや <u>試験</u> などが忙しいから、行く時間がない。
	31	今は <u>勉強</u> が忙しい
経済力不足	14	後はアルバイトが忙しいから、授業が終わったら、すぐ帰りたい。 <u>私費留学生は生活のために、アルバイトしたりして</u> 、暇がない。生活、勉強などいろいろな面で心配している。

### ③情報収集力不足

今回のインタビュー調査で22名の学生は活動の情報が分からないことを挙げた。近藤ほか(2015)<sup>8)</sup>は留学生が情報弱者ということを示した。また、大阪市(2009)<sup>7)</sup>の調査でも参加する方法がわからないという選択肢を選んだ外国人が3割近くを占めた。そのために、仮説モデルで「情報収集力不足」という要因を提示した。具体的には留学生は情報を収集する方法が分からないため、参加しないと定義した。

本研究のインタビュー結果により、「情報収集力不足」という要因の内容を変更した。インタビュー結果により、留学生が情報を知らない原因として、留学生が自ら情報を探すが少ないということである。インタビュー調査により、31人の中で7人しか自らインターネットで活動の情報を調べない。自ら情報を調べるよりは、多くの留学生は友達や学校からのメールなど受動的な方法で情報を入手していることが明らかになった。

留学生が自ら情報を探さない理由について、主に2つの理由がある。まず、どこで活動の情報を入手することが分からないということである。それは仮説モデルで定義した「情報収集力不足」と一致している。情報を入手する方法が分からない理由は、学校外の組織の存在を知らないことにより、直接学校外の組織のHPもアクセスできない、さらに学校外の組織の活動を知らないということである。

しかし、学校外の組織を知らなくても、大学の国際課・国際センターで学校外の組織の活動の情報を掲載しているため、そこで情報を入手することができる。それを知っている留学生にとって、自ら情報を探さない理由は国際課・国際センターが遠いため、普段は行かないということである。インタビュー調査により、留学生は毎日国際課・国際センターに行くわけではなく、用事がある時だけ行くということを示した。国際課・国際センターが遠いため、大部分の留学生は国際課・国際センターに行くときついでに活動の情報を見るが、わざわざ情報を見るために国際課・国際センターに行く留学生はいないということが明らかになった。その点は仮説モデルで提示していないため、新しい知見として加えることができる。

以下の表39は情報不足について調査対象が語った内容である。

表39 情報不足について調査対象の語り

対象者	語り
1	<u>活動の情報を入手する方法が分からない</u> 。例えば料理教室という活動は興味があるが、昔は活動の存在を知らなかった
2	<u>一部の活動の存在を知らない</u> 、例えば茶道体験会とか八王子市の活動とか
4	こういう方面な <u>情報は知らない</u> 。普段はあんまり気付かなかったかもしれない、わ

	かった情報がすくない
5	主に <u>活動を知らない</u>
9	主に <u>情報が分からない</u>
10	外国人留学生だから、地域の住民みたいにすぐ活動の <u>情報を知っているわけではない</u> 。自分から情報を収集する必要がある。
13	また、活動周知の原因もある。参加したいときはあったが、活動の情報を手に入れないと、 <u>活動が分からない</u> 、参加できない。
16	<u>情報の3割ぐらいしか知らない</u> 、他の多くは終わってから他の人から聞いた。主催する側の宣伝が不足
17	八王子市の活動は <u>あんまり知らない</u> 。
18	八王子の活動は多くの人は <u>知らない</u>
19	<u>情報を入手する方法を知らない</u> 。
20	八王子市の活動についての <u>情報をもらうところがない</u> ですね。あっちから僕のメールアドレスを知っているわけではないし。新聞が来るが、それを見る人がほぼいないです。人が見るようにすればいいと思うけど、ほとんど来たら捨てる。多分イベントの伝え方を変えるほうがいいじゃないか。チラシとかはあんまり効率ではない。情報の問題ですね。
21	ボランティア活動に参加しないが、自分で情報を探したくないから、 <u>活動の情報をもらえない</u>
22	〇〇組織に加入しないから <u>情報がもらえない</u>
24	まず <u>知らない</u> 。友達が少ないし、学校のメールは来ないときもある
25	先、国際課のメーリスでメールをもらっていると言っていましたけど、交換留学生と普通の留学生のメーリスが違いみないで、交換留学生に送られるメーリスに僕は含まれていない。だから、先々週国際課が企画して、富士山に行く活動がある。この <u>情報が届いていない</u> 、メーリスで。多分掲示を見たらわかると思うが、国際課に行く機会はない。
26	それ(情報)は <u>わからない</u> から
27	<u>情報をもろう方法がない</u> 、活動の存在を知らない
28	<u>知っている(情報)が少ない</u>
29	参加しない理由は主に活動の <u>情報を知らない</u> 。八王子市の広報紙を読むと、ほとんどは子育ての活動だから、私が参加できる活動が少ない。だから、情報をもろう手段がない
30	確かに <u>情報をもっていない</u> 、活動を主催する側に聞くしか分からない。彼らは奨学金を受け取っている学生だけに連絡する。普通の留学生に連絡しないから、活動の情報を知らない。自分が情報を調べない限り、活動がわからない。

30	学校が <u>いつ活動の情報を送ったのが全然わからない</u> 。活動が終わった後に活動の存在を分かったということもあった。
31	普段は行ってから、活動の存在が分かった。私たちに <u>活動の情報を知らせる方法がない</u> 。

#### ④社会関係資源不足

森岡(2016)<sup>9)</sup>は社会的資源の理論により、人々は関係という資源の保有量に差異がある。Clary et al. (1998)<sup>3)</sup>は友人が活動しているかどうか参加要因の一つであると指摘した。逆に言えば、友人がいないことは阻害要因の一つだと考え、仮説のモデルにいった。仮説モデルの「社会関係資源不足」とは一緒に活動に参加する友人がいないと、留学生は一人で活動に参加しないということである。

本研究のインタビュー調査では、約半分の留学生(13名)が一人で活動に参加しにくいと述べた。その理由について、一緒に活動に参加する友人がいないと、留学生は不安(1さん、5さん、20さん)あるいは退屈(4さん、17さん、30さん)を感じる、参加しないということが明らかになった。それゆえ、留学生は一緒に活動に参加する人が存在しないことは地域国際交流活動への参加の阻害要因を示すと言える。

以下の表40は社会資源不足について調査対象が語った内容である。

表40 社会関係資源不足について調査対象の語り

対象者	語り
1	<u>友達と一緒に参加したい</u> 。一人なら、言語問題により場所に見つかるまで時間がかかる。また、説明してもらえないと、活動の意味が分からない。活動の意義が分からないと参加する意義がないと思う。
1	<u>友達と一緒に参加すると</u> 安全感がある。
3	<u>周りに一緒に活動を参加する友人がいない</u>
4	一人で住んでいるし、周りに住んでいる <u>友達がいない</u> 。そういう活動は友達と一緒に参加した方がいいと思う。自分も自ら他の人を誘うタイプじゃない。
4	そういう活動は <u>友達と一緒に</u> 参加した方がいいと思う。一人ならつまらないし、寂しい
4	<u>友達が一緒に行かないと、つまらない</u> 。私は友達に連れられて、遊ぶタイプ
5	人が多い活動は苦手で、特に知り合いがいない状態で、 <u>一緒に活動に参加する友達がいない</u> という原因もある。
15	私に誘われる <u>友達はいなかった</u>
16	友達と一緒にいきたい、 <u>一緒に行く友達がいない</u> と行きたくない
17	<u>一人ならつまらない</u>
18	<u>馴染む人がいない</u> と、自分のコミュニケーション力が弱いから、交流が順調ではない時がある

20	知り合いが一人いたら落ち着いたじゃないですか。 <u>一人もいないと不安</u> というか、 <u>落ち着かない</u> 。
25	<u>一人で参加するのは難しく感じる</u>
26	そういう活動なら、 <u>友達が一緒に行かないと行かないね</u> 。
28	時間があるときは <u>知り合いと一緒に出かけたい</u> 、知らない人と一緒に行動したくない
30	活動に参加しているのは <u>知らない人ばかりであれば、つまらないと思う</u>



## ⑤「個人主義」的志向

本研究のインタビューにより、仮説モデルでの個人要因には存在しない阻害要因が示された。それは、留学生が自分の考えや利益を重視し、自分の目的や利益と違う活動に参加しないということである。これを本研究では「『個人主義』的志向」<sup>42</sup>と定義する。

「『個人主義』志向」は、「『消費者』志向」「自己『保護』志向」「友人関係の『固定』志向」に構成される。

「『消費者』志向」とは留学生は消費者として、自分の目的と一致している活動を選んで参加するということである。留学生はそれぞれ自分の目的を抱え、日本に来た。例えば主に知識を学ぶために日本に来た。それゆえ、勉強以外に時間をかからないため、活動に参加しない。インタビュー調査で3名の留学生(4さん、18さん、19さん)は自分の目的、ニーズと一致したら、参加し、一致しないと、活動に参加しないと回答した。それらの回答を「『消費者』志向」と名付けた。

次に本研究で提示された「自己『保護』」<sup>43</sup>志向とは、留学生(14さん)が周りの人に迷惑をかけないだけため、もっと親しみたくない。それゆえ、地域に溶け込む必要がないと考え、活動に参加しないということである。それは、暴力から自分を守るのではなく、抽象的意味での保護だと考える、「自己『保護』志向」と名付けた。インタビュー調査で一人の学生は「自己『保護』志向」と提示した。

「友人関係の固定志向」とは、留学生は自分の友人ネットワークを拡大したくないため、活動に参加しないということである。大部の地域国際交流活動の目的は国際交流である。また、第五章で、多くの留学生は友達作りのために、活動に参加するということになった。一方、留学生は新しい友達を作りたくないなら、友達作りという目的の地域国際交流活動に参加しないという可能性がある。今回のインタビューで、2名の留学生(14さん、28さん)は友人がいるため、自分のネットワークを拡大する必要ではないと示した。つまり、留学生は自分の友人ネットワークを固定していると考え、これを「友人関係の固定志向」と名付けた。

次のページの表 41 は個人的志向について調査対象が語った内容である。

---

<sup>42</sup> 『大辞林 第三版』では志向とは、意識ある目的へ向けることである。個人主義とは多義的な言葉であるが、『大辞林 第三版』<sup>24)</sup>では個々の人格を至上のものとして個人の良心と自由による思想・行為を重視し、そこに義務と責任の発現を考える立場、あるいはその人の属している組織全体・社会全体のことを顧慮せずに、個人の考えや利益を貫く自分勝手な態度であると定義した。

<sup>43</sup> 『大辞林 第三版』では保護は危険・破壊・困難などが及ばないように、かばい守ることであるとされる。

表 41 個人的志向について調査対象の語り

小カテゴリー	対象者	語り
「消費者」志向	4	自分の明確な <u>目的</u> があるからこそ活動を探す。昔の目的はリラックスだから、よく行った。普段の授業がある時間は見ない。例えば、今日の目的は勉強だから、例えば、面白い活動を見ても参加しない。
	18	日本語学校の時日本語を勉強するために <u>行きたかった</u> が、現在私たちの <u>目的</u> がさらに強いから、行きたくない
	19	<u>個人選択</u> だと思う。例えば余暇時間でバイトするならお金を稼ぐ、余暇時間で勉強するなら奨学金をもらえる。人々はそれぞれの目的性を持っている。
自己「保護」志向	14	まだ地域に溶け込まない。まだ2年間しか住んでおらず、長く住んでいないから。周りの日本人に迷惑をかけないだけ。もっと親しみたくない。
友人関係の固定志向	14	友達がいるから、 <u>新しい友達がなくていい</u>
	28	自分の <u>友達の数を拡大したくない</u> 。活動も日本人と交流するが、研究室に日本人がいるから、わざわざ他の日本人と話す必要がない

## 【組織要因】

### ⑥情報発信不足

仮説モデルで「情報発信不足」と「組織間の繋がり不足」という組織要因も提示した。「情報発信不足」とは活動を開催する組織が情報発信に力を入れないということである。「組織間の繋がり不足」とは各組織は自分の組織の情報だけ発信するということである。第三章では、地域国際交流活動が開催した組織の情報発信方法を比較した。八王子市と八王子国際協会が様々な手段で情報を発信していることを明らかになった。各組織は他の組織と連携し、発信することを明らかになった。

しかし、インタビュー調査で、組織側の「情報発信不足」と提示した留学生が11人いた。つまり、組織側が情報を発信しても、留学生は認識されていないということが明らかになった。留学生「情報収集力不足」のところも提示したが、自ら情報を探すよりは、多くの留学生は友達や学校からのメールなど受動的な方法で情報を入手していることが明らかになった。しかし、インタビューによると、すべての留学生の連絡方法を知っているわけではないため、直接にメール送信の方法により連絡できない。すべての留学生にパンフレットを配布すると、コストが高いため、現在の予算により、この方法は実現できないということが明らかになった。そのため、すべての留学生は直接に学校外の組織から情報を入手することはできない。

以下の表42は情報発信不足について調査対象が語った内容である。

表42 情報発信不足について調査対象の語り

対象者	語り
6	活動の <u>主催する側の宣伝が足りない</u> から、活動を手に入れる方法を知らない、それは最も重要な原因だ
11	八王子市の活動の <u>宣伝が足りない</u>
13	また、 <u>活動周知の原因</u> もある。参加したいときはあったが、活動の情報を手に入れないと、活動が分からない、参加できない。
16	情報の3割ぐらいしか知らない、他の大部は終わってから他の人のところから聞いた。 <u>主催する側の宣伝が不足</u>
20	<u>八王子市の活動についての情報をもらうところがない</u> ですね。あっちから僕のメールアドレスを知っているわけではないし。新聞が来るが、それを見る人がほぼいないです。人が見るようにすればいいと思うけど、ほとんど来たら捨てる。多分イベントの伝い方を変えるほうがいいじゃないか。チラシとかはあんまり効率的ではな

	い。情報の問題ですね。
22	〇〇組織に加入しないから <u>情報がもらえない</u>
24	まず知らない。友達が少ないし、 <u>学校のメールは来ない</u> ときもある
25	以前、国際課のメーリスでメールをもらっていると言っていましたけど、交換留学生と普通の留学生のメーリスが違いみないで、交換留学生に送られるメーリスに僕は含まれていない。だから、先々週国際課が企画して、富士山に行く活動があります。 <u>この情報が届いていないですね</u> 、メーリスで。多分掲示を見たらわかると思うが、国際課に行く機会はない。
29	参加しない理由は主に活動の情報が知らない。 <u>八王子市の広報紙を読むと、ほとんどは子育ての活動だから、私が参加できる活動が少ない。</u> だから、情報をもらう手段がない
30	確かに情報をもらっていない、活動の <u>主催する側に聞くだけ</u> わかる。彼らは <u>奨学金を受け取っている学生だけ連絡する</u> 。普通の留学生に連絡しないから、活動の情報を知らない。自分が情報を調べない限り、活動がわからない。
31	学校からの活動に関連する <u>メールがもらったことがない</u>

## ⑦コスト

広義的なコストとは金銭だけではなく、あるものごとを達成するのに掛かった物理量である。本研究で提示したコストとは組織側が設定したコストが留学生の活動側の参加を阻害することである。「コスト」をさらに、「距離」「人数」「手続き」「費用」に分類した。

「距離」とは、活動の開催する場所が遠いため、活動に参加しないということである。

柴田(2007)<sup>10)</sup>は高齢者の社会参加の関連要因について、活動の場へのアクセスや交通の利便性が地域環境・組織要因中での一つの要因であると指摘した。つまり、活動の場へのアクセスが不便であることにより、活動に参加しないのである。この要因は留学生の活動参加に当てはまると考え、仮説モデルではその要因を「活動の場所が遠い」と名付けた。

今回のインタビュー調査で10名の学生は活動が開催される場所が遠いと提示した。アクセスが不便ということが留学生の地域国際交流活動の不参加の理由に当てはまる。活動の場所が遠いために、活動の参加へは、移動コストをかかえる必要がある。それゆえ、「活動の場所が遠い」という要因を「距離」と変更し、「コスト」という中カテゴリーに入れた。

「手続き」とは手続きにコストがかかるため、留学生が活動に参加しないということである。一部の活動は先着順で決めたものがある。それゆえ、申請の時間が短くなり、申請情報を知らない、参加できないという可能性がある。参加するならば、申請の情報を常に確認する必要がある。そうしないと、申請の時間に間に合わない時もある。インタビュー調査で、申請の時間が間に合わない留学生がいるということが明らかになった(12さん)。

また、申請の手続きが複雑な場合もある。留学生にとって日本語は母国語ではないため、日本語が上手ではないという可能性がある。それゆえ、手続きにさらに時間がかかる。また、勉強などが忙しいため、申請の手続きに時間をかけたくないことで、参加しないということも明らかになった(15さん)。

「費用」とは活動に参加するために、参加費がかかるから、活動に参加しないということである。今回のインタビュー調査で6名の学生は参加費用の問題を提示した。参加費用が高い活動は留学生として参加したくない(2さん、7さん、9さん、12さん、17さん)。また、活動と似たようなアルバイトがあれば、参加費がかかる地域国際交流活動には参加したくないということが明らかになった(27さん)。

「人数」とは人数の制限により、参加できないということである。人数の制限により参加できない留学生の語りを「人数」という小カテゴリーに入れた。

一部の活動には活動の規模により、人数の制限がある。そのため、すべて申請した留学生が活動に参加できるわけではない。それゆえ、抽選する場合がある。しかし、抽選すれば、一部の学生が落選する可能性がある。インタビューでは抽選の結果、参加できない留学生4人がいた(3さん、5さん、27さん、28さん)。故に、「人数」も一つの阻害要因である。人数の制限は組織側が投入費用というコストを制限した結果である。しかし、組織側が投入費用というコストの制限が留学生の参加に阻害するため、「コスト」という中カテ

ゴリーに入れた。

以下の表 43 はコストについて調査対象が語った内容である。

表 43 コストについて調査対象の語り

小カテゴリー	対象者	語り
距離	2	学校から <u>遠い場所</u> で開催する活動は行きたくない、夜帰るときに不便だから
	4	そして <u>遠いから</u>
	12	八王子市には活動があるが、 <u>遠くて行きたくない</u>
	14	多分人文まで <u>遠いから</u> 、あんまり国際課に行かない。
	18	<u>場所が遠い活動</u> は行きたくない
	20	(場所は) <u>近い方がいい</u> と思います
	22	八王子市の活動の <u>交通の問題</u> だ。八王子に行くより、新宿に行った方が便利だし、時間がかからない。
	23	八王子市の活動が早い、例えば掃除活動、集合時間が早い。八王子市は広いから、自宅から活動の開催する <u>場所まで遠い</u> ので、早く起きて準備することが必要だ。
	27	参加しない理由は <u>場所の問題</u> だ、遠いだから
	30	<u>学校が遠いから</u> 、学校に行くなら不便
手続き	12	学校の活動は事前に申請することが必要だが、 <u>申請</u> を忘れた時もあるし、その後行きたいが、申請の時間が終わった。
	15	学校の <u>申請</u> が手間かかる。今の生活の中心は研究だから、ボランティア活動に時間がかけたくない。
費用	2	一部の活動は <u>費用が高い</u> から参加しない。例えば旅行活動
	7	会費以外に <u>参加費</u> が必要
	9	そして <u>お金</u> も原因だ
	12	<u>費用が高い活動</u> は行きたくない
	17	<u>費用の問題</u> 、たとえば費用が高いなら行きたくない
	27	バイトで似たような活動があるから、 <u>報酬もある</u> し、だからあつちは優先的に考える
人数	3	でも <u>6人しか参加できない</u> から、ちょっと少ないと思う
	5	すべての人が行けるわけではないから、 <u>抽選</u> する必要がある
	27	ボランティア活動に興味があるが、 <u>抽選</u> が必要な活動が多いから、なかなか当たらない
	28	国際課からの活動に関するメールが来たことがあるが、申請しても返事がなかった。多分人数制限があり、 <u>抽選</u> する必要があるかもしれない

## ⑧活動の内容

「活動の内容」とは活動内容の固定化や重複により、留学生にとって新鮮さを失ったということである。「活動の内容」は、「新鮮さの喪失」「内容の固定化」「内容の重複」「交流内容の固定化」に構成される。

「新鮮さの喪失」とは留学生が新鮮な感じを失い、活動に参加しないということである。インタビュー調査で3名の留学生(4さん、9さん、18さん)は活動に関する新鮮味がなくなったため、参加しないと回答した。これらの語りを「新鮮さの喪失」と名付けた。

「活動の固定化」とは組織が毎年同じ内容の活動を開催するところにより、留学生が参加したくないということである。インタビュー調査で3名の留学生(7さん、20さん、31さん)は活動の内容が毎年同じであるため、参加しないと回答した。この要因を「活動の固定化」と名付けた。

「活動の重複」とは他の組織の似たような活動に参加したことにより、参加しないということである。インタビュー調査で4名の留学生(18さん、26さん、28さん、30さん)は他の組織の似たような活動に参加したことがあるため、参加しないと回答した。この要因を「活動の固定化」と名付けた。

「交流内容の固定化」は活動で、他の参加者と深くコミュニケーションができないため、参加したくないということである。インタビュー調査で3名の留学生(17さん、23さん、29さん)が活動で深くコミュニケーションできないという要因を挙げた。

本研究のインタビュー調査では、各組織の活動は毎年固定され、内容もほぼ同じであるため、他の人と深くコミュニケーションができなく、留学生にとって新鮮な感じが失い、活動に参加しないということが明らかになった。インタビュー調査の時、大学1、2年生、あるいは日本に来たばかりの時、周りのすべてのものに対して新鮮を感じ、様々な組織の様々な活動に参加した傾向があるということが明らかになった。その後、似たような活動に参加したことがあるから、他の組織の似たような活動があっても、新鮮な感じが失われ、参加しないとすることを明らかになった。学校外の組織の活動と大学国際課・国際センターの活動から見れば、毎年開催する活動の枠組みが固定され、内容は大きく変化するわけではない。留学生にとって新鮮味がないという可能性があると言えるだろう。

以下の表44は活動の内容について調査対象が語った内容である。

表 44 活動の内容について調査対象の語り

小カテゴリー	対象者	語り
新鮮さの喪失	4	<u>来たばかりの時はいろいろなところに行きたかったが</u> 、今はそうではない。基本的に家と学校だけ行く
	4	来たばかりの時は日本語が上手ではないとしても行ったが、今はしない。多分、 <u>新鮮さがなくなった</u> かもしれない。
	9	<u>新鮮さがなくなった</u>
	18	最初の時は行きたかったが、 <u>新鮮さをなくなってからは参加したくない</u>
活動の固定化	7	<u>活動の流れが同じ</u> で、新しさがない
	20	学校の活動に参加しない理由としては、2年まではよく参加するが、3、4年からは参加しなくてもいいなあ。高尾山のことを <u>毎年するし</u> 、毎年参加する必要があるかなと思う
	31	毎年行くところ、または <u>活動自身はあんまり変わらない</u> 。去年の活動と同じだから、新しさがないので参加しない
活動の重複	18	留学生会はすでに活動があるから、他の <u>似たような活動</u> は参加しなくてもいい
	26	大学内で足りると思うから、僕はわざわざ <u>他の交流できる場</u> は探していない
	28	<u>学校にはそういう活動があるから</u> 、行く必要がない
	30	日本に来てから、様々な活動に参加したことがある。 <u>変化がないから</u> 、参加したくない
交流内容の固定化	17	毎回 <u>同じ話題</u> を話すのでもう飽きた。
	23	一部の活動ではちゃんと <u>コミュニケーションすることができない</u> 、自分の考え方を話すことができない。
	29	日本人との <u>コミュニケーションが深くないから</u> 行きたくない。毎回一番簡単なものだけ話せる。



### ⑨差別の抑制の失敗

「差別の抑制の失敗」とは地域貢献活動に他の参加者から差別を受けたこともあと感じていることにより、活動に参加しないということである。

インタビュー調査で、ある留学生(11 さん)は自分の国籍のことで、差別を受けたこともあと感じているため、活動に参加しないことがある。それは一つの阻害要因として提示された。田中(1996)<sup>14)</sup>は在日中国人留学生 327 人を対象とした調査においては、41%の中国人留学生は日本留学の不満として「アジア留学生を差別する傾向がある」と答えた。地域国際交流活動は国際交流や、外国人支援のために開催している。そのため、仮説モデルを構築した時点では、差別の発生はしないと予測したが、外国人を差別している人も参加することは予測外である。それは組織側の抑制の失敗だと考える。本研究で参考した先行研究では国籍による差別は提示したことがないため、それは新しい知見だと考える。

以下の表 45 は差別の抑制の失敗について調査対象が語った内容である。

表 45 差別の抑制の失敗について調査対象の語り

対象者	語り
11	中国人として差別を受けた時もあると感じる

インタビューで「天候が悪い、参加しない」という理由も出てきた。しかし、なぜ天候が悪いから参加しないのかが明らかになっていない。そのため、分析ができないため、モデルにから除外することとする。

## 阻害要因モデル

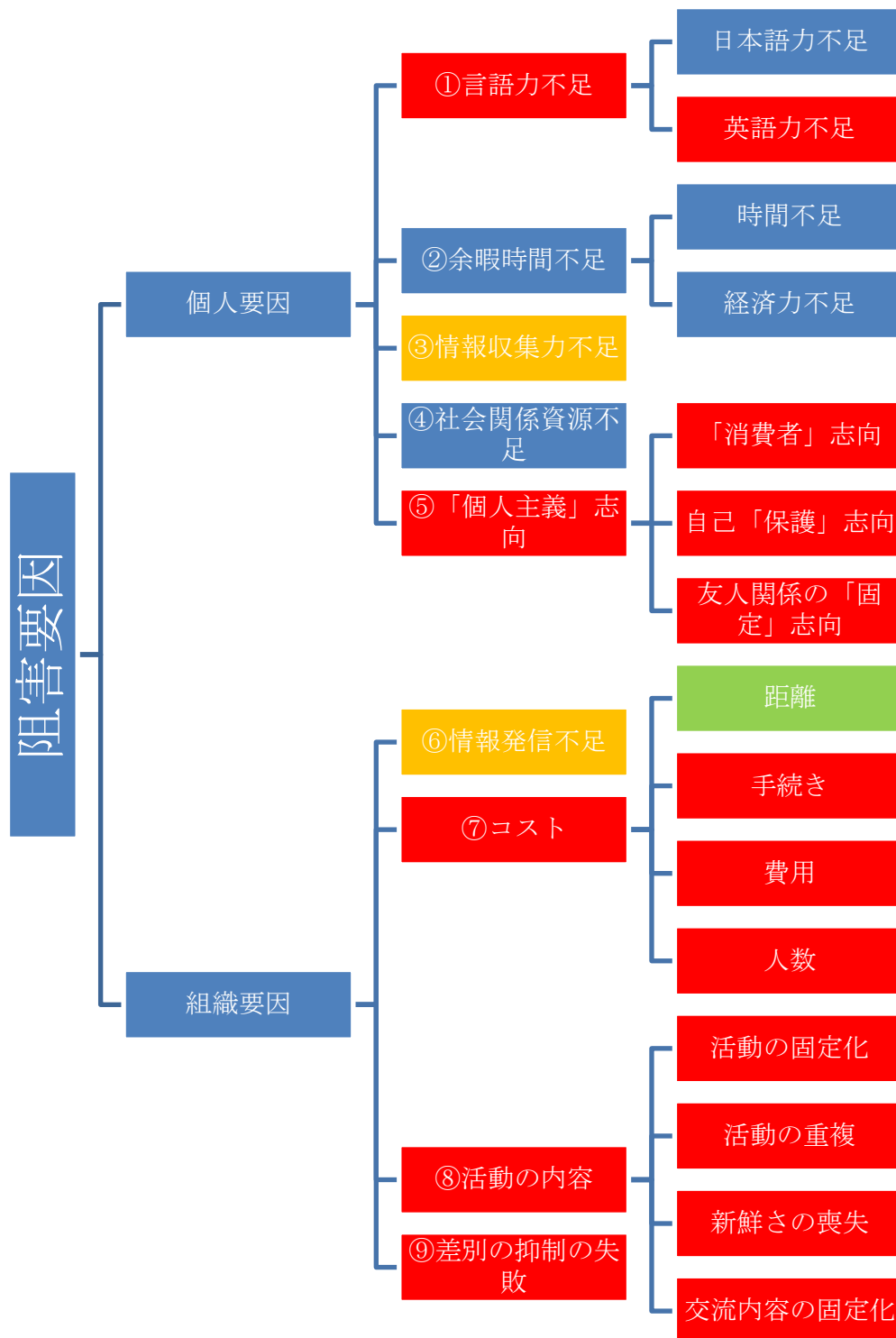


図 13 阻害要因モデル(修正版)

図 13 の青い部分は仮説モデルと一致している部分である。赤い部分は仮説モデルで提示しない要因である。緑の部分は仮説モデルで提示したが、要因の名称を変更した要因である。黄色の中カテゴリーは名称が変わらないが、含まれる内容を変更しているものである。

## 第七章 留学生の地域国際交流活動の参加への提言

本章は留学生の地域国際交流活動への参加要因と阻害要因の調査結果を踏まえて、活動を開催する組織側に留学生を地域国際交流活動に参加させる方法を提言する。

本研究の知見として、参加要因については大きく個人要因と組織要因に分類できる。個人要因はさらに「他人への貢献意識」、「知識や技術の学び及び発揮」、「友人関係」、「『消極』的参加」、「時間の余裕」、「自己肯定感」の6つの中カテゴリーに分類できると考える。組織要因は「コストの低さ」と「活動の内容」に分類できる。阻害要因も個人要因と組織要因より構成される。個人要因はさらに、「言語力不足」、「余暇時間不足」、「情報収集力不足」、「社会関係資源不足」、「『個人主義』志向」という5つの中カテゴリーに分類できる。組織要因は、「情報発信不足」、「コスト」、「活動内容」、「差別の抑制の失敗」の4つから構成される。

本研究は主に組織側に提言するため、参加要因と阻害要因の中での組織要因に注目する。なお、提言の際、個人要因も含めて考える。

参加要因と阻害要因の中での組織要因は、大きく「情報発信不足」という“活動の宣伝”と、「コスト」という“活動の運営”“活動内容”“差別の抑制”に整理される。地域国際交流活動への参加を促すにはまずもって阻害要因を抑制することが必要である。加えて参加要因をより伸ばすことは地域国際交流活動への参加を阻害しないようにするだけでなく、地域国際交流活動へのさらなる参加の拡大に貢献する。そのため、以下では参加要因も踏まえ、提言を行う。

提言と参加要因と阻害要因の対応関係は次のページの表46の通りである。

表 46 提言と参加要因と阻害要因の対応関係表

対象	提言	具体的方法	阻害要因	参加要因
学校外の組織	①活動の宣伝	A 組織紹介	情報収集力不足	消極的参加
		B 奨学金受給学生の発信	情報発信不足 社会関係資源不足	友人関係
すべての組織	②活動の運営	C 手続きの簡単化	コスト(手続き) 余暇時間不足	コストの低さ (手間コスト) 時間の余裕
		D ニーズの把握と参加費の削減	コスト(人数) コスト(費用)	コストの低さ (金銭的成本)
		E 活動の場所の利便性	コスト(距離) 余暇時間不足	時間の余裕
		F 開催時間の調整	余暇時間不足	時間の余裕
	③活動内容	G 活動内容の変化	活動内容 個人主義志向 言語力不足	活動の内容 他人への貢献意識 知識の学び及ぶ発揮 自己肯定感
	④差別の抑制	H 多文化共生意識啓発	差別の抑制の失敗	
		I 差別行為の規制		

### ①活動の宣伝

八王子国際協会など学校外の組織は毎年様々な国際交流活動を留学生に提供している。しかし、インタビュー調査から、学校外の活動に参加した経験がある学生は学校内の活動に参加した経験がある学生より少ないということを示された。その理由は主に留学生が学校外の活動の情報を知らないからだということであった。

インタビュー調査により、留学生は情報がわからない理由については、大きく、自分から情報を集めない、あるいは集める方法が分からないという個人的な要因と、組織側が提供している情報を留学生の手元に届けていないという組織的な要因の二つがあることが示された。

第六章では、留学生が情報を知らない原因は、留学生の中で自ら情報を探すが少ないということが示された。自ら情報を調べるよりは、友達や学校からのメールなど受動的な方法で情報を入手する留学生が多い。このように留学生が自ら情報を探さない理由について、主に学校外の組織の存在を知らないことにより、どこで活動の情報を入手することができるのかがわからないことと、大学の国際課・国際センターで活動の情報を入手することができるかも知っても、国際課・国際センターが遠いため、普段は行かないということが挙げられた。

また、組織側の要因である「情報発信不足」について、筒井(2001)<sup>11)</sup>はボランティアの募集方法について、活動希望者、ボランティアセンターの登録者にメールなどを用いて情報を伝え、ボランティアセンターに登録しているグループに依頼すること、小地域のボランティアセンターへの依頼、新聞やNHKなどのマスコミによる募集、ミニコミ・広報などの利用、学校(教師)への呼びかけという一般的な方法を提示した。しかし、学校外の組織もほぼ以上の方法を利用し、発信しているということが、インタビュー調査により示されており、その情報が留学生のところに届いていないという現状が明らかになった。

その理由として、まず、自ら情報を探すよりは、多くの留学生は友達や学校からのメールなど受動的な方法で情報を入手していることが明らかになった。しかし、インタビューによると、すべての留学生の連絡方法を知っているわけではないため、直接にメール送信の方法により連絡できない。そのため、すべての留学生は直接に学校外の組織から情報を入手することはできない。

一方、連絡方法を知らなくても、組織側はすべての留学生に直接に活動のパンフレットを渡すという方法がある。しかし、インタビューにより、組織側は直接に留学生にパンフレットを配るなら、パンフレットの印刷費用や人件費などコストがかかる。現在の予算により、この方法は実現できないということが明らかになった。

情報が留学生のところに届いていないもう一つの理由について、留学生は若い年齢層の方であるため、ポスターや広報誌など古い宣伝方法よりは、SNS を利用した方が留学生にとって役に立つということも考えられる。学校外の組織が自ら情報を発信することは限界があり、すべての留学生に直接連絡することはできない。そのため、学校外の組織が国際課・国際センターに情報発信を依頼した。しかし、この情報を国際課・国際センターの掲示板にのみ掲示するのであれば、活動の情報を読む留学生が少ないというのが現状である。

以上を踏まえ、以下の提言ができると考えるであろう。

**A 組織の紹介：**留学生が八王子市の大学に入学する時、学校内の組織を協力し、八王子国際協会など学校外の外国人を支援する団体を紹介し、その存在と重要性を留学生に知らせる。

**B 奨学金受給生の情報発信：**八王子市奨学金を受給している学生に自分が所属している組織やグループに活動の情報を発信する。

以下は二つの提言を出した理由について説明する。

A) 組織の紹介については、留学生へのインタビューにより、留学生が学校外の組織の存在を知らないということが示された。また、阻害要因の中で、留学生の情報収集力が足りないという要因があり、自ら情報を探す学生が少ないということが明らかになった。留学生が組織の存在を知らないため、どこで学校外の組織の活動の情報を探せるのか分からないのである。以上のことから、留学生が八王子市の大学に入学する時、学校や八王子市は学校外の組織を紹介し、その存在と重要性を留学生に知らせることで、留学生が活動に参加したい時、それらの組織のHPやSNSで活動の情報を簡単に入手することができると考

える。

B) 奨学金受給生の情報発信については、インタビュー調査により、組織発信力不足が阻害要因の一つとして提示された。第六章では、自ら情報を収集する留学生が少ないため、活動の情報を留学生の手元に届けていないということが示された。しかし、学校外の組織と直接に接触できる留学生が少ないため、大学の国際課・国際センターと留学生組織のようにすべての留学生に直接メールやLINEなどを通じて告知することはできない。また、各大学の国際課・国際センターに情報の発信を依頼しても、各大学の国際課・国際センターの発信方法により、留学生は学校外の情報を入手していない可能性がある。そのため、すべての留学生に情報を知らせることができない。

学校外の組織が直接連絡できるのは八王子市奨学金を受給している学生である。八王子市外国人留学生奨学金制度により、八王子市には留学生への奨学金があり、奨学金を受給している学生は活動に参加する義務があるということが定められている。そのため、現在、活動に参加しているのはほぼ奨学金を受給している学生だけである。もし、奨学金を受給している学生に自分が所属している留学生組織やグループに活動の情報を発信させてもらえば、奨学金を受給している学生だけではなく、他の学生も活動の情報を分かるようになるだろう。

また、参加モデルでは「友人関係」という要因があり、阻害要因モデルでは「社会関係資源不足」という要因を提示されたが、この二つの要因は主に一緒に活動に参加する友達がいれば参加するということである。もし、奨学金を受給している学生が自分が所属している留学生組織やグループに活動の情報を発信すれば、奨学金を受給する学生の友達も参加する可能性があり、さらに奨学金を受給する学生の友達の友達も参加する可能性がある。それゆえ、より多くの留学生が参加に結びつくのである。

## ②活動運営

インタビュー調査により、「コストの低さ」という参加要因とその裏返しとして「コスト」という阻害要因が示された。組織側が設定したものが留学生の地域国際交流活動への参加に影響しており、それは活動の運営に関連している。活動の運営については、C) 手続きの簡略化、D) ニーズの把握と参加費の削減、E) 活動の場所の利便性、F) 開催時間の調整が提言できる。

### C 手続きの簡略化

インタビュー調査の分析から、コストという阻害要因の中で、「手続き」という小カテゴリーが現れた。それは活動の申請という手続きの時間が留学生にとって長いあるいは複雑であるため、参加しないということである。組織側は留学生との連絡を確保するなどのために、申請の手続きの中で、様々な個人情報などを入力する必要がある。しかし、一部の留学生にとって複雑である。

また、インタビュー調査で留学生は「余暇時間不足」であるため、活動に参加しないという阻害要因が明らかになった。手続きが複雑になると、言語力不足の留学生にとって、より時間がかかる可能性がある。そのため、活動に参加しないのである。

また、参加要因では「コストの低さ」があり、その中で「手間コスト」という小カテゴリーがあった。「手間コスト」は主に留学生にとって手間コストをかけずに簡単に参加できるということである。

留学生は活動の手続きに時間をかけたくないであり、できるだけ簡単な手続きにする必要があるだろう。

#### D ニーズの把握と参加費の削減

インタビュー調査における阻害要因の中にみられた「コスト」という要因の中には、「人数」という小カテゴリーがある。これは活動に参加したいが、人数の制限で参加できない留学生がいるということである。しかし、一部の活動は人数を制限しているにもかかわらず、参加人数が集まらないという問題がある。それに対して、筒井(2001)<sup>11)</sup>はボランティア・コーディネーターの8つの役割を提示し、その中で、受けとめるという役割があると述べている。それはボランティアを求める側とボランティアをやりたい側のニーズを把握することである。地域国際交流活動も同じく、留学生がどんな地域国際交流活動に参加したいというニーズを把握した上で、活動を企画する必要がある。組織側は留学生のニーズを把握した上に活動を企画した。しかし、時代の変化により、留学生のニーズも変化してきた。インタビュー調査の際、すべての組織が留学生のニーズの変化を把握した後で活動を調整するわけではないということが明らかになった。つまり、留学生のニーズにより、活動を調整することが必要である。具体的には、留学生が参加するニーズが高い活動の参加規模を拡大し、毎年参加者がいない活動の活動について、規模を縮小する、あるいは活動を停止するということである。

そして、参加「費用」の高さも留学生の地域国際交流活動への参加の阻害要因の一つである。また、「金銭的成本」が低いことも留学生の参加要因の一つである。毎年参加者がいない活動を停止する代わりに、留学生のニーズが高い活動について、留学生にとって参加しやすい費用を設定すれば、より多くの留学生が参加したくなると思われる。

#### E 活動の場所の利便性

柴田(2007)<sup>10)</sup>は活動の場へのアクセスや交通の利便性が高齢者の社会参加の関連要因の一つだと述べている。インタビュー調査で留学生が活動に参加できない最も多い要因は「余暇時間不足」ということであった。留学生は授業とアルバイトで忙しいため、遠い場所での活動には参加できないのである。

第三章により、組織側は交通の利便性が高い場所で活動を開催するために、大部分の地域国際交流活動は八王子駅周辺、あるいは大学キャンパス内で開催していることが明らか

になった。しかし、留学生にインタビューした時、一部の留学生は八王子駅周辺が遠いと回答した。それゆえ、活動の場所を学校の近くに設定すると、留学生が参加しやすくなると思われる。学校が遠いと回答した留学生がいた。しかし、留学生はほぼ毎週学校に行く必要があるため、もし、活動は学校の周辺で開催すれば、学校から帰るとき、ついでに活動に参加することができる。それならば、学校に行く以外の移動コストをかけなくても、活動に参加できる。

## F 開催時間の調整

活動の開催時間は様々な要因を含めて決めたものである。留学生の余暇時間は一つの要因である。インタビュー調査では留学生の「余暇時間不足」という阻害要因と「余暇時間」という参加要因も提示された。開催時間が平日やテスト期間など留学生にとって忙しい時期であると、留学生は参加できない可能性が高いことも明らかになった。それゆえ、留学生が忙しくない時間に活動を設置することが重要であると考えられる。

## ③活動内容

### G 活動内容の変化

インタビュー調査によると、八王子国際協会、大学コンソーシアム八王子、八王子市の地域貢献活動、大学の国際課・国際センターの活動の内容は毎年ほぼ同じであることが明らかになった。しかし、組織にインタビューした際、一部の活動には参加者が集まらないという現状が判明した。留学生の参加者が集まらなると、活動に関する事業費が無駄になる。留学生を集められる活動を開催することが必要である。

では、どのような活動は留学生を集めることができるのか。第五章では、「知識や技術の学び及び発揮」という要因がインタビュー調査で提示され、留学生は日本文化など新しい知識を学ぶために、活動に参加することが分かった。また、同じく、第五章では「活動内容」がよいため参加することも提示された。第六章では、留学生は「活動の内容」の固定化と重複などにより、活動に参加しないと示された。

留学生は来日して間もない時は、様々な活動に新鮮さを持つため、積極的に活動に参加する。しかし、一度活動に参加して、もし、次の活動や交流の内容が変わらないのであれば、活動を通して新しい知識が学べないため、活動に参加しなくなるようである。また、他の組織と似たような活動があれば、活動に参加しないということも明らかになった。同時に、日本語あるいは英語の「言語力不足」の留学生も参加できるようにするために、様々なレベルの活動も必要だと言える。

インタビュー調査によると、留学生は体験したことがない活動に参加したいという傾向がある。この傾向に対応するためには、地域国際交流活動の内容は毎年少しずつ変える必要があると言える。活動の内容の変化とは活動の種類の変化と一つの活動の中身の変化と



いう二つの意味がある。ここで言う活動の種類の変化は今の活動を停止し、新しい活動を開催するという活動のそのものを別のものに変えることである。たとえば、旅行活動を停止し、就職支援活動を開催するということである。特に、他の組織が開催してない活動を行われれば、留学生は新しいものを体験したいと考えるため、参加する可能性が高い。しかし、組織側へのインタビューにより、事業の枠組みが決められたため、活動自体も変化させることが難しい活動もある。それらの活動については、活動の中身を変化し、あるいは他の組織の活動との異なるところを説明することが必要であると考えよう。一方、活動の中身を変化させることとは、主に活動の企画内容の変化である。具体的には、活動のプロセスの変化、活動に参加するために日本語のレベルの変化などが含まれる。例えば、ある活動を毎年、担当教員のスピーチ、留学生の交流という流れで行う。担当教員のスピーチ内容も同じであり、留学生側に続けて参加したくないという気を起させる。そのため、この活動では文化の紹介など他のコーナーを設置することにより、留学生に新鮮さを感じさせる工夫が求められよう。このような努力により、留学生の参加を促す可能性が広がると考えられる。

留学生の参加要因には「他人への貢献意識」と「自己肯定感」がある。活動内容を変化させると、留学生が様々な活動で他人を手伝うことができ、それにより、自己肯定感を高めることができる。一方、留学生の「『個人主義』志向」により、すべての活動に参加したいというわけではない。もし、活動の内容が常に変化することにより、留学生にとって興味がある活動と出会う機会が増えれば、留学生が参加するようになる可能性が拡大すると考える。

#### ④差別の抑制

田中(1996)<sup>14)</sup>の在日中国人留学生 327 人を対象とした調査においては、41%の中国人留学生は日本留学の不満として「アジア留学生を差別する傾向がある」と答えている。インタビュー調査でも、活動への参加者から国籍の差別を受けることについて心配している学生がいた。留学生は国際交流や地域に溶け込むなどの目的で活動に参加するが、他の参加者からの差別を受ければ、参加したくなくなる可能性が高い。つまり、差別の抑制が必要だと言える。差別を抑制するために、以下の二つの提言ができよう。

#### H 多文化共生意識啓発

差別を抑制する方法の一つとして、八王子市で多文化共生意識啓発期間を利用し、多くの年齢層の人に多文化共生理解教育の実施が必要だと考えられる。特定の民族や国籍の人々を排斥する差別的言動であるヘイトスピーチを解消するために、2016年6月、「本邦外出身者に対する不当な差別的言動の解消に向けた取組の推進に関する法律」が実施され始めた。この法律の第七条において、「国は、本邦外出身者に対する不当な差別的言動の解消の必要性について、国民に周知し、その理解を深めることを目的とする広報その他の啓発

活動を実施するとともに、そのために必要な取組を行うものとする。<sup>44</sup>」とされ、外国人の差別を解消する啓発活動が基本的な施策として定められている。

八王子市では、多文化共生の意識は子供から啓発する必要だと認識し、小学生向けの国際理解教育を開催している。しかし、他の年齢層への国際理解教育などは開催していない。一方、八王子市多文化共生推進プランの改訂版では毎年度の特定の月を対象とした多文化共生意識啓発期間を設定している。この期間を利用し、各年齢層の人に多文化共生意識を啓発する活動を行うということが差別の抑制への方策への選択肢として挙げられる。

## I 差別行為の規制

しかし、多文化共生意識を啓発しても、すぐ留学生への差別が解消するわけではない。差別が解消されるまでには時間がかかろうと考える。その間、留学生が活動で差別を受けられる可能性がある。留学生へのインタビュー調査から、ある活動には外国人を差別する参加者が毎年いることが分かった。差別行為を行う人物への対策が必要だと考える。

今まで差別行為の対策がない理由について、留学生は差別行為を受けても、差別行為を取り締めるために、誰かに話すべきかがわからない。それゆえ、組織側が差別行為を把握できない。一方、留学生が活動のアンケートに記入しても、差別行為を行う人物を特定できないため、対応できない。

そのため、組織側は差別行為を行う人物への体制づくりが必要だと言える。その体制を作るために、まず、活動の配りの資料で、差別行為を受けた時の対応方法を記入する必要がある。組織側が差別行為を把握した上で、この体制により、活動で留学生への差別行為が行われれば、組織側は差別行為を取り締まり、差別行為を行う人物を会場から退去させることが可能となる。地域国際交流活動はオープンスペースで行われるため、誰でも入場することができる。故に、留学生を差別している人物に入場を禁止することができない。そのため、活動で留学生に対して差別行為を行う人物が発見されたら、組織側の職員がこの人物に活動の目的を説明し、差別行為を停止してもらおう。もし、差別行為を続けるなら、組織側はこの人物を会場から退去させることが必要であると考えられる。

---

<sup>44</sup> 衆議院 HP(2019年1月8日)

[http://www.shugiin.go.jp/internet/itdb\\_housei.nsf/html/housei/19020160603068.htm](http://www.shugiin.go.jp/internet/itdb_housei.nsf/html/housei/19020160603068.htm)

阻害要因

提案

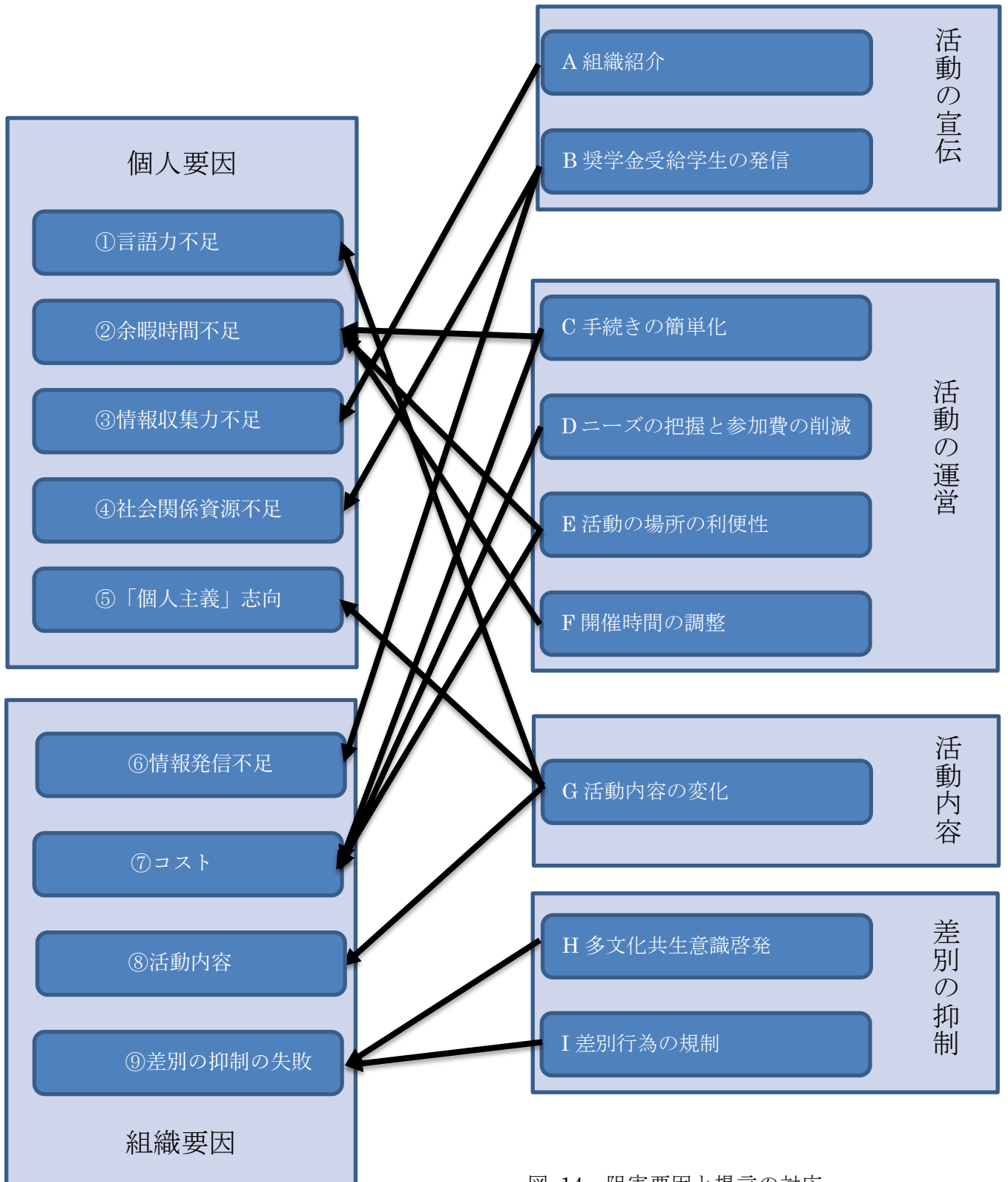


図 14 阻害要因と提言の対応

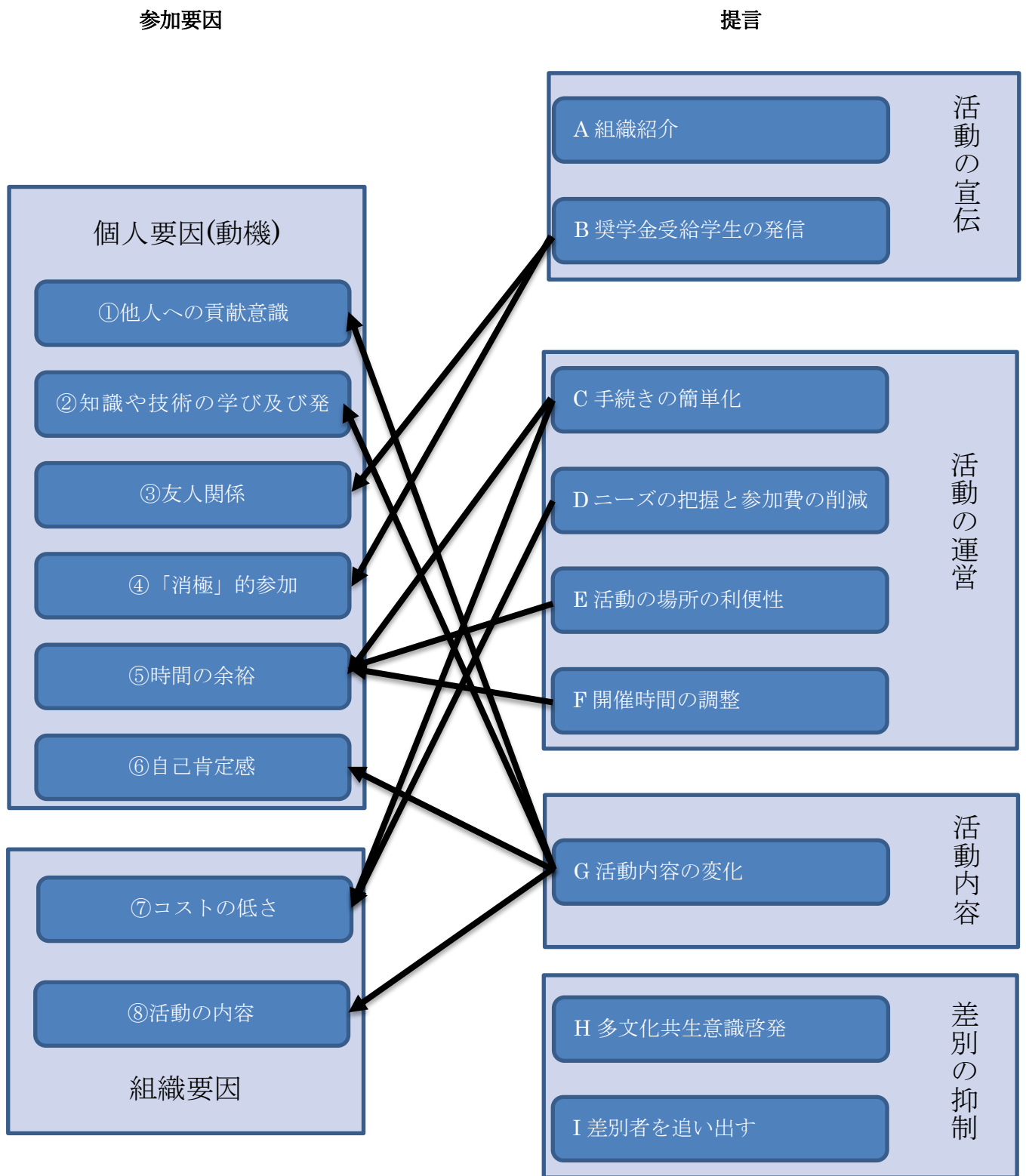


図 15 参加要因と提言の対応

## 第八章 まとめ

本章は本研究をまとめて、留学生が地域国際交流活動に参加する参加要因と阻害要因について得られた知見を記述する。その後、本研究の限界を記述する。

### 8-1 本研究の知見

本研究は、留学生が八王子市、八王子国際協会、大学コンソーシアム八王子、各大学の国際課・国際センター、各留学生組織が行う地域国際交流活動への参加の現況と参加要因と阻害要因に注目し、多くの留学生を地域国際交流活動に参加させるために、地域国際交流活動を開催する組織側に活動を開催する時の留意点について提言することを目的とする。

以上の目的を明らかにするために、上記の組織の活動を整理した後、八王子市の大学に在籍している留学生 31 人にインタビュー調査を行い、地域国際交流活動への参加状況、参加理由と参加しない理由が明らかになった。

インタビュー調査によると、31 名の学生の中で 29 人が地域国際交流活動に参加したことがあるということが明らかになった。また八王子市、八王子国際協会、大学コンソーシアム八王子という学校外の組織と比べ、留学生は各大学の国際課・国際センター、各留学生組織という組織の活動に参加した人数が多いということが明らかになった。

留学生の「地域国際交流活動」への参加要因と阻害要因を分析するために、外国人の地域参加、ボランティア活動への参加、市民参加、高齢者参加などの先行文献から、留学生の「地域国際交流活動」に関連する可能性がある要因を取り出し、参加要因仮説モデルと阻害要因仮説モデルを作成した。その後、インタビュー調査による質的データの検討より、修正版の参加要因モデル及び阻害要因モデルを析出した。

参加要因は個人要因(動機)と組織要因に分類できる。個人要因はさらに「他人への貢献意識」「知識や技術の学び及び発揮」「友人関係」「『消極』的参加」「時間の余裕」「自己肯定感」という 6 つの中カテゴリーに分類できる。「知識や技術の学び及び発揮」は“文化体験”“新鮮さ”、“知識の学び”、“技術の発揮”に分けられる。「友人関係」を“友達作り”、“友人との参加”“国際交流”に分けられる。そして、「『消極』的参加」は“断れなさ”と“授業の義務”から構成される。一方、組織要因は、「コストの低さ」と「活動の内容」に分けられる。前者の「コストの低さ」は主に“手間コスト”と“金銭的成本”からなる。(図 16)

阻害要因も個人要因と組織要因から構成される。個人要因はさらに、「言語力不足」、「余暇時間不足」、「情報収集力不足」、「社会関係資源不足」、「『個人主義』志向」という 5 つの中カテゴリーに分類できる。「言語力不足」は“日本語力不足”と“英語力不足”より構成される。「余暇時間不足」は“時間不足”と“経済力不足”からなる。そして、「『個人主義』志向」は「消費者」志向、自己「保護」志向、友人関係の「固定」志向に分類できる。一方、組織要因は、「情報発信不足」、「コスト」、「活動の内容」、「差別の抑制の失敗」に区分される。その中で、「コスト」はさらに“距離”、“手続き”、“費用”、“人数”より構成される。「活動内容」で

は“活動の固定化”“活動の重複”“新鮮さの喪失”“交流内容の固定化”が下位分類となる。(図 17)

以上の参加要因と阻害要因を踏まえ、本研究では、留学生の「地域国際交流活動」への参加を促すために、「活動の宣伝」、「活動の運営」、「活動の内容」、「差別の抑制」の4つの領域について提言した。活動の宣伝は、学校内の組織と協力し、学校外の組織の存在と活動を留学生へ紹介することと、八王子市奨学金受給生に学校外の組織の活動の情報を発信させてもらうということである。「活動の運営」については、できるだけ留学生にコストがかからないようにするために、手続きの簡略化、ニーズの把握と参加費の削減、活動の場所の利便性、開催時間の調整ということが柱となる。「活動の内容」については、インタビュー調査で活動の内容の固定化などの問題点が提示されており、活動の種類を豊かにし、多様なものにすることが求められると言える。そして、最後の差別の抑制とは、「地域国際交流活動」における留学生への差別を抑制するということである。そのためには、八王子市の多文化共生意識啓発期間を利用し、多文化共理解教育の開催し、意識啓発活動を行うこと、そして、「地域国際交流活動」で差別行為を規制する体制づくりも重要である。

以上のモデルと提言は、多くの留学生が「地域国際交流活動」に参加することができる条件のあり方を示したものであり、多文化共生社会の推進に寄与するものとなる。

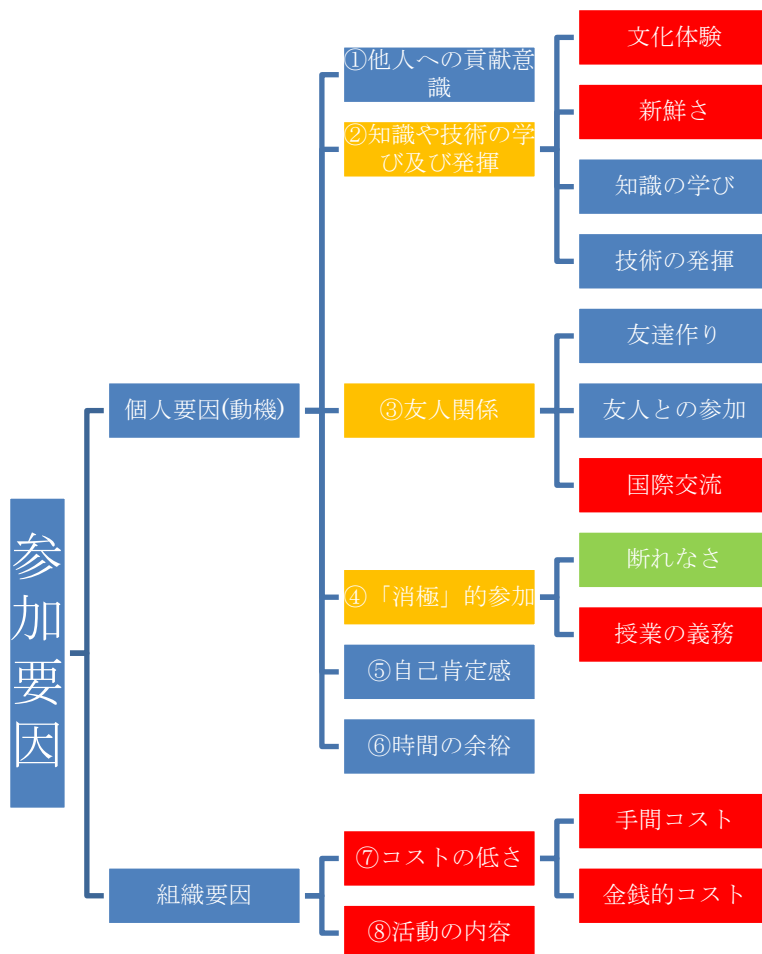


図 16 参加要因モデル(修正版)の再掲

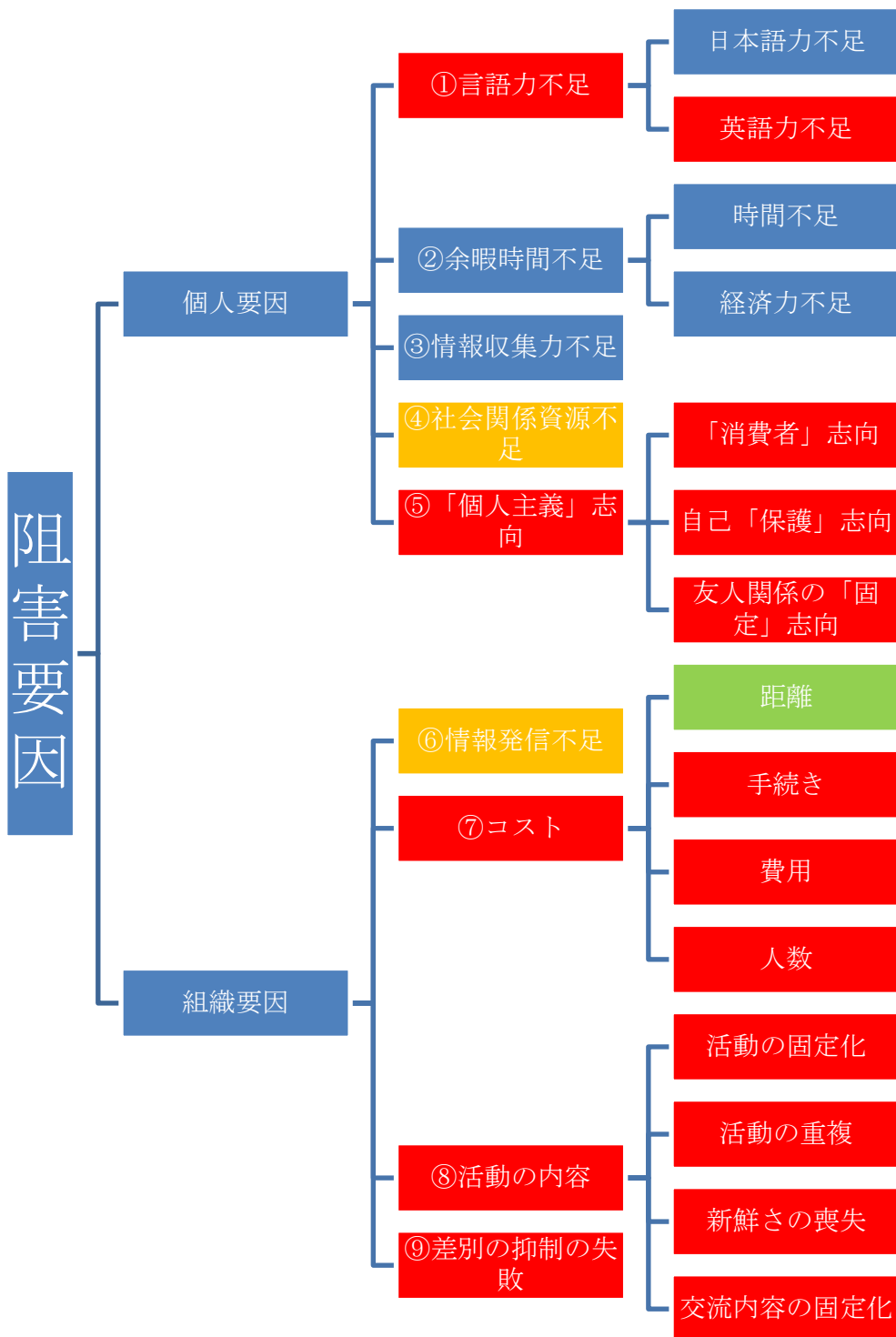


図 17 阻害要因モデル(修正版)の再掲

## 8-2 今後の課題と本研究の限界

本研究におけるモデルと提言は、多くの留学生が「地域国際交流活動」に参加することができる条件のあり方を示したものであり、多文化共生社会の推進に寄与するものとなる。しかし、本研究のインタビュー調査、モデル、提言の三つの部分に限界がある。

### インタビュー調査

本研究は機縁法と応募法で八王子市の大学に在籍している留学生を募り、インタビュー調査を行った。しかし、インタビュー調査に応じた留学生の国籍の割合には偏りがある。今回のインタビュー対象者は中国人が多く、他の国籍の留学生が少ない。その理由はインタビュー時間が調整できないこと、また、日本語でインタビューを受ける自信がある留学生が少ないことである。さらに、インタビュー調査に応じた5つの大学の留学生の人数には偏りがある。首都大学東京の留学生の割合が高いが、他の大学は筆者の在籍校でないため、インタビュー調査に応じた学生が少なかった。また、筆者と調査対象者の日本語の能力により、本研究は限界がある。

そして、本研究で定義した地域国際交流活動を開催する学校外の組織すべてにインタビュー調査を行ったが、学校内の組織について、すべての大学の国際課・国際センターと留学生組織にインタビューすることはできなかった。その理由は筆者の在籍校でないため、資料が公開できない場合と公開されていない場合がある。そのため、一部のデータが収集できなかった。

### モデル

本研究の仮説モデルでの参加要因と阻害要因はボランティア活動の参加、市民参加、外国人の地域参加などの文献から取り出した要因を留学生の現状と照らし合わせ、考察し、仮説モデルを考案した。

しかし、本研究は探索型の質的研究であるため、要因間の相互作用については十分に議論されていない。また、要因間の重み付けは本研究のフレームに入れていない。それは今後の課題であると考えられる。

また、ボランティアモチベーションの先行文献に参照したモデルの個人の参加要因を構築したため、本研究で他の個人要因は検討していない。それに、本研究では留学生の参加要因と継続的に参加する要因を分けていないため、これは今後の課題であると考えられる。

そして、本研究は定量的調査ではないため、要因を解釈する際に研究者自身の経験が分析に何らかの影響を及ぼした可能性があることを否定できない。今後定量的研究で仮説モデルを検証することが必要である。

### 提言

本研究で提言したことが実際に効果があるかどうかについての検証も今後の課題であると考えられる。



## 参考文献

1. 川口清史・新川達郎・田尾雅夫(2005)『よくわかる NPO・ボランティア』ミネルヴァ書房
2. 桜井政成(2007)『ボランティアマネジメントー自発的行為の組織化戦略 (NPO マネジメントシリーズ)』ミネルヴァ書房
3. Clary, E. G., Snyder, M., Ridge, R. D., Copeland, J., Stukas, A. A., Haugen, J., & Miene, P. (1998). Understanding and assessing the motivations of volunteers: A functional approach. *Journal of Personality and Social Psychology*, 74(6), 1516-1530.
4. 坂野純了・矢嶋裕樹・中嶋和夫(2002)「大学生における Volunteer Function Inventory の交差妥当性の検討」岡山県立大学保健福祉学部紀要 9(1) pp24-31
5. 篠原一(1977)『市民参加』岩波書店
6. 亀田千里(2015)「筑波学院大学オフ・キャンパス・プログラムにおける留学生の社会参加活動について」筑波学院大学紀要 10 pp181-189
7. 大阪市外国籍住民施策検討に係る生活意識等調査実行委員会(2009)「外国籍住民のコミュニティ生活意識実態調査 外国籍住民との共生社会実現のための意識調査報告書」
8. 近藤有美・川崎加奈子(2015)「留学生を情報弱者たらしめるものの実態:留学生による防災情報収集活動での事例の分析を通して」言語文化教育研究 13(0) pp118-133
9. 森岡清志(2016)『社会学入門』放送大学教育振興会
10. 柴田博・長田久雄・杉澤秀博編(2007)『老年学要論：老いを理解する』建帛社
11. 筒井のり子(1995)『ボランティア・テキストシリーズ7「ボランティア・コーディネーター」その理論と実際 (ボランティア・テキストシリーズ (7))』大阪ボランティア協会
12. 榎田勝利(2004)『国際交流の組織運営とネットワーク (国際交流・協力活動入門講座)』明石書店川喜田二郎(1967)『発想法ー創造性開発のために』中央公論社
13. 谷富夫・山本努(2010)『よくわかる質的社会調査 プロセス編』ミネルヴァ書房
14. 西平隆樹(2014) 「『中国留学発展報告』に見る中国人留学生事情」「自治体国際化フォーラム」3月号
15. 川喜田二郎(1967)『発想法ー創造性開発のために』中央公論社
16. 田中共子(1996). 「日本人チューター学生の異文化接触体験(2) その役割と異文化交流に関する質問紙調査」広島大学留学生センター紀要 7 pp84-108.

## 謝辞

本研究を遂行するにあたり、多くの皆さまにご指導及びご協力いただきましたことに心より感謝申し上げます。

まずに、毎年の都市ゼミでは、多角的な視点で助言をいただいた都市システム科学域の先生方と都市政策の先生方にお礼申し上げます。

特に、指導教授である長野先生には長い期間にわたり、研究の進め方や論文の書き方など、ひとかたならぬご指導を賜りました。どれほど言葉を尽くしても足りないほど、感謝しております。最後まで本当にありがとうございました。

また、八王子市、八王子国際協会、大学コンソーシアム八王子、首都大学東京国際課・国際センターの職員の方々に、本研究のインタビューと資料の提供にご協力賜りましたことを心からお礼申し上げます。

そして、貴重な時間を割りインタビューにご協力頂いた留学生の方々に深く感謝します。留学生を紹介していただいた首都大学東京国際センター先生方に心より感謝いたします。最後に、同ゼミで研究の議論にいつもお付き合い下さった皆様にも大変お世話になったことに深く感謝しております。



杜明慧 殿

平成30年 8月 9日  
 首都大学東京研究安全倫理委員会（南大沢キャンパス）  
 委員長 相垣 敏郎

下記実験計画が平成30年度研究安全倫理委員会で承認されたので通知します。

承認番号		H30-96	
区分		所属（職名）	氏名
申請者	研究代表者	都市環境科学研究科 都市システム科学域（博士前期課程学生）	杜明慧
	研究倫理責任者 <sup>注1</sup> （必要がある場合のみ記入、その際、氏名欄にメールアドレスを併記）	都市環境科学研究科 都市システム科学域（准教授）	長野基 nagano@tmu.ac.jp
	研究分担者 <sup>注2</sup>	特になし	特になし
研究テーマ		日本に来た留学生の地域活動への参加に関する研究—八王子市を例にして—	
研究内容の分類 <sup>注3</sup> （該当研究に○）		1. ヒトゲノム・遺伝子の研究 2. ヒト臓器・細胞の研究 3. 人を対象とするその他の研究	
研究計画の概要 <sup>注4</sup>		本研究では、八王子市に居住する外国人留学生を研究対象として、地域の活動への参加状況、その参加する理由、及び、参加しない理由を明らかにする。そして、以上を基に、地域活動に関心を持っているが実際に参加したことがない留学生が地域の活動に参加するための方法を提言し、もって、地域活性化に寄与することを目的とする。	
次年度研究継続予定の有無		なし	
研究対象者		八王子市の大学に在籍している大学生と専門学校に在籍している学生。30人程度。応募法や機縁法を使い、研究対象者を募集する。	
倫理的配慮のための方法	研究対象者への影響 （身体的・精神的負荷、その他リスク）と対策・措置	インタビュー調査には1時間程度と考えるが、研究対象者に身体的・精神的負荷をかけないため、インタビュー途中で休み時間を設け、やさしい日本語を使う。	
	研究対象者への説明方法・同意確認、謝金の支払 <sup>注5</sup>	インタビューを行わせていただく留学生の方へは、調査内容やプライバシー保護などを記載した依頼書を事前にメールで送る。また、インタビュー前に口頭でも説明を行い、同意を得て、同意書にサインをしていただくようにする。そして、対象者の同意が得られた場合にのみインタビューを行う。インタビューへの参加に同意しないことをもって不利益な対応を行うことは一斉ない。もし、インタビューの途中で対象者が不快を感じた場合、あるいは答えられない場合は強制的に答えを求めるとも決して行わない。インタビューへの参加は任意であること、また同意後であっても、いつでも不利益を受けることなく撤回することができることを事前に、十分に説明する。謝金の支払いはない。	
	データ収集方法・処理におけるプライバシー保護のための措置	ICレコーダーでインタビューの内容を録音する。データ処理する時と修士論文を公表する時、個人の名前が特定できないように配慮する。インタビューの内容は修士論文研究のみに使用し、それ以外の目的では使用しない。また、個人情報は一切に公開しない。研究代表者だけが録音データの逐語録を作成する。音声データ等の個人情報が含まれるデータをパソコンで処理する際は、インターネットに接続していないパソコンを使用し、マスターCD以外にUSB等の媒体にはコピーしないことを徹底する。卒業後は指導教員が鍵のかかる保管庫等にて概ね5年程度保管する。	
	研究成果の公開方法など	修士論文で公開する。研究対象者の名前を公開しない。	
	その他特記事項	特になし	
継続・修正の場合	今年度承認番号		
	変更・追加点 （軽微なものも記入すること）		
備考			

## 調査票

1. あなたがどんな地域活動に参加したことがありますか  
您参加过那些地区活动
  
2. その活動に参加した理由(きっかけ)は何ですか  
您参加这些地区活动的理由是什么
  
3. その活動をどこからお知りになりましたか  
您从哪里知道这些活动的
  
4. 今まで参加した活動について、足りないところがありますか  
至今为止参加过的活动有什么不足的需要改善的地方
  
5. あなたにとって、地域活動の参加の阻害要因は何ですか  
您认为是什么原因阻止了您参加这些活动呢
  
6. 個人の属性
  - 国籍
  - 学校
  - 所属
  - 年齢
  - 性別
  - 日本に住んでいる時間
  - 親しい友人の数

## 同意書

公立大学法人首都大学東京(杜明慧)殿

**研究テーマ**：日本に来た留学生の地域活動への参加に関する研究—八王子市を例にして—

私は、本研究への参加に先立ち、本研究に関する説明を受け、その内容を理解しましたので、自らの意思により本研究への参加に同意します。同意する証として署名のうえ、本書を提出します。

研究参加者署名

年 月 日

連絡先

研究者氏名：杜明慧

連絡先：

## 同意書

公立大学法人首都大学東京(杜明慧)同学

研究题目：关于来日留学生参加地区活动的研究——以八王子市为例——

我已经接受研究内容的说明，充分理解了研究内容。因此我自愿参加本次研究。作为同意的证明，我在本同意书上签字。

研究参加者签名

年 月 日

联络方式：

研究者姓名：杜明慧

联络方式：

## 依頼書(大学・留学生会向け)

〇〇大学

国際課/国際センター/留学生会様

留学生の地域活動参加に関するインタビューへのご協力をお願い

拝啓

盛夏の候、ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。

私は首都大学東京大学院 都市環境科学研究科都市システム科学域 長野研究室の杜 明慧（と めいけい）と申します。

私は、多文化共生社会の実現が目指される日本における、「日本に来た留学生の地域活動への参加に関する研究」を修士論文のテーマとして、研究を実施しております。

この研究においては、八王子市の地域活動の種類と留学生の参加状況、留学生が地域活動に参加する理由、そして、参加しない理由を分析し、それを踏まえて、留学生の地域活動への参加の推進方策の提案を目指しております。

つきましては、お忙しいなか、たいへん恐れ入りますが、八王子市の大学に在籍している留学生に地域活動の参加状況や課題について1時間ほど(最大1時間半)インタビューさせていただきたいと存じます。併せて、お許しいただけるならば、このテーマについて活動中の留学生様をご紹介いただけましたら幸いです。

上記留学生の皆様へのインタビュー調査はおひとり1時間程度を予定しますが、研究対象者に身体的・精神的負荷をかけないため、インタビュー途中で休み時間を設け、やさしい日本語を使います。

インタビューを行わせていただく留学生の方へは、調査内容やプライバシー保護などを記載した依頼書を事前にメールで送ります。また、インタビュー前に口頭でも説明を行い、同意を得て、同意書にサインをしていただくようにいたします。そして、対象者の同意が得られた場合にのみインタビューを行います。インタビューへの参加に同意しないことをもって不利益な対応を行うことは一斉ございません。もし、インタビューの途中で対象者が不快を感じた場合、あるいは答えられない場合は強制的に答えを求めることも決してございません。インタビューへの参加は任意であること、また同意後であっても、いつでも不利益を受けることなく撤回することができることを事前に、十分にご説明申し上げます。

本調査は(安全な)ICレコーダーでインタビューの内容を録音します。インタビューの内容は修士論文研究のみに使用し、それ以外の目的では使用しません。また、個人情報は一切公開しません。データ処理する時と修士論文を公表する時は、個人の名前が特定できないように配慮します。研究遂行者である杜明慧だけが録音データの逐語録を作成します。音声データ等の個人情報が含まれるデータをパソコンで処理する際は、インターネットに

接続していないパソコンを使用し、マスターCD以外にUSB等の媒体にはコピーしないことを徹底します。卒業後は指導教員が鍵のかかる保管庫等にて概ね5年程度保管します。もしインタビューを録音したデータを修士論文にそのまま引用する場合は、研究対象者から承諾が得られた場合に限りです。

本調査は謝金の支払いはございませんが、修士論文が完成したのち、対象者に贈呈させていただきますことが可能です。

質問項目は以下の通りです。

- 1、地域活動に参加する経験があるかどうか
  - 2、地域活動に参加する理由、参加しない理由
  - 3、個人属性：国籍、学校、所属、年齢、性別、日本に住んでいる期間
- ご協力の程、何卒宜しくお願い申し上げます。

敬具

2018年7月26日

連絡方法



## 依頼書(留学生向け)

〇〇大学

〇〇様

留学生の地域活動参加に関するインタビューへのご協力をお願い

拝啓

盛夏の候、ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。

私は首都大学東京大学院 都市環境科学研究科都市システム科学域 長野研究室の杜 明慧（と めいけい）と申します。

私は、多文化共生社会の実現が目指される日本における、「日本にきた留学生の地域活動への参加に関する研究」を修士論文のテーマとして、研究を実施しております。

この研究においては、八王子市の地域活動の種類と留学生の参加状況、留学生が地域活動に参加する理由、そして、参加しない理由を分析し、それを踏まえて、留学生の地域活動への参加の推進方策の提案を目指しております。

つきましては、お忙しいなか、たいへん恐れ入りますが、八王子市の大学に在籍している留学生に地域活動の参加状況や課題について1時間ほど(最大1時間半)インタビューさせていただきたいと存じます。

上記留学生の皆様へのインタビュー調査はおひとり1時間程度を予定しますが、研究対象者に身体的・精神的負荷をかけないため、インタビュー途中で休み時間を設け、やさしい日本語を使います。

インタビューを行わせていただく留学生の方へは、調査内容やプライバシー保護などを記載した依頼書を事前にメールで送ります。また、インタビュー前に口頭でも説明を行い、同意を得て、同意書にサインをしていただくようにいたします。そして、対象者の同意が得られた場合にのみインタビューを行います。インタビューへの参加に同意しないことをもって不利益な対応を行うことは一斉ございません。もし、インタビューの途中で対象者が不快を感じた場合、あるいは答えられない場合は強制的に答えを求めることも決してございません。インタビューへの参加は任意であること、また同意後であっても、いつでも不利益を受けることなく撤回することができることを事前に、十分にご説明申し上げます。

本調査は（安全な）ICレコーダーでインタビューの内容を録音します。インタビューの内容は修士論文研究のみに使用し、それ以外の目的では使用しません。また、個人情報は一切公開しません。データ処理する時と修士論文を公表する時は、個人の名前が特定できないように配慮します。研究遂行者である杜明慧だけが録音データの逐語録を作成します。音声データ等の個人情報が含まれるデータをパソコンで処理する際は、インターネットに接続していないパソコンを使用し、マスターCD以外にUSB等の媒体にはコピーしないことを徹底します。卒業後は指導教員が鍵のかかる保管庫等にて概ね5年程度保管します。もしインタビューを録音したデータを修士論文にそのまま引用する場合は、研究対象者か

ら承諾が得られた場合に限りです。

本調査は謝金の支払いはございませんが、修士論文が完成したのち、対象者に贈呈させていただきますことが可能です。

質問項目は以下の通りです。

- 1、地域活動に参加する経験があるかどうか
  - 2、地域活動に参加する理由、参加しない理由
  - 3、個人属性：国籍、学校、所属、年齢、性別、日本に住んでいる期間
- ご協力の程、何卒宜しくお願い申し上げます。

敬具

2018年7月26日

連絡方法

## 依頼书

○○同学

你好，我是首都大学东京都市环境科学系都市系统修士 2 年的杜明慧。

日本正在为实现多文化共生的社会而努力，我正在写关于这方面的，题目为《关于在日留学生地区活动参加的研究》的修士论文。

这篇论文将会分析在日留学生参加地区活动的原因，不参加的原因，以及为了能够让更多的留学生参加地区而进行提案。

为了写这论文，我现在正在对在八王子市上学的留学生进行 1 小时左右的采访。我从△那里听说了你的情况，如果可以的话可以对你进行采访么。

因为采访时长为 1 小时，有可能会出现的疲惫的情况，所以我们中间会有休息时间。

采访绝不是强制性的，在采访之前我会向大家说明采访内容并向大家提供同意书，只有在得到同意之后才会进行。就算拒绝也没有关系。如果在采访途中有不想回答或者回答不出来的也没有关系，不会强制要求回答。如果想撤回前言也是可以的。

本次采访将会用录音笔进行录音。采访内容仅供我自己的修士论文使用，不会用在别的方面，所有个人情报都不会公开。在分析数据市还有写成论文时，将不会出现被采访者真实姓名。我会一个人处理数据，不会让第三者发现。并且处理数据时不会使用连网的电脑，也不会用 u 盘之类的进行拷贝。毕业之后我会将资料交给老师，老师会放到保险库里存放 5 年左右。

这次的采访虽然不会支付报酬，但是如果想看成果的话，可以提供完成版论文。

这次采访的主要问题

- 1.有没有参加过地区举行的活动
- 2.参加这些活动的理由，不参加的的理由
- 3.国籍，学校，专业，年龄，性别，来日本多长时间

希望能得到您的配合

2018 年 7 月 26 日

連絡方法